2020（令和２）年度～ 2022（令和４）年度　特別研究員奨励費
（課題番号：20J20364）研究成果報告書

埋葬施設からみた常総地域の地域構造

2023 年 2 月

研究代表者　荒井　啓汰

2020（令和２）年度～ 2022（令和４）年度　特別研究員奨励費
（課題番号：20J20364）研究成果報告書

埋葬施設からみた常総地域の地域構造

2023 年 2 月

研究代表者　荒井　啓汰

例　言

1. 本書は、科学研究費補助金（特別研究員奨励費）を受けて実施した研究の成果報告書である。研究課題、代表者、経費は以下の通りである。

   課題名：古墳時代の埋葬行為からみた「過去」と「伝統」の規範性

   課題番号：20J20364

   研究代表者：荒井啓汰（筑波大学大学院）

   直接経費：2020 年度 90 万円　2021 年度 80 万円　2022 年度 80 万円

2. 本書は荒井啓汰（Ⅰ・Ⅲ～Ⅴ）、淺野孝利（Ⅱ）、冨田　樹（Ⅵ）が執筆し、全体の構成と編集は荒井がおこなった。また、Ⅶは荒井・淺野・冨田が執筆した。

3. 用語については可能な限り統一を図ったが、各執筆者の意向を尊重して不統一の部分がある。

4. 各章は独立した論考となっているため、参考文献については各章末に記載し、挿図番号は各章ごとに付している。

5. 執筆者の所属は以下の通りである。

   荒井　啓汰（筑波大学大学院）

   淺野　孝利（筑波大学大学院）

   冨田　　樹（明治大学大学院）

6. 研究成果は以下のとおりである。

   荒井啓汰　2020「常総地域の箱式石棺からみた古墳時代後半期の埋葬行為」『考古学研究』第 67 巻第 3 号　考古学研究会

   荒井啓汰　2021a「古墳時代後半期の常総地域における埋葬方法とそのプロセス」『筑波大学　先史学・考古学研究』第 32 号　筑波大学考古学フォーラム

   荒井啓汰　2021b「古墳時代後・終末期における埋葬施設の破壊と再構築―常総地域を例に―」『茨城県考古学協会誌』第 33 号　茨城県考古学協会

   荒井啓汰・大村　陸・冨田　樹・淺野孝利　2021「筑西市野殿古墳の再検討」『茨城県考古学協会誌』第 33 号　茨城県考古学協会

   荒井啓汰　2021c「人骨出土状況からみた横穴式石室の埋葬方法―栃木県域を例に―」『栃木県考古学会誌』第 42 集　栃木県考古学会

   荒井啓汰　2021d「横穴式石室の利用期間と追葬行為―静岡県域を中心に―」『史境』第 81 号　歴史人類学会

荒井啓汰　2022a「東日本における横穴式石室の埋葬方法」『筑波大学　先史学・考古学研究』第 33 号　筑波大学考古学フォーラム

荒井啓汰　2022b「古墳時代後・終末期の埋葬行為と社会的記憶」『考古学ジャーナル』771 ニューサイエンス社

荒井啓汰編　2023『埋葬施設からみた常総地域の地域構造』（本書）

目　次

Ⅰ．本研究の背景と目的……荒井　啓汰　1

Ⅱ．古墳時代の「常総の内海」水域復原に関する一試論……淺野　孝利　5

Ⅲ．古墳時代後・終末期の鉄鏃の編年―常陸南部を中心に―……荒井　啓汰　13

Ⅳ．土器の儀礼からみた常総地域の石棺と石室……荒井　啓汰　19

Ⅴ．つくば市中台古墳群の再評価……荒井　啓汰　29

Ⅵ．埋葬施設からみた古墳時代後・終末期の常総地域……冨田　樹　43

Ⅶ．埋葬施設からみた常総地域の地域構造―流通・階層・儀礼行為―
……荒井　啓汰・冨田　樹・淺野　孝利　53

Ⅰ．本研究の背景と目的

荒井　啓汰

１．本研究の目的

本研究の目的は、石材流通・政治構造・埋葬方法などの各視点を統合し、立体的な地域像に接近することである。個別の研究として独立することが多い流通や階層構造、埋葬儀礼といった諸相を、いまいちど同一平面上で議論するために、常総地域をケーススタディとして取り上げる。

例えば、筆者は古墳時代後・終末期の埋葬施設において生者がどのように行動するかに着目した研究をおこなっている（荒井 2022）。これは、一般的には儀礼や埋葬方法といった、いわゆる「ソフト面」の検討に近いが、一方で埋葬施設の構造など「ハード面」と無関係ではなく、むしろ密接に関連している。人間の行為は埋葬施設の形状や構造が変化することによって変化するし、逆に社会規範としての埋葬行為が変化することで埋葬施設の構造も変容しうる（荒井 2020）。そのため儀礼や埋葬方法といった研究の側面は、本来「ソフト面」という枠組みの中で完結すべきものではない。埋葬施設の構造が、石材の獲得や流通、被葬者の社会的・階層的位置づけ、地域的な社会規範、他地域との交流関係といった多様なファクターによって複合的に規定されているのであれば、これらを総合的・立体的に把握する視点が必要となってこよう。

これは、埋葬施設の形状の規定要因という点と深く関連している。土生田純之が、横穴式石室の形状決定は石材が産出する自然的要因や技術的要因、被葬者の社会関係などの複合的な要因によってなされていると指摘したように（土生田 1997）、いくつかのファクターの相互作用によって最終的な石室形状が決定されているとみるべきである。そこには、必ずしも「伝播」という概念では片付けられない、複雑な要素の複合が予想される。このような観点を前提として、本研究では常総地域（茨城県南部・千葉県北部地域）を事例に、多角的な視点から古墳時代後・終末期の埋葬施設を検討したい。

２．古墳時代における常総地域の地域的特色

常総地域の古墳時代後・終末期をめぐる研究状況について概観する。先行研究、特に埋葬施設をめぐる研究については拙稿および近年の研究で整理されているためここでは割愛し（荒井 2020b・2021、冨田 2021・2022a・b、淺野 2022）、全体的な議論についてのみ簡単に触れておきたい。

「常総地域」は、茨城県南部と千葉県北部をあわせた東関東中央部を指す。この地域は「常総の内海」や「古霞ヶ浦」と呼称される内海（現在の霞ヶ浦）を中心として、地域的まとまりを見せてきた（鈴木 2005、市村 2007、川西 2011 など）。山田俊輔は、「常総の内海」は内水面漁撈に依拠しているため集約的労働が発達せず、ピラミッド形階層構造が馴染みにくいと指摘している（山田 2015）。

変則的古墳　常総地域は、古墳時代後・終末期にいわゆる「変則的古墳」と呼ばれた独特の要素を有した後・終末期古墳が展開する地域である（市毛 1963 など）。これは各研究者の認識を含みながら、「前方後円形小墳」（岩﨑 1992）や「常総型古墳」（安藤 1981 など）とも呼称される。いわゆる「変則的古墳」は、内部施設が墳丘裾部の地下に位置することや、箱形石棺であるにも関わらず追葬をおこなうことなどが特徴であるが、これらは「変則的古墳」として概念化されるというよりも、複数の要素の重ね合わせとして理解されるものである（冨田 2022a）。

水上交通と流通　古墳時代後・終末期における石材や埴輪の広域流通に関する検討がなされている。いわゆる「筑波石」とされる筑波変成岩を使用した埋葬施設は、古霞ヶ浦沿岸域を中心に広範囲に展開する（茂木 1971、石橋 1995）。常総地域では筑波変成岩板石を使用した埋葬施設が卓越し、下位層では箱形石棺、上位層では横穴式石室が採用される傾向にあるほか（阿久津・片平 1992、冨田 2022 など）、終末期には石棺系石室が採用されるという特色がある（塩谷 1992）。この板石の産地は、ほぼ筑波山南東麓付近の露頭に限定され（淺野 2022）、石材の流通には古霞ヶ浦を介した交通が想定される（田中 1988、塩谷 2018 など）。また埴輪につい

ては、古霞ヶ浦沿岸域において雲母を多く含むものや白色粒子を多く含むものが分布し、その産地には筑波山麓が想定されることから「筑波山系の埴輪」と呼称される（塩谷 1997、石橋 2004）。

水上交通と首長墓　近年、海や内海といった水上交通に関する議論が盛んになされているが、常総地域もまた、水上交通の事例として文献史学・考古学の両側面から検討されてきた（例えば川尻 2003、田中 2012、日高 2015、山田 2015、佐々木 2018、滝沢 2018、塩谷 2018 など）。例えば、5 世紀前半においては、石岡市舟塚山古墳を中心とする政治システムが指摘され（田中 1988、谷仲 2020）、田中裕は、中期における内海世界の広域結合体を想定している（田中 2012）。また、石岡市や小美玉市などを中心とした高浜入り沿岸に、古墳時代後期を中心とする大型前方後円墳が密集する状況が注目されており、政治的・階層的な検討が進められてきた（小林編 2005）。佐々木憲一は、古墳時代後期の高浜入における首長系譜が併存することを指摘している（佐々木 2018）。このように常総地域では、広大な内海を介して活発に水上交通がなされており、それをもとに古墳時代後・終末期に独自の地域圏が形成されていたと言える。

３．近年の研究と本研究の背景

常陸南部の埋葬施設については、近年の資料の蓄積がある。明治大学によるかすみがうら市折越十日塚古墳や行方市沖洲大日塚古墳の調査により横穴式石室の詳細な図面が作成されたほか（佐々木・小野寺編 2018）、行方市三昧塚古墳の遺物の再整理も進められている（忽那ほか 2019）。筆者も、筑波大学が発掘調査をおこない長らく未報告であったつくば市甲山古墳の報告をおこなった（筑波大学甲山古墳研究グループ 2019）。さらに、茨城県教育財団によってつくば市下河原崎高山古墳群（内堀ほか 2020）や上境作ノ内遺跡（三浦ほか 2021）の発掘調査がおこなわれ、報告書が刊行されている。これらの調査と並行して、筆者らも未報告資料の報告などをおこなってきた。美浦村光佛古墳の再検討（荒井 2020a）、稲敷市酒井古墳の測量調査（荒井ほか 2020）、筑西市野殿古墳の再検討（荒井ほか 2021）などはこの一環である。

その中で筆者らは、常総地域の埋葬施設について、各々の視点や方向性で検討を進めてきた。例えば筆者は、箱形石棺の埋葬行為の変遷を整理し、人骨の出土状況の検討から埋葬プロセスの復元的検討をおこなった（荒井 2020b・2021）。冨田樹は、埋葬施設の位置や構造の差異による儀礼景観が異なることで、階層的差異が表れていると指摘したほか（冨田 2022a）、石材の流通・獲得や埋葬施設の採用原理を検討している（冨田 2022b）。淺野孝利は、埋葬施設に使用された筑波変成岩の観察から複数の石材産出地を想定し、それぞれの石材流通範囲を復元している（淺野 2022）。このように、同じ地域、同じ時期の埋葬施設について、それぞれ異なるまなざしから検討が進められている。ならば、それぞれの研究の接点に注目し、各情報を統合することで複合的な地域構造の検討が可能ではないかと考え、本書を作成するに至った。

４．本書の構成

Ⅱ章・Ⅲ章は地理的および時期的な整理である。Ⅱ章では、まず常総地域の地理的特徴を整理しておきたい。特に、古墳時代の内海の範囲は現在の霞ヶ浦の範囲とは異なっており、当時の正確な地理的特徴を把握することが必要である。Ⅲ章では、古墳時代後・終末期の時期的整理のため、鉄鏃の編年をおこなった。常総地域の古墳では武器類の副葬が多いため、鉄鏃による時期決定は有効であると考える。

Ⅳ～Ⅵ章は、各執筆者のこれまでの議論を補う内容を含む論考である。Ⅳ章では、主に埋葬施設付近の土器の出土状況を検討することで、箱形石棺と石棺系石室の関係性に接近する。Ⅴ章では、これまで不明確であった石材産出に関わる集団とその性格について、筑波山南麓の平沢地域を事例として検討する。Ⅵ章では、主に筑波変成岩使用の埋葬施設の検討を通して、石材流通システムと階層構造を明らかにする。

Ⅶ章では、本書Ⅱ～Ⅵ章の内容と、執筆者各人の既存の検討（荒井 2020b・2021、冨田 2022a・b、淺野 2022）を総合し、埋葬施設について異なる視点を統合させた検討をおこなう。これによって、古墳時代後・終末期における常総地域の地域構造に少しでも接近できれば幸いである。

参考文献

阿久津久・片平雅俊　1992「常陸の後期古墳の様相」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 44 集　国立歴史民俗博物館　423-468 頁

淺野孝利　2022「石棺・石室石材からみた古墳時代常総地域の流通」『筑波大学先史学・考古学研究』第 33 号　筑波大学　33-59 頁

荒井啓汰　2020a「美浦村光佛古墳の再検討―常総地域における一石棺内複数埋葬の初現を見据えて―」『土曜考古』第 42 号　土曜考古学研究会　45-69 頁

荒井啓汰　2020b「常総地域の箱式石棺からみた古墳時代後半期の埋葬行為」『考古学研究』第 67 巻第 3 号　56-75 頁

荒井啓汰　2021「古墳時代後半期の常総地域における埋葬方法とそのプロセス」『筑波大学先史学・考古学研究』第 32 号　筑波大学　1-22 頁

荒井啓汰　2022「古墳時代後・終末期における埋葬行為と社会的記憶」『考古学ジャーナル』771　ニューサイエンス社　31-33 頁

荒井啓汰・冨田　樹・淺野孝利・山崎颯太・大村　陸　2020「稲敷市酒井古墳の測量調査」『茨城県考古学協会誌』第 32 号　茨城県考古学協会　11-27 頁

荒井啓汰・大村　陸・冨田　樹・淺野孝利　2021「筑西市野殿古墳の再検討」『茨城県考古学協会誌』第 33 号　茨城県考古学協会　139-155 頁

安藤鴻基　1981「変則的古墳雑考」『小台遺跡発掘調査報告書』　小台遺跡調査会　151-158 頁

石橋　充　1995「常総地方における片岩使用の埋葬施設について」『筑波大学先史学・考古学研究』第 6 号　筑波大学　31-57 頁

石橋　充　2004「「筑波山系の埴輪」について」『埴輪研究会誌』第８号　埴輪研究会　1-16 頁

市毛　勲　1963「東国における墳丘裾に内部施設を有する古墳について」『古代』第 41 号　早稲田大学考古学会　19-26 頁

市村高男　2007「内海論から見た中世の東国」茨城県立歴史館編『中世東国の内海世界　霞ヶ浦・筑波山・利根川』高志書院　7-38 頁

岩崎卓也　1992「関東地方東部の前方後円形小墳」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 44 集　国立歴史民俗博物館　53-76 頁

内堀　団ほか　2020『下河原崎高山古墳群２』茨城県教育財団

川尻秋生　2003「「香取の海」の水上交通」『古代東国史の基礎的研究』塙書房　332-355 頁

川西宏幸　2011「常陸の実相―総説にかえて―」川西宏幸編『東国の地域考古学』　六一書房　3-30 頁

忽那敬三・佐々木憲一・鈴木一有・太田雅晃・岩本　崇・沢田むつ代　2019「茨城県三昧塚古墳出土遺物の研究」『明治大学博物館研究報告』第 23 号　1-54 頁

小林三郎編　2005『茨城県霞ヶ浦北岸地域における古墳時代在地首長層の政治的諸関係理解のための基礎研究』明治大学考古学研究室

佐々木憲一　2018「総括　霞ヶ浦沿岸地域における首長系譜の併存」佐々木憲一・小野寺洋介編『霞ヶ浦の前方後円墳―古墳文化における中央と周縁―』六一書房　249-258 頁

佐々木憲一・小野寺洋介編　2018『霞ヶ浦の前方後円墳―古墳文化における中央と周縁―』六一書房

塩谷　修　1992「終末期古墳の地域相―桜川河口域にみられる小型古墳の事例から」『土浦市立博物館紀要』第 4 号　土浦市立博物館　23-32 頁

塩谷　修　1997「霞ヶ浦沿岸の埴輪―5･6 世紀の埴輪生産と埴輪祭祀」『霞ヶ浦の首長―古墳にみる水辺の権力者たち―』霞ヶ浦町郷土資料館　66-75 頁

塩谷　修　2018『霞ヶ浦の古墳時代　内海・交流・王権』高志書院

鈴木哲雄　2005『中世関東の内海世界』岩田書院

滝沢　誠　2018「霞ヶ浦沿岸とその周辺の前期古墳」城倉正祥編『野本将軍塚古墳と東国の前期古墳』早稲田大学東アジア都城・シルクロード考古学研究所　157-170 頁

田中広明　1988「霞ヶ浦の首長―茨城県出島半島をめぐる古墳時代の研究―」『婆良岐考古』第 10 号　婆良岐考古同人会　11-49 頁
田中　裕　2012「古墳と水上交通―茨城県域とその周辺及び「畿内」の古墳立地を比較して―」『東日本における前期古墳の立地・景観・ネットワーク』東北・関東前方後円墳研究会　67-80 頁
筑波大学甲山古墳研究グループ　2019「つくば市甲山古墳の研究―調査報告編―」『筑波大学先史学・考古学研究』第 30 号　筑波大学　27-104 頁
冨田　樹　2021「筑波変成岩製埋葬施設の編年」『駿台史學』別冊第 173 号　　駿台史学会　13-25 頁
冨田　樹　2022a「常総地域における後・終末期古墳の階層性」『考古学研究』第 68 巻第 4 号　考古学研究　72-96 頁
冨田　樹　2022b「古墳時代後・終末期における筑波変成岩の流通様態」『考古学集刊』第 18 号　明治大学文学部考古学研究室　65-86 頁
土生田純之　1997「横穴式石室における諸形態とその要因」『専修人文論集』60　専修大学　81-104 頁
日高　慎　2015「『香取海』沿岸」かながわ考古学財団編『海浜型前方後円墳の時代』　同成社　76-89 頁
三浦裕介ほか　2021『つくば市上境滝の台古墳群　上境作ノ内遺跡 2　上境作ノ内古墳群』茨城県教育財団
箕輪健一　1996「終末期古墳と石棺式石室」『婆良岐考古』第 18 号　婆良岐考古同人会　69-82 頁
茂木雅博　1971「箱式石棺について」潮来町教育員会編『常陸大生古墳群』雄山閣　118-159 頁
谷仲俊雄　2020「舟塚山古墳と常陸南部の中期古墳」『古代文化』第 72 巻第 2 号　古代学協会　180-186 頁

Ⅱ．古墳時代の「常総の内海」水域復原に関する一試論

浅野　孝利

はじめに

現在の茨城県南部から千葉県北部にかけての常総地域には、かつて「常総の内海」[1] と呼ばれる広大な内海が広がっていた。この内海は土砂の堆積や干拓などによって縮小し、現在では霞ヶ浦（西浦）[2] や北浦、印旛沼、牛久沼など複数の湖沼にその名残をとどめている（大矢 1969）。

常総地域では、この内海を介してさまざまな交流が行われており、とくに古墳時代においては、常総型石枕や筑波変成岩などの物資が内海を介して流通していたことが知られており、水運の重要性が強調されてきた（白井 2002 など）。ところが、常総の内海を含めた常総地域の地理的環境について復原的に言及した研究は少なく、特に古墳時代研究においては文献資料の不在もあり、研究者ごとに漠然と設定した水域によって議論がおこなわれているのが実態である。

本稿では、地質学的・地理学的な成果と遺跡の立地を踏まえながら、古墳時代における常総の内海を中心とした常総地域全体の水域復原を試みることで、わずかでも当地域の古墳時代研究に資することを目的とする。なお、本稿では筑波変成岩や常陸型甕などの流通がみられる古墳時代後・終末期を念頭においていくが、資料的制約から必ずしも後・終末期に限定できないため、大掴みに「古墳時代」の水域復原をおこないたい。

１．常総地域の概略

常総地域は、茨城県南部から千葉県北部にかけての地域を指し、旧国では常陸国と下総国にあたる。陸地は大きく山地、台地、低地に分けられる。山地は筑波山塊に限られ、領家帯の東方延長と考えられる海成層を起源とした変成岩類と、これに貫入する深成岩類からなる（高橋ほか 2011）。台地は常総台地と呼ばれる洪積台地で、新治台地や筑波・稲敷台地、下総台地などさらに細分できる。台地は河川による開析が進み、樹枝状の谷が発達しているところが多い。低地は桜川低地のように河川堆積による沖積平野と、霞ヶ浦沿岸に広がる湖岸平野に分けられる。

当地域の中央部には、海跡湖である霞ヶ浦、北浦、印旛沼など複数の湖沼が存在しているが、上述のようにこれらの湖沼は中世以前にはひとつの内海として広がっていた。加えて、現在の利根川は茨城・千葉県境を流れているが、近世に行われた瀬替え以前は現在の東京湾に注いでいた。すなわち、中世以前の常総地域は、常総の内海を中心として、利根川水系とは独立した水系を形成していた。本稿では、この水系の復原をおこなっていく。

２．内海の概形復原

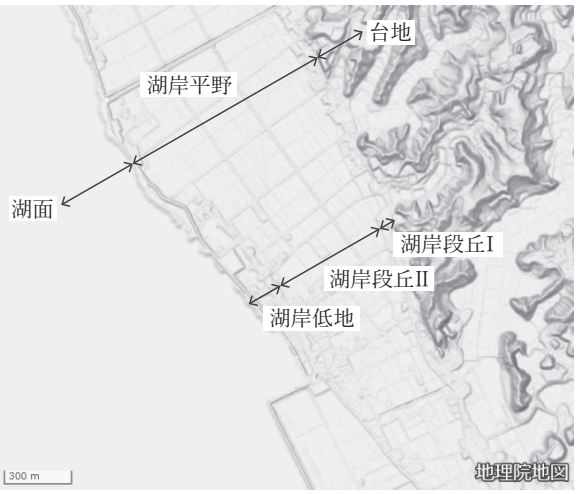
細かな復原をおこなう前に、まずは内海全体のおおまかな復原を試みたい。

縄文海進期には海水準が現在より２～４m以上高かったとみられている（一木・亀井 2017）が、古墳時代から現代にかけては数メートル規模の海水準変動は起きていないとみられる（田辺ほか 2016）。したがって、当時の水域復原には、沿岸の土砂堆積の様相を把握することが重要な位置を占める。

現在の霞ヶ浦の湖岸平野はほぼ全域で類似した様相を呈しており、上位から湖岸段丘Ⅰ、湖岸段丘Ⅱ、湖岸低地で構成されている（大矢ほか 1986、豊田・池田 2003）。湖岸段丘Ⅰは標高２～５mであり、その形成は、縄文海進期に浸食された台地の土砂が堆積したものとみられ、その時期は約 6000 ～ 5000 年前と考えられている（豊田・池田 2003、平井 1989）。湖岸段丘Ⅱの段丘面は湖に向かって傾斜しており、標高は１～２m である。その形成時期は、湖岸段丘Ⅰと同時期とする意見（豊田・池田 2003）と湖岸段丘Ⅰより新しいとする意見（大矢ほか 1986、平井 1989）があり、後者では平安時代の海進によって形成された後離水したとする見方がある（平井 1989）。いずれにせよ、古墳時代には少なくとも湖岸段丘Ⅰは陸地化していたとみられ、これは縄文時代前

期中葉以降の遺跡立地とも整合的である（亀井 2011）。湖岸低地は現在の湖水準と対応し、波浪などによって現在も形成されつづけている（平井 1989）。

以上より、古墳時代の霞ヶ浦における水域は最大でも現在の湖岸段丘Ⅱ面の広がる範囲までであり、北浦でも同様とみられる（大矢ほか 1986）。本稿ではこれを当時の水域の基準として考えたい。この範囲は古墳時代の遺跡の立地[3]とも大きく矛盾しない。



第１図　霞ヶ浦の湖岸平野
（豊田・池田 2003）をもとに地理院地図を加工して作成

現在の利根川低地については、近世におこなわれた利根川瀬替えと、その後の土砂堆積を考慮に入れる必要がある。

利根川低地における瀬替え後の地形変化を考察した大河原弘美らの研究によれば、利根川の開削によってもたらされた堆積物の層厚は下流へいくにしたがって小さくなっていき、現在の守谷取手両市境付近で堆積はほぼなくなる（大河原・池田・伊勢屋 1992）。すなわち、これより下流に関しては利根川瀬替えによる影響は限りなく小さいとみてよいものと考えられる。

現在の取手市、龍ヶ崎市付近には海成層の上位に泥炭層が分布する（大矢 1971）。これは海面低下時の静水域に堆積したものと思われ、この泥炭層の炭素 14 年代測定の結果は取手市大留で B.P.2130（± 110）[4]、龍ヶ崎市半田で B.P.1470（± 105）であった（大矢 1969、貞方 1972）。すなわち、古墳時代には半田で水域から湿地へ移行しはじめ、大留ではすでに湿地帯であったとみられ、古墳時代の内海の海岸線はこの付近に引くことができる。この付近は現在標高 2 m前後の地帯であり、利根川瀬替えの影響が及んでいないとみられる地域である。また、この地域の標高約 2 m以下には既知の古墳時代遺跡の分布はみられない。

以上より、利根川低地の様相と霞ヶ浦沿岸の湖岸段丘Ⅱ面の分布とを総合すると、現在の標高 2 m付近に海岸線を求めることで、古墳時代の内海の概形を復原することができると考えられる[5]。

３．小地形の復原

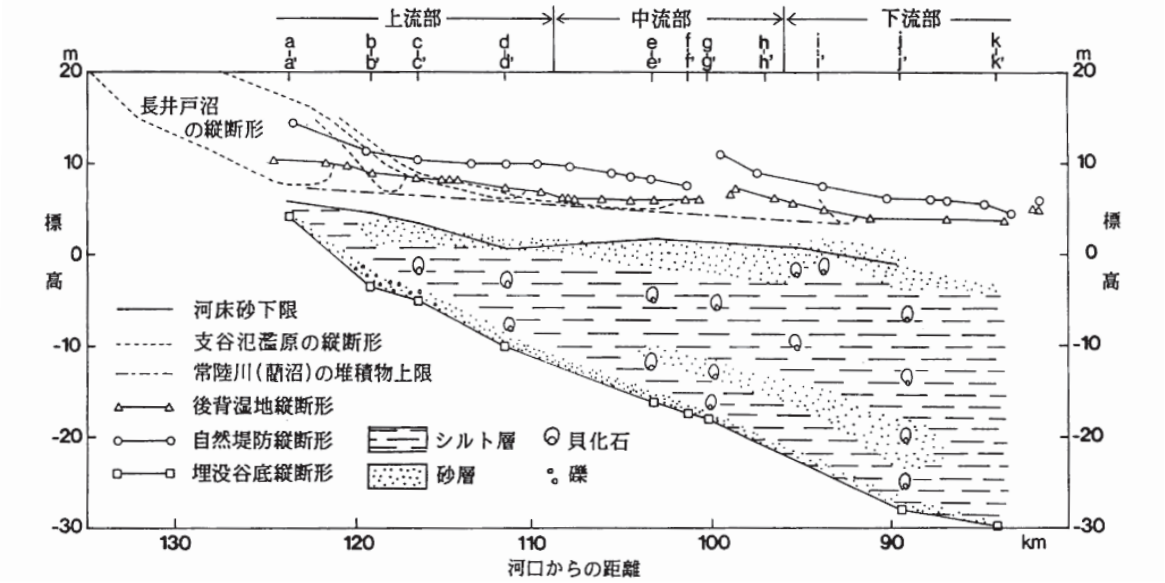
(1) 砂州・砂嘴

上記のように復原した内海の沿岸域には、平野が台地側へ湾状に入り込んでいる箇所が多数ある。なかでも香取市小見川や東庄町、小美玉市川中子といった地域では、湾状に入り込んだ平野部を入口部分で閉塞するように、微高地が湖岸線に対し調和的に発達している様子が確認できる。これら微高地は縄文海進以降に形成された砂州であると考えられている（大矢 1971、井内・斎藤 1993、久保 2007）。この微高地上には遺跡や古墳が営まれている場合があり、内海の復原にはその分布も考慮に入れる必要がある。なお、上に挙げた 3 つの地域では、砂州上に古墳時代の遺跡[6]が確認されていることから、当時既に離水していたとみられる。

(2) 現利根川河口部

現在の利根川河口部は、内海と外洋の接続部である。銚子側の低地には洪積台地に沿って海成段丘が発達する。これは縄文海進後の海退期に離水したとみられ、古墳時代の遺跡も分布することから、当時は陸域であったと判断できる（太田ほか 1985）。

対岸の神栖・波崎地域では台地は分布せず、南東方向に低地が長く伸びている。これは太平洋の沿岸流により形成された砂州であり、縄文海進後の海退初期に広く離水したものとみられている（斎藤ほか 1990）。その後も土砂供給は続き、利根川瀬替えの影響もあり近年までわずかながらも堆積が続いていたとみられる（佐藤ほか 2000）。しかし、この地域では河口に近い神栖市古高野で古墳時代の遺跡[7]が確認されており、本稿では当時の陸域は現在とほぼ変わらないものとして考えたい。



第 2 図　利根川低地における地質縦断面図
（大河原ほか 1992）
j-j' は守谷市稲戸井付近，k-k' は取手市取手付近

(3) 恋瀬川河口部

恋瀬川は筑波山塊に端を発し、八郷盆地を流れ霞ヶ浦の高浜入りへ注ぐ、全長約 28 km の河川である。この恋瀬川河口部では、河川の作用による三角州の発達がみられる。とくに、大正年間におこなわれた干拓事業によって流路が変更されて以降、三角州の活発な成長が確認されている（三上ほか 1983）。

『霞ヶ浦・北浦周辺地形分類図』によると、恋瀬川河口の三角州は天の川との合流点付近まで広がっており、これより上流側は下位沖積段丘および湖岸段丘Ⅱとして分類されている（大矢ほか 1986）。この段丘面が河成である可能性は拭えず、また『霞ヶ浦・北浦周辺地形分類図』には天の川との合流点付近より上流は記載がないため不明であるが、前章で海岸線として想定した標高 2 m の等高線がここでは現在の国道 6 号線恋瀬橋付近に求められるため、今回はこの標高 2 m線を海岸線として採用したい。

(4) 桜川河口部

桜川は現在の桜川市より流れ出て、筑波山の西側を南流し、桜川低地を通り土浦入りへ注ぐ全長約 64 km の河川である。下流部に広がる桜川低地には､2 万 4 千年前以前は古鬼怒川が流れていたことが知られている（鈴木ほか 1993 など）。桜川低地にはローム層の分布する微高地が断続的にみられるが、この微高地は土浦市宍塚付近より下流には分布せず、これより下流には三角州が発達する（新藤ほか 1982）。

桜川河口部、現在の土浦市街地が広がる地帯には、低地を閉塞するようなかたちで南北方向へ伸びる砂州が認められる。この砂州の標高は 2 m前後であり、湖岸段丘Ⅰに連続して発達している。したがって、この砂州は湖岸段丘Ⅰとともに形成されたものであり、古墳時代には既に存在していたと考えられる。この砂州より上流側の低地帯は、宍塚付近まで標高 1 ～ 2 m ほどで広がっており、ここに当時潟湖状の水域が広がっていたと想定することもできる。

４．内海以外の水域

(1) 鬼怒川・小貝川

これまでの検討によって、「常総の内海」の水域は復原された。本章では、内海以外の河川、湖沼について復原を試みたい。

利根川を除けば常総地域最大の河川といえる鬼怒川とこれに並行して流れる小貝川は、鬼怒川・小貝川低地

でいずれも蛇行河川の様相を呈し、低地内には古い流路を示すように自然堤防が複雑に分布している。低地内での微細な流路を復原することは不可能であるが、両河川は度重なる洪水とこれに対する治水事業により、古来より幾度か人為的に流路を変えてきた（吉田 1910 など）。これら河川改修の記録を参照することによって、古墳時代当時の流路に近づくことは可能である。

『続日本紀』には、鬼怒川の洪水被害に対処するため、神護景雲 2（768）年に下総国結城郡小塩郷小嶋村より常陸国新治郡川曲郷受津村に至る一千余丈（約 3 km）を開削し、流路を変更したという記述がある。これは現在の八千代町大渡戸から同町川尻付近にかけてであると想定されており、旧流路はこの西方の小河川であると考えられている（下妻市史編さん委員会 1993）。

承平年間、平将門の乱がおきたころには、鬼怒川の流路は下妻市長塚付近で分流し、現在の糸繰川の流路を東へ流れて同市比毛付近で小貝川と合流していたとみられる。この流路は『常陸国風土記』にも毛野河（鬼怒川）として記載されている（吉田 1910、鬼怒川・小貝川読本編纂会議 1993）。

寛永 6（1629）年、現在のつくばみらい市寺畑から守谷市板戸井にかけての台地が開削され、当時鬼怒川・小貝川低地の西側を流れていた鬼怒川は現在の利根川流路へと付け替えられた。これ以前は、寺畑から東に流れ、小貝川と合流して南東へ流れ、龍ヶ崎を経て利根川低地へ注いでいた（吉田 1910、取手市史編さん委員会 1991、鬼怒川・小貝川読本編纂会議 1993）。

小貝川の流路も鬼怒川流路の変更と並行する形で、寛永 7（1630）年に現在の取手市高須付近で南へと変えられ、利根町羽根野付近の台地を開削して利根川流路へと付け替えられた（鬼怒川・小貝川読本編纂会議 1993）。

なお、鬼怒川の糸繰川分流点より下流、小貝川合流点までの流路に関しては、大規模な自然堤防の形成が 13 世紀以降である可能性（貞方 1972）が示されており、これ以前の当流路は鬼怒川の本流ではなく、『常陸国風土記』にあるように糸繰川を経る流路が本流であったと想定したい。

(2) 湖沼

旧鬼怒川流域には、縄文海進後の海退期以降、土砂堆積に伴う河川の堰き止め、台地開析谷の閉塞によって形成された多くの湖沼が存在しており、反面上流からもたらされる土砂の量は少なかったため、これら湖沼は干拓されるまで長期間存在していた（岩井市史編さん委員会 2001）。本稿では、『利根治水論考』衣河流海古代水脈想定圖（吉田 1910）にあるものを中心に、大規模な湖沼のみを検討する。

利根川瀬替え以前の利根川流路には、藺沼と呼ばれる沼が広がっていたが、瀬替えによって利根川流路が現在のかたちに変更されたことで消滅した。瀬替え以前の藺沼の最上流部は現在の坂東市小山付近とみられる。なお、瀬替えによって大量の土砂が供給された結果、支谷を閉塞するように堆積が起こり、釈迦沼、長井戸沼、鵠戸沼などが形成された（大河原ほか 1992、岩井市史編さん委員会 2001）。

現在の常総市と坂東市の境界部に広がる飯沼低地には、かつて飯沼とよばれる沼が存在していた（八千代町史編さん委員会 1987）。この沼は江戸時代に干拓が進められ、現在では消滅している。低地下流部、鬼怒川のとの接続部分では、鬼怒川の土砂供給による堆積が進み、低地中央部より標高が高くなっている。

下総台地北部に存在する印旛沼と手賀沼は、いずれも江戸時代以降幾度かの開発を受け、その面積を縮小していった（栗原 1972、中尾 1986）。ここでは開発の詳細は割愛するが、開発前の手賀沼は我孫子市布佐付近まで存在していたようである（中尾 1986）。また印旛沼の存在する低地は、利根川低地との接続部でも標高 1 m 前後であり、砂州なども認められないため、ここで内海と接続していたとみられる。

現在の下妻市域には、鬼怒川および糸繰川の堆積によって形成された湖沼が複数存在していた。江戸時代に大規模な新田開発が実施され、大宝沼、江村沼、砂沼の 3 つの沼が干拓された。このうち砂沼は復興されて現在もその姿を見せているが、大宝沼、江村沼は享保年間の干拓の後、寛政年間に一旦復興されたものの、大正期に再び干拓され現在はその姿を消している（鬼怒川・小貝川読本編纂会議 1993、下妻市史編さん委員会 1994、1995）。

『万葉集』および『常陸国風土記』には、筑波山の西方に「鳥羽淡海」あるいは「騰波江」と呼ばれる湖沼

が存在していたことが記されている。『常陸国風土記』によれば、南は毛野河（鬼怒川）であるので、騰波江の南は現在の糸繰川であるとみられ、大宝沼などと同様に当時の鬼怒川による土砂堆積によって小貝川の流れが堰き止められ、溢れた水によって形成されていたと考えられている（吉田 1910、粟野 1974）。この範囲については先学による詳細な検討（伊東 1988）があり、既知の遺跡分布とも齟齬をきたさないため、本稿ではこれに従いたい。

以上の湖沼の範囲は、国土地理院による「沿水地形分類図」に「旧水部」あるいは「干拓地」として範囲が示されている部分が多いため、本稿ではこれを基本とする。

５．古墳時代常総地域の水域復原

以上の検討によって、古墳時代常総地域の水域は概ね復原されたわけであるが、最後にもう 1 箇所検討を加えたい。椿海から九十九里平野にかけてである。

椿海は現在の旭市にかつて存在していた湖沼であり、寛文年間に干拓されて広大な水田が拓かれた（小笠原・川村 1971）。これは縄文海進期に形成された潟湖であり、その湖面は惣堀の高さから標高 5 m前後と推定されている（青山 2004）。椿海の前面には九十九里平野が広がるが、ここには海岸線に並行する浜堤群が発達している。この浜堤群は 3 グループに分けられており、最前面の浜堤群の形成は古墳時代とみられている（貝塚ほか 2000）。遺跡の立地からも、古墳時代には現在の汀線から 500 m程度内陸までは離水していたとみられる（青山 2004）。

本稿での検討によって復原された古墳時代常総地域の水域を第 3 図に示した。細部での異論はあれ、概ね賛同を得られる復原案であろうと思う。こうした復原によって、たとえば現在では水路で結ばれていない鬼怒川・小貝川低地の両岸に同種の石材を用いた埋葬施設が分布するといった状況も、河川交通による東西方向の石材運搬がおこなわれていたという想定が可能になる（淺野 2022、図 4）など、古墳時代研究に一定の貢献ができると考えている。筆者は地形学等に関して素人であるため誤った検討を重ねている部分もあるとは思うが、本復原案を敲き台にしてより精密な水域復原がなされることを期待している。

註

1） この内海をめぐる名称については「常総の内海」（山田 2015）のほか、「香取海」（白井 2002）、「古霞ケ浦」（塩谷 2018）など複数ある。本稿では「常総の内海」あるいは地域名を省略して「内海」の語を用いていく。
2） 以降、特に記載のない場合「霞ヶ浦」は西浦を指すものとする。
3） 行方市三昧塚古墳、美浦村弁天塚古墳、行方市矢幡瓢箪塚古墳など。
4） 西暦 1950 年より遡る値。
5） 古墳時代には現代より海水準が 2 m高かったということではなく、現在標高 2 mより低い場所に広がる陸域が古墳時代から現代にかけて堆積などにより陸化したということを想定している。
6） 小見川：上原遺跡、東庄：笹川原古墳、鹿野戸遺跡など、川中子：妙見山古墳、火の橋遺跡など。
本稿では原則として砂州と内海の境界のみを海岸線として復原するが、東庄については慶長年間に桁沼が干拓された記録が残っており、このころまで水域として残っていたとみられる（青山 2004）。
7） 別所貝塚。付近には荒波遺跡、墾田寺遺跡なども所在する。

参考文献

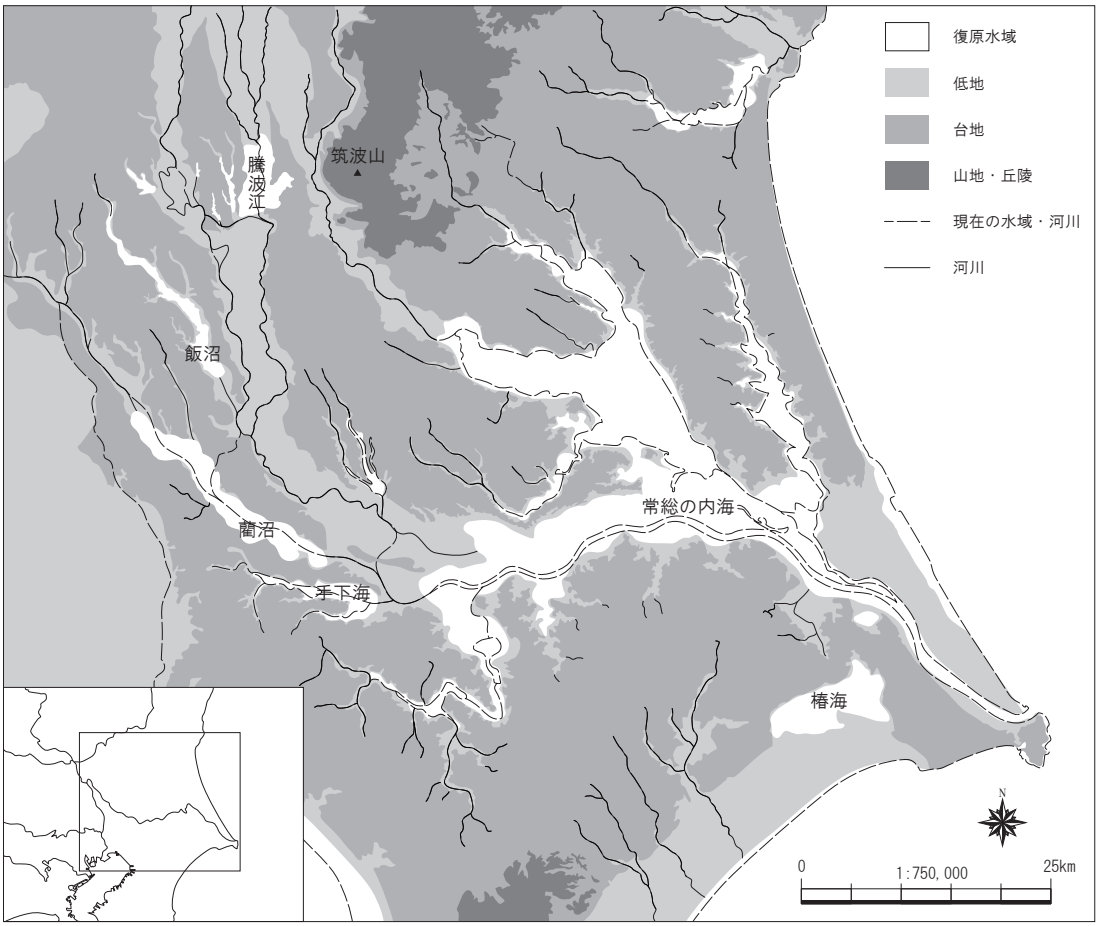
青山宏夫　2004「干拓以前の潟湖とその機能　椿海と下総の水上交通試論」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 118 集　193-217 頁

淺野孝利　2022「石棺・石室石材からみた古墳時代常総地域の流通」『筑波大学先史学・考古学研究』第 33 号　筑波大学　33-59 頁

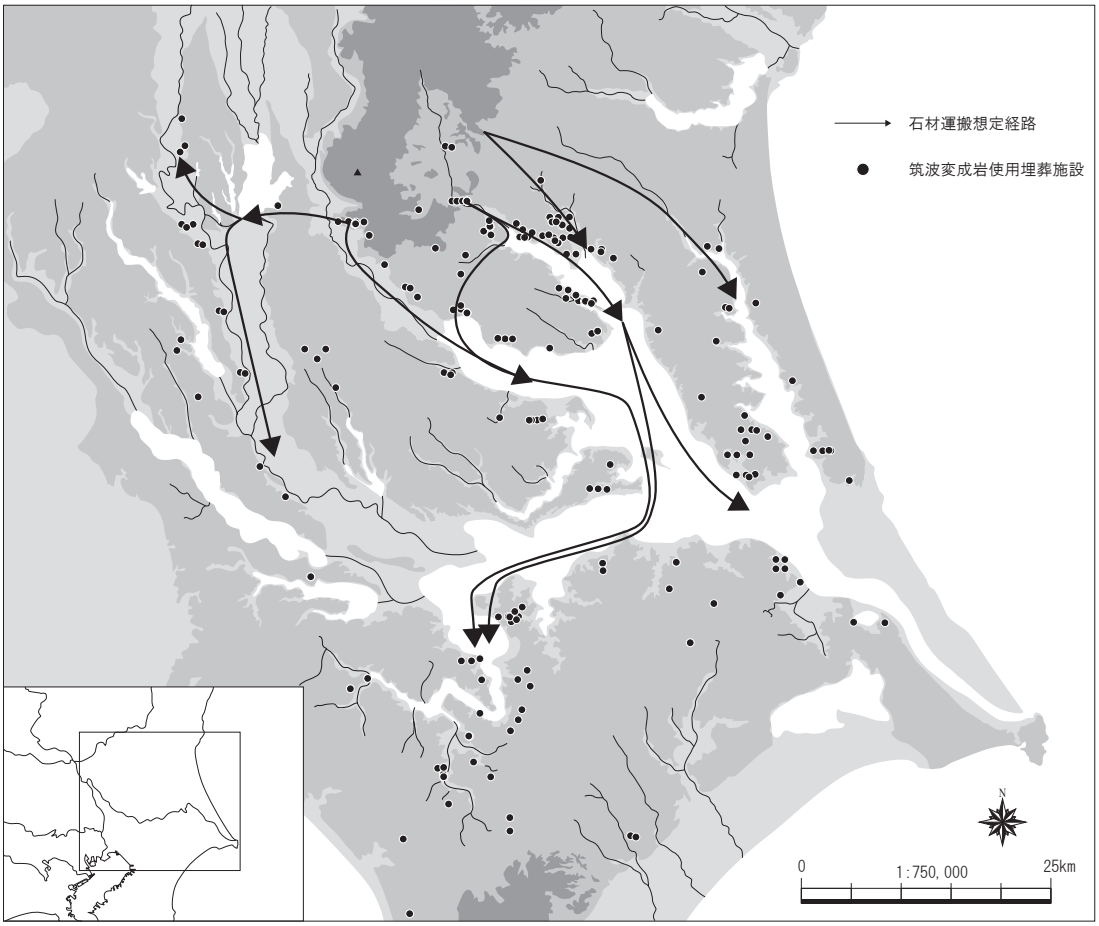
粟野二男雄　1974『糸繰川史』　山海堂

井内美郎・斎藤文紀　1993「海跡湖の地史―3　霞ケ浦」『URBAN KUBOTA』32　56-63 頁
伊東重敏　1988「「鳥羽（騰波）江」雑考　―筑波郡衙の位置にもふれて―」『婆良岐考古』第 10 号　178-188 頁
いばらきデジタルまっぷ　https://www2.wagmap.jp/ibaraki/Portal
岩井市史編さん委員会　2001『岩井市史　通史編』　岩井市
大河原弘美・池田　宏・伊勢屋ふじこ　1992「利根川・鬼怒川の瀬替えによる利根川中流低地の地形環境変化」『筑波大学水理実験センター報告』No.16　79-91 頁
太田陽子・松島義章・三好真澄・鹿島　薫・前田保夫・森脇　広　1985「銚子半島およびその周辺地域の完新世における環境変遷」『第四紀研究』第 24 巻 1 号　13-29 頁
大矢雅彦　1969「利根川中・下流域平野の地形発達と洪水」『地学雑誌』78 巻 5 号　43-56 頁
大矢雅彦　1971「第 1 章利根川流域の自然　第 1 節利根川の中流域と下流域平野の地形および形成過程の比較」九学会連合利根川の流域調査委員会編『利根川　―自然・文化・社会―』弘文堂　32-44 頁
大矢雅彦・加藤泰彦・春山成子・平井幸弘・小林公治・井上洋一・忍澤成視　1986『3 万分の 1 霞ヶ浦・北浦周辺地形分類図』建設省関東地方建設局霞ヶ浦工事事務所
小笠原長和・川村　優　1971『千葉県の歴史』　山川出版社
貝塚爽平・小池一之・遠藤邦彦・山崎晴雄・鈴木毅彦　2000『日本の地形 4　関東・伊豆小笠原』　三秀舎
亀井　翼　2011「霞ヶ浦南西岸における地形発達が縄文時代遺跡分布の認識に及ぼす影響」『考古学研究』第 58 巻第 1 号　66-77 頁
鬼怒川・小貝川読本編纂会議　1993『鬼怒川　小貝川　―自然　文化　歴史』　鬼怒川・小貝川サミット会議
久保純子　2007「「常総の内海」香取平野の地形と歴史時代における環境変遷」『中世東国の内海世界―霞ヶ浦・筑波山・利根川―』高志書院 39-64 頁
栗原東洋　1972『印旛沼開発史　第一部・印旛沼開発事業の展開（上巻）』　千葉日報社
斎藤文紀・井内美郎・横田節哉　1990「霞ヶ浦の地史：海水準変動に影響された沿岸湖沼環境変遷史」『地質学論集』第 36 号　103-118 頁
貞方　昇　1972「鬼怒川下流の氾濫原の形成」『地理科学』第 18 号　13-22 頁
佐藤愼司・前田　亮・磯部雅彦・関本恒浩・笠井雅広・鳥居謙一・山本幸次　2000「鹿島灘南部海岸の地形形成機構に関する現地調査」『土木学会論文集』663 号Ⅱ -53　89-99 頁
塩谷　修　2018『霞ケ浦の古墳時代　―内海・交流・王権―』　高志書院
下妻市史編さん委員会　1993『下妻市史　上』　下妻市
下妻市史編さん委員会　1994『下妻市史　中』　下妻市
下妻市史編さん委員会　1995『下妻市史　下』　下妻市
白井久美子　2002『古墳から見た列島東縁世界の形成』　千葉大学考古学研究室
新藤静夫・前野元文　1982「霞ヶ浦周辺低地の環境地学（Ⅰ）―桜川低地と霞ヶ浦の地形、地質―」『筑波の環境研究』第 6 号　筑波大学筑波環境研究グループ　173-181 頁
鈴木正章・吉川昌伸・遠藤邦彦・高野　司　1993「茨城県桜川低地における過去 32,000 年間の環境変遷」『第四紀研究』第 32 巻 4 号　195-208 頁
高橋祐平・宮崎一博・西岡芳晴　2011「筑波山周辺の深成岩と変成岩」『地質学雑誌』第 117 巻　補遺　21-31 頁
田辺　晋・堀　和明・百原　新・中島　礼　2016「利根川低地における「弥生の小海退」の検証」『地質学雑誌』122 巻 4 号　135-153 頁
ちば情報マップ　https://map.pref.chiba.lg.jp/pref-chiba/Portal
豊田麻衣・池田　宏　2003「霞ヶ浦湖岸平野の形成過程」『筑波大学陸域環境研究センター報告』第 4 号　61-73 頁
取手市史編さん委員会　1991『取手市史』　取手市教育委員会
中尾正己　1986『手賀沼周辺の水害　―水と人とのたたかい四〇〇年―』　我孫子市教育委員会
一木絵里・亀井　翼　2017「土浦市上高津貝塚周辺の後期更新世～完新世の古環境」『土浦市立博物館紀要』第 27 号　土浦市立博物館　25-42 頁

平井幸弘　1989「日本における海跡湖の地形的特徴と地形発達」『地理学評論』62 巻 2 号　145-159 頁
三上靖彦・長嶺陽一・井口正男・新藤静夫　1983「霞ヶ浦周辺低地の環境地学（Ⅱ）―恋瀬川三角州の発達過程について―」『筑波の環境研究』第 7 号　筑波大学筑波環境研究グループ　141-157 頁
八千代町史編さん委員会　1987『八千代町史（通史編）』　八千代町
山田俊輔　2015「「常総の内海」をめぐる古墳時代中期社会の研究」『考古学論攷』Ⅱ　千葉大学考古学研究室　233-244 頁
吉田東伍　1910『利根治水論考』　三省堂書店　（吉田東伍　1974『利根治水論考　影印版』　崙書房　に再録）



第 3 図　古墳時代常総地域水域復原案



第 4 図　古墳時代の筑波変成岩使用埋葬施設の分布と想定石材運搬経路
（淺野 2022）をもとに作成

Ⅲ．古墳時代後・終末期の鉄鏃の編年―常陸南部を中心に―

荒井　啓汰

はじめに

常総地域の後・終末期古墳では、鉄鏃や鉄刀など武器類の副葬が顕著である。そのため、遺物から古墳の時期を決定する際、鉄鏃が有効な指標となり得る。そのような背景をふまえて、古墳時代後・終末期の常総地域、特に茨城県南部地域を中心とした範囲の鉄鏃について、編年をおこないたい。

１．編年の視点

(1) 鉄鏃研究の動向

1980 年代は、各地で鉄鏃の集成・編年研究が行われた（小久保ほか 1983、小森 1984、白井 1986 など）。ここではいずれも、個別の地域における詳細な鉄鏃の編年が検討されたほか、後藤守一と末永雅雄の網羅的研究（後藤 1939・末永 1941）が再考されている。そのような地域的把握が進む中、杉山による全国的な鉄鏃の分類と編年がなされた（杉山 1988）。杉山の全国的な検討をもとに、地域性の把握が可能となり、特に無頸鏃には地域ごとの形態差があることが指摘された。その後、杉山の研究を受けて広域的な地域色の把握が進められることとなる（尾上 1993、水野 1995）。

近年は、鉄鏃そのものの形態以上に、矢としての構造に対して焦点があたっている。例えば、水野敏典は装着形態を重視し、矢柄との装着を意識して、根挟を用いる「無茎・短茎鏃群」と、茎による接続を用いる「有茎鏃群」に大別した（水野 2003･2013）。川畑純は､水野の分類法を踏襲しつつも､「無茎式」「短茎式」「長茎式」を最上位のレベルとして､続いて頸部･刃部のレベルを分類しており､そこから「無茎式」「短茎式」「先刃式」「横刃式」「有頸式」の 5 大別を設定している（川畑 2009）。これらの視点は近年の東日本の事例にも踏襲されている（平林 2013、箕浦 2020）。また、鏃のもつ実用的機能のみではなく、その象徴的機能に着目した検討もなされている（鈴木 2000､水野 2009）。この観点は､鏃の性格から分類を行う場合においても重要な視点となる（たとえば松木 1991）。

常総地域における鉄鏃研究としては、千葉県側では白井久美子の編年的研究のほか（白井 1986）、水野敏典による形態変遷の詳細な研究（水野 1993）がある。茨城県側では、千葉隆司や稲田健一が茨城県内出土鉄鏃の集成をおこない、その変遷を検討している（千葉 1996・1999、稲田 2007 など）。また千葉は近年、2000 年代以降の資料も紹介しつつ、常陸における軍事的側面に触れている（千葉 2021）。

(2) 視点

古墳時代後期以降、地域によって異なる形態の鉄鏃が展開し（杉山 1988）、その背景には鉄鏃が小地域ごとに生産された可能性が示唆されている（尾上 1993）。常総地域を含む関東地方においても、その地域特有の特徴をもつ鉄鏃がみられ（内山 1998、池上 2010）、これらの地域的多様性が統一的な編年構築のネックとなっている。例えば、棘状関を有する長三角形鏃は、関東地方を主とした展開を見せている（内山 1998）。

内山敏行は、全国的に共有される「共有型式」と、その地域のみに展開する「地域型式」という概念を用い、これらの峻別が不可欠であることを指摘した（内山 2011）。古墳時代後期以降、古墳時代後・終末期の鉄鏃の編年をおこなう場合、これらの区別を考慮する必要がある。

(3) 目的と方法

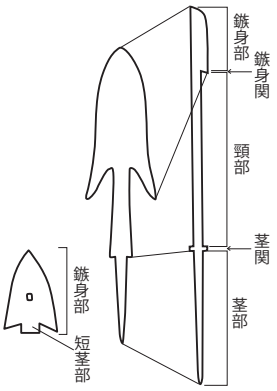
土器の副葬が顕著でない常総地域において、年代的指標を確立することを目的とする。常総地域においては、鉄鏃や大刀といった武器類の副葬が顕著である（茂木 2015 など）。この中で、形態的特徴が多様である鉄鏃を取り上げ、鉄鏃の編年を通して、箱式石棺の時期を決定する前提としたい。

対象地域は常総地域（茨城県南部・千葉県北部）で、対象時期は古墳時代後・終末期である。これらを対象とするのは、この作業が常総地域における箱式石棺の埋葬を位置付けるためであるからである。

先に述べた通り、共有型式の鉄鏃の型式変化をひとつの基準として編年をおこなう。また、共伴する須恵器などの遺物によって時期的なクロスチェックをおこなう。横穴式石室や常総地域の箱式石棺の場合、追葬に伴って時期の異なる鉄鏃が副葬される可能性がある。この問題を避けるため、出土コンテクストが明らかな例を使用した。つまり、鏃群単位での把握が可能な場合、その鏃群や鏃束は同タイミングで副葬されたものと判断し、極力この鏃群ごとのセット関係の使用に努めた。

２．鉄鏃の名称と分類

各部名称については、基本的には水野敏典や川畑純の名称を参考にして設定した（第 1 図：水野 2003、川畑 2015 など）。無茎・短茎式の基部については、従来の名称を踏襲し「短茎部」とする。



第 1 図　鉄鏃の各部名称

分類にあたっては、先学の研究もあるように、副葬時の扱い方にみる機能性をもとにした分類方法は有効であろう（松木 1991、鈴木 2000）。副葬時の鉄鏃の扱い方の相違は、彼らの鉄鏃に対する認識を背景としており、これを上位の分類概念に応用したい。古墳時代後期においては、一般的な鏃としての尖根式鏃と、儀礼用などの特殊性をもつ平根式鏃が識別される（田村 2003 など）。これは後世の資料に見える「征矢」と「上差矢」の分類に適合するとされる（小森 1984、白井 1986 など）。特に無茎・短茎式鏃は、長頸鏃と異なる副葬状態をもつ（川畑 2015）。一般的な両刃・片刃の尖根式鏃は、後期古墳から多量に出土し、明確に型式変化をする点が特徴である（鏃身形状の変化については水野 1993）。一方で無茎・短茎式鏃は、比較的型式変化に乏しいことが指摘されている（鈴木 2003）。

このような副葬時の扱い方と構造上の相違に基づいて、「有茎尖根式」「有茎平根式」「無茎・短茎式」の 3 大別を設定する（第 2 図）。名称については、後藤守一による先駆的研究を意識しつつ（後藤 1939）、その下位分類としては、「柳葉式」「三角式」など鏃身部形状に着目して分類した。これまで使用されてきた名称を踏襲するとともに、その名称が鉄鏃の形状を端的に表すことに力点を置いた。

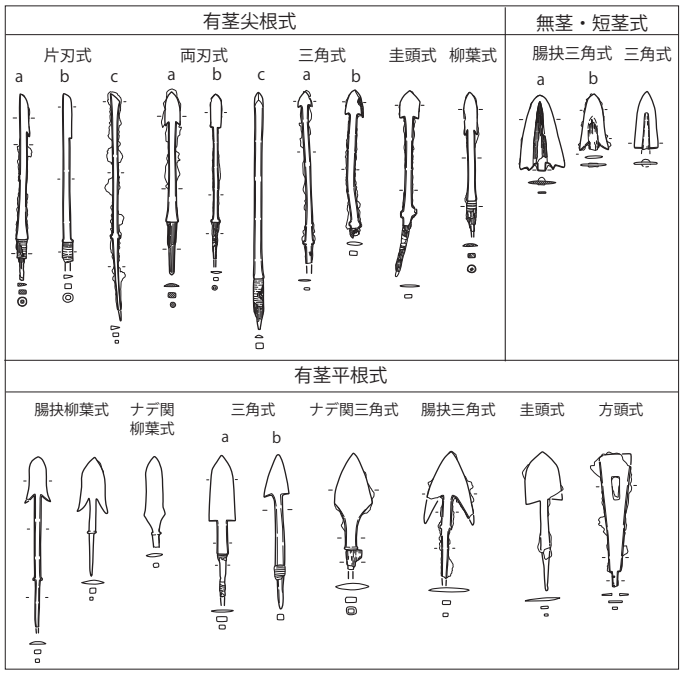
３．鉄鏃の編年

(1) 編年の方向性

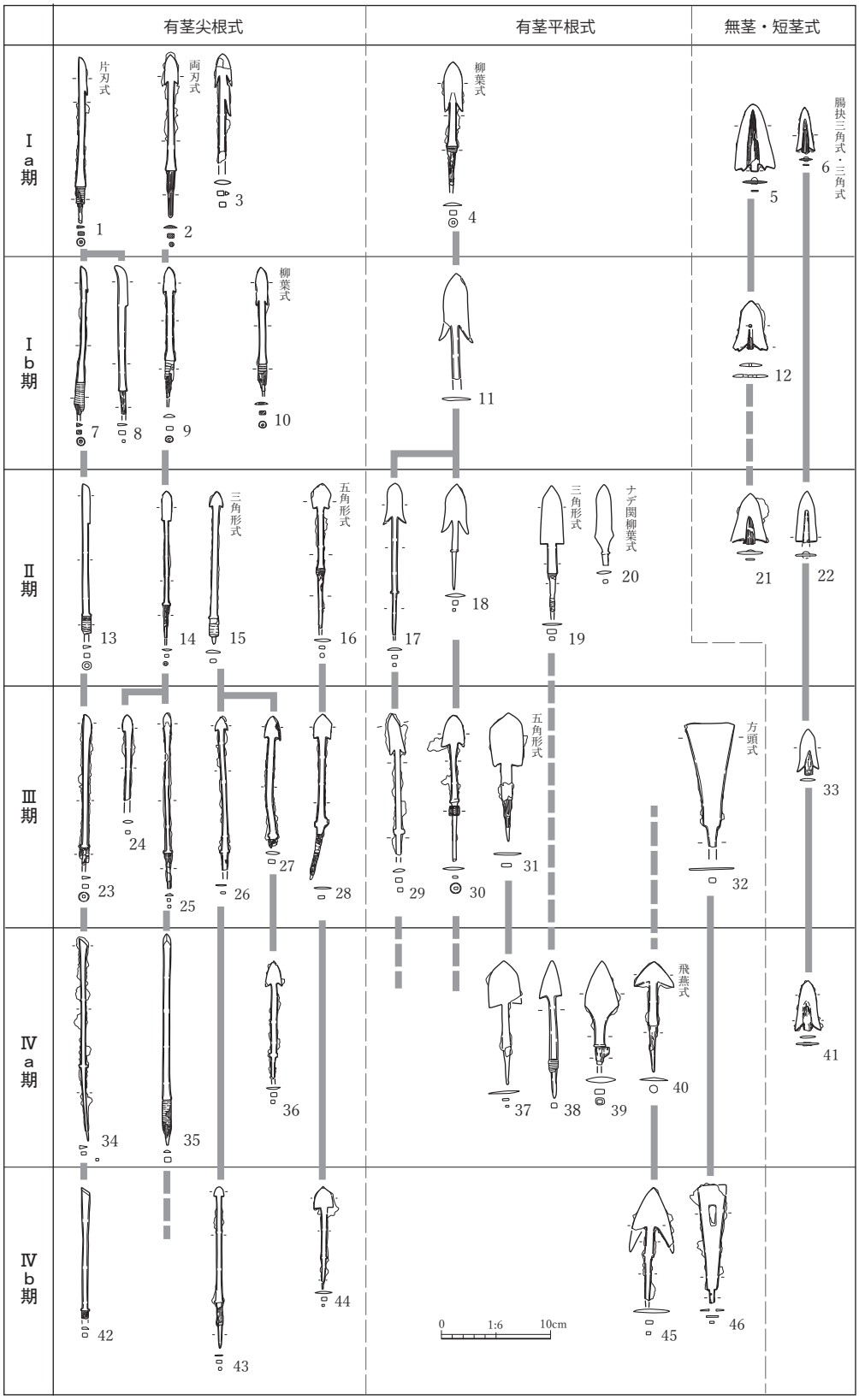
鉄鏃の編年は、既に基本的な方向性が示されている（杉山 1988、水野 2003、川畑 2015 など）。有茎尖根式は、全国的な共有型式としての片刃式・両刃式において明確な型式変化をとげる。鏃身関が腸抉をもつものから直角のものとなり、7 世紀にナデ関化していく。本稿では片刃式・両刃式ともに a 類→ b 類→ c 類の変化である。茎関は 6 世紀後半に棘状関が登場することがメルクマールとなり、それ以前は直角関ないし台形関である。この型式変化を基軸として、以下の段階を設定する。

(2) 段階の設定（第３図）

上記の編年の方向性をもとにⅠ～Ⅳ期を設定し、Ⅰ期をⅠ a 期・Ⅰ b 期、Ⅳ期をⅣ a 期・Ⅳ b 期に細別した。



第 2 図　常総地域における後・終末期の鉄鏃の分類



【Ⅰa期】
1, 2, 4, 5, 6 : 茨城県甲山古墳（第２号棺） 3: 茨城県富士見塚１号墳

【Ⅰb期】
7, 10: 茨城県光佛古墳　8: 千葉県大作33号墳　9, 12: 茨城県高崎山２号墳　11: 茨城県水神峯古墳

【Ⅱ期】
13, 19: 茨城県太田古墳　14: 茨城県野殿古墳　15: 茨城県東大沼７号墳　16: 千葉県松山２号墳　17: 千葉県瓢塚27号墳　18, 20: 千葉県城山１号墳　21: 台の内１号墳　22: 茨城県日天月天塚古墳

【Ⅲ期】
23: 茨城県久能向原３号墳　24, 29: 茨城県山ノ入２号墳　25: 茨城県下河原崎高山５号墳　26: 千葉県龍角寺101号墳　27, 28: 千葉県清水S12号墳　30: 千葉県石川１号墳　31: 茨城県塔宮台１号墳　32: 茨城県丑塚・寺山７号墳　33: 千葉県宮前古墳

【Ⅳa期】
34: 茨城県久能向原２号墳　35: 茨城県武者塚古墳　36, 41: 千葉県山田宝馬120号墳　37: 千葉県中津田古墳　38: 茨城県成田３号墳　39: 千葉県多古台No.8-3号墳　40: 千葉県地蔵原１号墳

【Ⅳb期】
42: 千葉県瓢塚27号墳　43: 千葉県池向３号墳　44: 千葉県野中４号墳　45: 山ノ入14号墳　46: 千葉県栗野Ⅰ-5号墳

第３図　常総地域における鉄鏃の編年

Ⅰａ期：茎関は台形関ないし直角関である。有茎尖根式の両刃式・片刃式ともに腸抉をもつものが卓越する。中期的な独立片逆刺を有する長頸鏃がある。有茎平根式には腸抉柳葉式がみられる。無茎・短茎式では大型の腸抉三角式ａ類と、小型のｂ類があり、ａ類には二重腸抉を有するもの存在する。つくば市甲山古墳第２号棺、かすみがうら市富士見塚１号墳などが該当する。

Ⅰｂ期：茎関は台形関ないし直角関である。有茎尖根式の両刃式・片刃式では前段階の腸抉が短化し、鏃身関がしだいに直角関化する。有茎平根式ではⅠａ期の様相を引き継いで腸抉柳葉式が存在する。無茎・短茎式においても前段階からの二重腸抉を有する大型鏃が存在する。基本的にはⅠａ期の様相を引き継いでいる。この段階には美浦村光佛古墳、稲敷市水神峯古墳、土浦市高崎山２号墳、大作 33 号墳、禅昌寺山古墳などが該当する。

Ⅱ期：茎関に棘状関が登場し、主流となる段階である。有茎尖根式では、両刃式・片刃式の鏃身関が直角関主体となる。有茎尖根式においては三角式や圭頭式、有茎平根式においては三角式やナデ関柳葉式などが認められ、当該地域で鏃身形状に多様性がみられるようになる。無茎・短茎式には腸抉三角式ａ類と三角式がみられるが、二重腸抉をもつものはみられなくなる。太田古墳、野殿古墳、東大沼７号墳、日天月天塚古墳、城山１号墳、台の内２号墳、松山２号墳などが該当する。

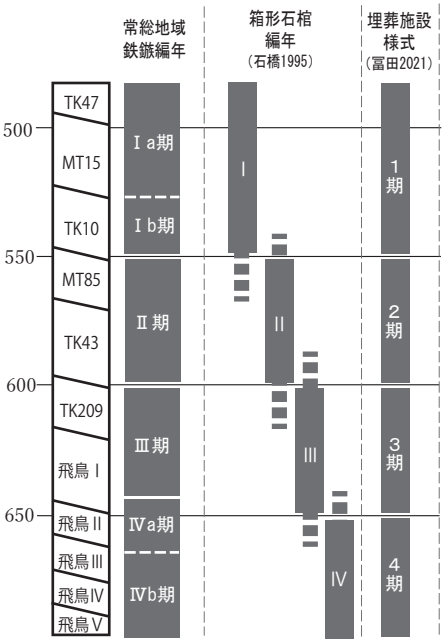
Ⅲ期：茎関は棘状関が主流である。有茎尖根式の両刃式・片刃式においてはしだいにナデ関化していく。有茎平根式は前代の様相を引き継ぎつつも、方頭式など７世紀的な鏃が登場する。有茎尖根式・有茎平根式ともにⅡ期の様相を引き継ぐ一方で、７世紀的な鏃が加わることで最も多様な鏃身形態が認められる段階である。風返稲荷山古墳、龍角寺 101 号墳、清水 S12 号墳、下河原崎高山５号墳、山ノ入２号墳、久能向原３号墳などが該当する。

Ⅳａ期：茎関は棘状関だが、有茎平根式の一部では環状関がみられる。有茎尖根式では、両刃式・片刃式の鏃身関のナデ関化が進み、刃部が先端のみになる。当該地域では鉄鏃の副葬が減少し、結果としてⅢ期に認められた鏃身形態の多様性が失われる。この段階には武者塚古墳、久能向原２号墳、成田３号墳、山田宝馬 120 号墳などが該当する。

Ⅳｂ期：茎関は棘状関だが、有茎平根式の一部では環状関がある。基本的にはⅣａ期の様相を引き継ぎつつも、常総地域では有茎尖根式の多量副葬がほとんどみられなくなり、有茎平根式の少数副葬が顕著である。Ⅳ期の鉄鏃の形態は、奈良･平安時代の鉄鏃（津野 2015 など）との関係性が示唆されるものである。池向３号墳、野中４号墳、山ノ入 14 号墳、栗野Ⅰ遺跡５号墳などが該当する。

４．鉄鏃の時期

共有型式としての有茎尖根式を編年の軸としたため、各段階の時期についてはおおまかな比定が可能であるが、クロスチェックを兼ねて須恵器との共伴関係を見ていきたい（田辺 1981、西 1986）。Ⅰａ期には、富士見塚１号墳においてTK47 ～ MT15 型式期にあたる須恵器が出土している。続くⅠｂ期には、高崎山２号墳において石室内から TK10 型式期にあたる須恵器が出土しており、当該古墳では追葬も認められないため、Ⅰｂ期の時期の定点となる。Ⅱ期の鉄鏃が出土している城山１号墳では、TK43 型式期にあたる須恵器が共伴している。Ⅲ期には下河原崎高山５号墳、風返稲荷山古墳、山ノ入２号墳などから須恵器が出土しており、古墳ごとにやや時期幅があるが、おおむね TK209 ～ TK217 型式古段階にあたる。また、このⅢ期以降には埴輪が伴わない。Ⅳ期の様相としては、Ⅳｂ期の池向３号墳や栗野Ⅰ遺跡５号墳から出土している須恵器が、遠江編年（鈴木 2001）のⅣ期後半から末葉、飛鳥編年の飛鳥Ⅲ～Ⅴにあ



第４図　編年の対応関係

たる。各古墳には追葬に伴う副葬や墓前祭祀などが認められ複雑な様相を呈するが、上記の理解に矛盾はない。

以上の様相から実年代との関係を整理すれば、Ⅰａ期が5世紀末葉から6世紀初頭、Ⅰｂ期が6世紀前葉から中葉、Ⅱ期が6世紀後半、Ⅲ期が7世紀初頭から前葉、Ⅳａ期が7世紀中葉、Ⅳｂ期が7世紀後葉に位置付けられる。なお、石橋充による箱形石棺の編年（石橋 1995）や、冨田樹による埋葬施設の様式設定（冨田 2021）との対応関係は、第4図の通りである。

おわりに

古墳時代後・終末期の常総地域の鉄鏃について、編年的検討をおこなった。いわゆる反刃鏃や独立片逆刺をともなう鉄鏃については、存在を認識しつつも今回検討が叶わなかった。また、編年をするうえでの分類上の手続きも十分とは言い難く、今後の課題としたい。

参考文献

池上　悟　2010「東国古墳出土の有茎平根鉄鏃」『古墳文化論攷』　六一書房　213-235頁

石橋　充　1995「常総地方における片岩使用の埋葬施設について」『筑波大学先史学・考古学研究』第6号　筑波大学　31-57頁

稲田健一　2007「茨城県古墳出土の鉄鏃―県西･県南（一部）･鹿行地区古墳出土の鉄鏃―」『菟玖波―川井正一･齋藤弘道･佐藤正好先生還暦記念論集』川井・齋藤・佐藤先生還暦記念事業実行委員会　99-108頁

内山敏行　1998「新郭古墳群の検討」『新郭古墳群・新郭遺跡・下り遺跡』　栃木県埋蔵文化財センター　506-515頁

内山敏行　2011「後期・終末期古墳出土の鉄鏃―東日本の場合―」『考古学ジャーナル』616　ニューサイエンス社　19-22頁

尾上元規　1993「古墳時代鉄鏃の地域性―長頸鏃出現以降の西日本を中心として―」『考古学研究』第40巻第1号　61-85頁

川畑　純　2009「前・中期古墳副葬鏃の変遷とその意義」『史林』第92巻第2号　史学研究会　1-39頁

川畑　純　2015『武具が語る古代史　古墳時代社会の構造転換』　京都大学学術出版会

小久保徹・浜野一重・利根川章彦・山本　禎・高橋好信・田中正夫・岩瀬　譲・瀧瀬芳之 1983「埼玉県における古墳出土遺物の研究Ⅰ―鉄鏃について」『研究紀要』　埼玉県埋蔵文化財調査事業団　1-73頁

後藤守一　1939「上古時代鉄鏃の年代研究」『人類学雑誌』第54巻第4號　東京人類学　1-28頁

小森哲也　1984「栃木県内古墳出土遺物考（Ⅰ）」『栃木県考古学会誌』第8集　栃木県考古学会　53-92頁

白井久美子　1986「東国後期古墳分析の一視点―鉄鏃から見た千葉市生実・椎名崎古墳群」『千葉県文化財センター研究紀要』　千葉県文化財センター　187-215頁

末永雅雄　1941「主要武器（二）弓矢」『日本上代の武器』　弘文堂書房　255-288頁

杉山秀宏　1988「古墳時代鉄鏃について」『橿原考古学研究所論集』8　吉川弘文館　529-644頁

鈴木一有　2000「交易される鉄鏃」『表象としての鉄器副葬』　鉄器文化研究会　75-94頁

鈴木一有　2003「後期古墳に副葬される特殊鉄鏃の系譜」『静岡県埋蔵文化財調査研究所　研究紀要』10　静岡県埋蔵文化財調査研究所　217-236頁

鈴木敏則　2001「湖西窯古墳時代須恵器編年の再構築」『須恵器生産の出現から消滅　猿投窯・湖西窯編年の再構築』第5分冊　東海土器研究会　141-170頁

田辺昭三　1981『須恵器大成』　角川書店

田村隆太郎　2003「副葬鏃群への指向」『静岡県埋蔵文化財調査研究所　研究紀要』10　静岡県埋蔵文化財調査研究所　199-216頁

千葉隆司　1996「古墳時代の鉄鏃（1）（茨城県墳墓出土の鉄鏃集成）」『婆良岐考古』第18号　婆良岐考古同人会　53-68頁

千葉隆司　1999「古墳時代の鉄鏃（3）（茨城県における6・7世紀の様相）」『婆良岐考古』第21号　婆良岐考古同人会　91-103頁

千葉隆司　2021「茨城県の古墳出土の武器と軍事―鉄鏃からみた地方の豪族の一側面―」『古代文化』第 72 巻第 4 号　古代学協会　85-92 頁
津野　仁　2015『日本古代の軍事武装と系譜』　吉川弘文館
冨田　樹　2021「筑波変成岩製埋葬施設の編年」『駿台史學』別冊第 173 号　駿台史学会　13-25 頁
西　弘海　1986『土器様式の成立とその背景』　真陽社
平林大樹　2013「信濃における後期・終末期古墳副葬鏃の変遷」『物質文化』第 93 号　物質文化研究会　123-138 頁
松木武彦　1991「前期古墳副葬鏃の成立と展開」『考古学研究』第 37 巻第 4 号　考古学研究会　29-58 頁
水野敏典　1993「古墳時代後期の軍事組織と武器副葬―長頸鏃の形態変遷と計量の相関にみる武器供給から―」『古代』96　早稲田大学考古学会　74-104 頁
水野敏典　1995「東日本における古墳時代鉄鏃の地域性」『古代探叢Ⅳ』滝口宏先生追悼考古学論集　滝口宏先生追悼考古学論集編集委員会　423-441 頁
水野敏典　2003「鉄鏃にみる古墳時代後期の諸段階」『後期古墳の諸段階』第 8 回東北･関東前方後円墳研究会大会　東北･関東前方後円墳研究会　29-42 頁
水野敏典　2009『古墳時代鉄鏃の変遷にみる儀仗的武装の基礎的研究』　奈良県立橿原考古学研究所
水野敏典　2013「鉄鏃」一瀬和夫・福永伸哉・北條芳隆編『古墳時代の考古学』4 副葬品の型式と編年　63-71 頁
箕浦　絢　2021「関東における古墳副葬鉄鏃の変遷」『駿台史學』第 171 号　駿台史學会　1-26 頁
茂木雅博　2015『箱式石棺　付・全国箱式石棺集成表』　同成社
なお、紙幅の都合上各報告書は割愛した。

図版出典

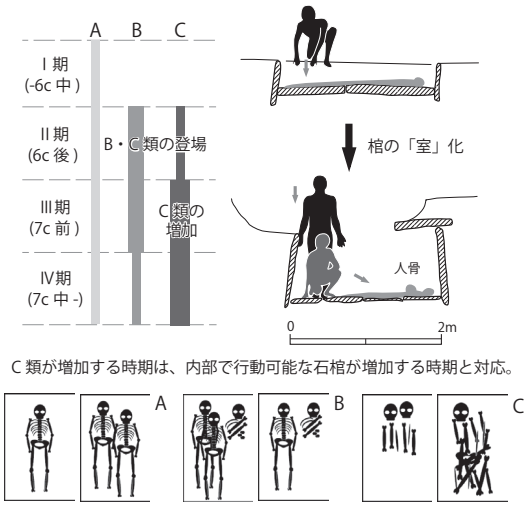
第 1 図　川畑 2009、箕浦 2021 などを参考に筆者作成
第 2 図　各実測図をもとに筆者作成
第 3 図　筆者作成（1 ～ 7、9・10、12、24・25・45 は筆者実測。9・12 は土浦市教育委員会蔵、ほかは既報告資料。それ以外は各実測図を再トレース）
第 4 図　筆者作成

Ⅳ．土器の儀礼からみた常総地域の石棺と石室

荒井　啓汰

はじめに

常総地域では、7 世紀前葉以降、箱形石棺と横穴式石室の影響を受けて「石棺系石室」が展開する。筆者は以前、常総地域における箱形石棺の埋葬行為の検討から、棺がしだいに「室」的に変容していく過程を整理し、埋葬行為の観点から石棺系石室の登場を検討した（荒井 2020：第 1 図）。ただしそこでは、石棺系石室それ自体についての検討や、石棺と石室の関係性などについては整理することができなかった。そこで本稿では、埋葬施設付近から出土した土器の様相を整理することで、初葬・追葬時における儀礼の側面から、箱形石棺と石棺系石室の関係性について検討したい。



第 1 図　常総地域の箱式石棺における埋葬行為の変化

1．分析の視点

(1) 常総地域における棺と室

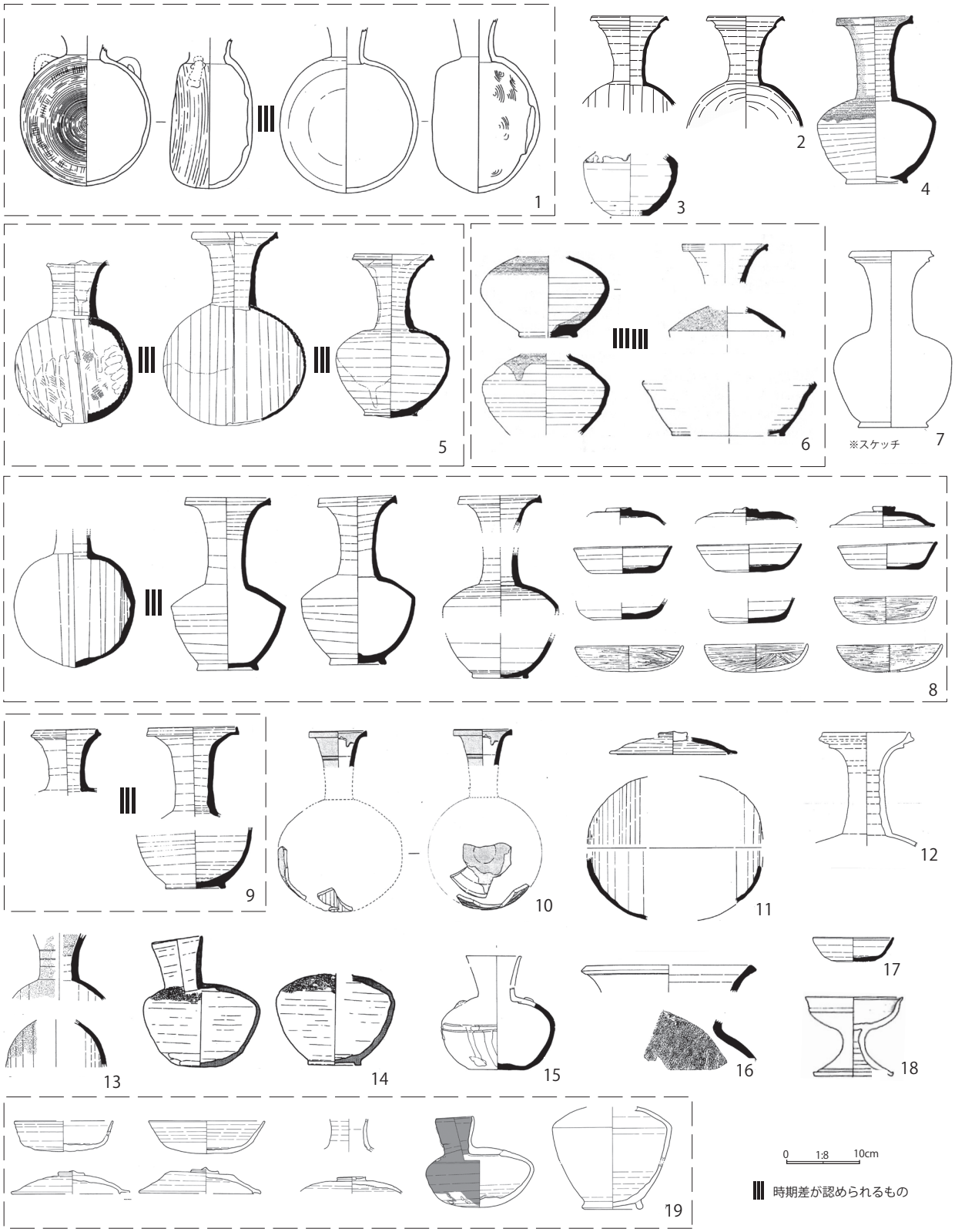
常総地域においては、7 世紀前葉以降、箱形石棺の形態を有しつつも横口を設ける「石棺系石室」が展開する。塩谷修は「石棺系石室」について、Ⅱ類（武者塚タイプ：長方形の掘り方内に石棺系石室を構築するもの）と、Ⅲ類（永国タイプ：南側に開口し、墓道をもつ石棺系石室であるもの）に分類している（塩谷 1992）。また箕輪健一は「石棺式石室」と呼称し、「①片岩の板石を使用すること、②通有の箱式石棺の一方（ほぼ南側）の小口に開口部を設け、横穴（口）を形造ること、③埋葬施設は、地山の中に構築される、いわゆる地下式であること、④方墳に採用され、羨道部・墓道を伴い周溝に連続すること」によって定義づけている（箕輪 1996：71 頁）。このように、形態的には箱形石棺や横穴式石室の影響を受ける形で展開するが、そこでの儀礼的様相についてはこれまでほとんど整理されてこなかった。本稿の目的は、土器の出土位置の検討に加え、土器組成の共通性や継続性を評価することを通して、石棺系石室や箱形石棺の儀礼について整理することである。

(2) 儀礼の共通性と継続性

埋葬施設とその周辺から出土した土器からは、死者に対する供献や生者の飲食儀礼といった行為を想定することができる。横穴式石室内部における土器副葬においては、生者の飲食儀礼が石室内部でおこなわれたのではなく、死者に対する副葬品として儀礼的に副葬・配置された可能性が示唆されている（森本 2007、藤野 2022）。そのような儀礼の意味づけについては今後検討が必要であるが、器種構成や土器の配置から情報や規範の共有を検討することは、既に研究があるように、有効な視点である（森本 2012、鈴木 2018 など）。例えば、同一器種が一定数確認され、かつ出土位置も同様なのであれば、そこには儀礼執行に関する情報の共有、あるいは埋葬における「規範」のようなものが想定されていいだろう（荒井 2018）。このような観点から、出土した土器について器種と数量によって以下のように分類する [1)]。

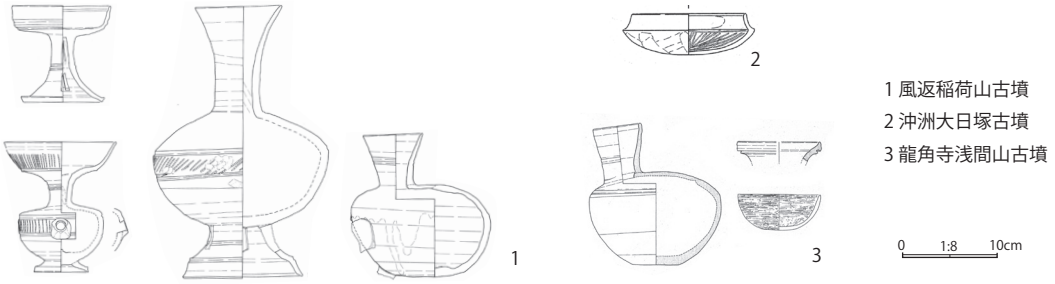
器種については、A 類：坏類（蓋坏、高坏、椀など）が出土したもの、B 類：瓶類（提瓶・フラスコ形長頸瓶、台付長頸瓶、はそうなど）が出土したもの、B' 類：甕・横瓶・大型壺などが出土したもの、に分類する。数量については、1 類：一回に使用される土器が少数（5 個体以下）のもの、2 類：一回に使用される土器が多数（5 個体以上）のもの、に分類する。

土器の数量は出土した土器の累計ではない。横穴系埋葬施設の場合、時期をまたいで複数回の儀礼が行われることがあるが、ここではあくまでも「一回の儀礼行為に使用される土器の数量と器種」に着目する。出土位



1 龍角寺 101 号墳（3 号主体） 2 羽成 7 号墳 3 道祖神 1 号墳 4 成田 3 号墳 5 志崎 1 号墳 6 道祖神前 2 号墳 7 龍角寺 108 号墳 8 松向作 060 号墳 9 池向 11 号墳 10 寿行地古墳 11 御山 SX015 号墳 12 石倉山 9 号墳 13 成田 6 号墳 14 大塚戸篠山 5 号墳 15 平戸台 2 号墳 16 間見穴 006 号墳 17 立田台第 2 遺跡 SM01 18 棒山 7 号墳 19 下河原崎高山 5 号墳

第 2 図　常総地域における埋葬施設付近の土器（1）



第 3 図　常総地域における埋葬施設付近の土器（2）

置については、議論を簡潔にするため、埋葬施設付近の出土に限定する。これは埋葬という限定された状況の行為のみを抽出する目的でもあり、そのため墳丘上や周溝内出土土器については触れていない場合がある。埋葬施設に関する出土位置としては、箱形石棺であれば箱形石棺内や箱形石棺蓋石上、横穴式石室であれば横穴式石室内や墓道・前庭部が考えられる。

上記の観点から、埋葬施設付近出土の土器の様相を検討する（第 2・3 図）。対象は主体部の遺存状態が比較的良好な事例に限定し、石材が抜き取られている事例などは除外した。時期決定に際しては鈴木敏則による湖西窯産須恵器の編年（鈴木 2001）を基本としながら、関東地方におけるフラスコ形長頸瓶（以下、フラスコ形瓶）の編年などを参考にした（岡林 1994、高橋 2009）。

２．土器の様相と出土状況

(1) 箱形石棺（第４図）

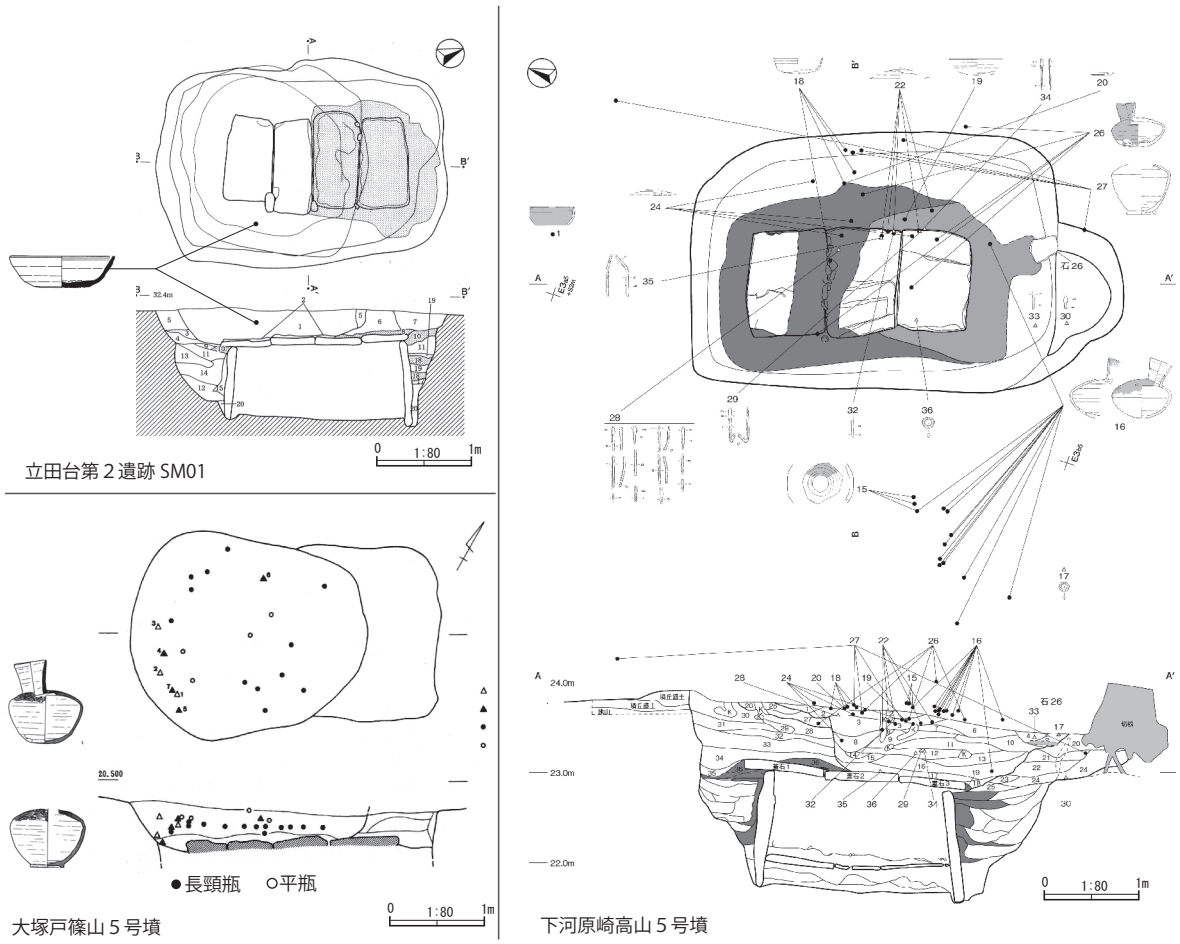
ここでは主に出土状況が明確な個別事例を取り上げ、その後全体の傾向を取り上げたい。

大塚戸篠山５号墳（茨城県水海道市）　径 12m の円墳である。主体部は雲母片岩と花崗岩を使用した板石小口積みの箱形石棺である。石棺上面には二次的な堀込が見られ、そこから鉄鏃･刀子･須恵器（平瓶 1･長頸瓶 1）が出土した（B1 類）。須恵器平瓶は破片が散在しているが、互いに同じような高さから出土している。接合すると全体の 1/4 ほどが残存している。須恵器長頸瓶も平瓶と同様の出土状況であるが、破片は高いレベルからも出土している。全体の 1/5 ほどが残存しており、頸部は欠損している。なお、それ以外の場所からは須恵器坏、土師器坏が出土している。石棺内には成人骨 8 体分があり、男性 5 体、女性 3 体であるとされる。すべての人骨は解剖学的自然位を留めておらず、集骨的な様相が見て取れる。

寿行地古墳（茨城県土浦市）　直径 14.5m の円墳である。雲母変成岩使用の箱形石棺で、埋葬人数は 1 体である。石棺上面の墓坑およびその周辺より、須恵器フラスコ形瓶 1 点の破片が検出されている（B1 類）。石棺付近より検出されたのは底部・胴部・口縁部片であるが、これらは 1 個体である可能性がある。フラスコ形瓶は頸部に二重の沈線がめぐり、口縁部には自然釉がかかる。石棺付近で出土した底部片と北西側の周溝から出土した破片が接合しており、自然に混入したとは考えにくいため、意図的な破砕・移動の可能性がある。

成田６号墳（茨城県行方市）　18m × 15m の円墳である。埋葬施設は雲母片岩使用の箱形石棺である。埋葬施設は一部攪乱を受けているが、石棺上面堆積土中よりフラスコ形瓶胴部破片 1 点と、頸部から肩部にかけての破片 1 点が出土している（B1 類）。頸部には二重の沈線がめぐっている。一部攪乱を受けているため、原位置からは動いていると思われるが、埋葬施設付近にフラスコ形瓶の破片が存在したことは言えるだろう。埋葬人数は 2 人であるとされ、解剖学的自然位を留めない集骨的な様相である。

下河原崎高山５号墳（茨城県つくば市）　墳丘長 40m の前方後円墳で、埋葬施設が 2 基確認されている。埋葬施設 1 は箱形石棺で、内部からは未盗掘の状態で 21 体分の人骨と遺物が確認された。埋葬施設 2 は主軸が東西方向を志向する箱形石棺だったが、意図的に石材が抜き取られていた。初葬で埋葬施設 2 が利用され、それが埋め戻されたのち、埋葬施設 1 において改葬および追葬がおこなわれた（埋葬施設の移築と改葬）と評価



第４図　埋葬施設付近における出土状況（1）

されている。埋葬施設１は筑波変成岩を用いた箱式石棺であるが、上面に追葬時などの二次的な掘り込み（追葬坑）が確認された。この埋土中や、周辺の墳丘平坦面から、須恵器坏身２・坏蓋２・平瓶２・フラスコ形瓶１・長頸瓶１が出土している。フラスコ形瓶はⅣ期後半、須恵器坏と台付長頸瓶はⅤ期初頭に位置付けられる。

立田台第２遺跡 SM-01（千葉県印西市）　19m× 14m の方墳である。埋葬施設は筑波変成岩使用の箱形石棺で、石棺蓋石上面には、追葬等の痕跡と思われる二次的な掘り込みが認められる。この二次的な掘り込みの埋土中より、須恵器坏身１点が出土している（A1 類）。埋葬人数は６体で、石棺北寄りに解剖学的自然位を留めずに埋葬されている。

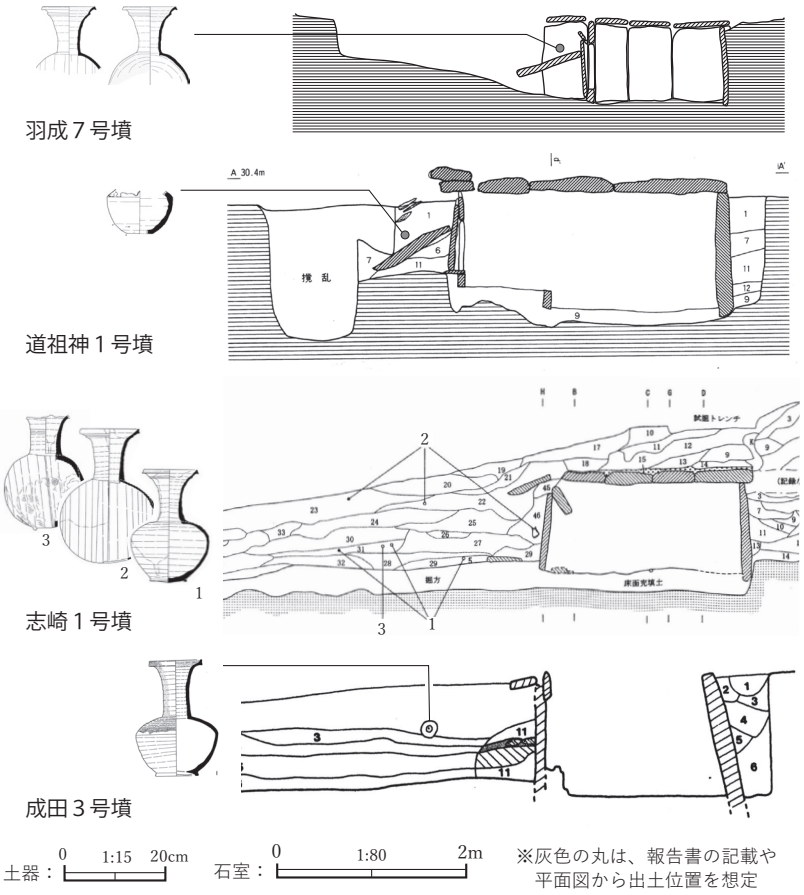
(2) 石棺系石室（第５図）

志崎１号墳（茨城県鹿嶋市）　10m 前後の造出し付円墳とされる。主体部は筑波変成岩で構築された地下式の横穴式石室である。全長 2.5m で板石による閉塞ながされ、それを支える支石と思われる石材も出土している。墓道の埋土より、須恵器フラスコ形瓶２点、長頸瓶１点が検出された（B1 類）。1 の長頸瓶は墓道直上とその埋土下層より出土している[2)]。最大径を胴部上半にもち、高台がつく。2 のフラスコ形瓶は羨道部と墓道埋土上層から検出された。体部は横長の球形で、直線的に立ち上がるやや太めの頸部がつく。底部中央に焼成後穿孔がみられる。外面から打撃を加えたと思われるが、打撃痕は認められない。その他、胴部上半も大きく欠損している。3 は墓道埋土下層より出土したフラスコ形瓶である。頸部には二重の沈線が施されている。ほぼ完形であるが、口縁部のみ欠損する。

道祖神１号墳（茨城県石岡市）　東西 11m、南北 9m 程度の方墳である。筑波変成岩で構築された地下式の横穴式石室で、全長 3.49m である。羨門部にあたる場所では板石による閉塞が確認され、そこに外側から細長

い支石が斜めに寄りかかった状態であった。羨門の南側やや西寄りの地点から、破片となった状態で須恵器平瓶の体部が検出されている（B1 類）。出土した標高は不明だが、平面図とあわせて考えると閉塞石の支石上面からの出土である可能性が高い。全体の 1/4 ほどが残存しており、口縁部・頸部・底部が欠損している。湖西産の須恵器と判断される。

成田３号墳（茨城県行方市）直径 18m の円墳である。主体部は筑波変成岩使用の地下式の横穴式石室で、玄門部は板石による閉塞を行い、それをシルト岩と粘土で支えている。閉塞前面の墓道から須恵器長頸瓶 1 点が出土している（B1 類）。墓道堆積土の上層から出土しており、立てかけられたシルト岩の上部にあたる。墓道がほとんど埋まった状態で、長頸瓶が置かれていることがわかる。口縁部から肩部にかけて自然釉が付着し、湖西産であると思われる。底部には焼成後穿孔が確認される。出土遺物には、馬具（壺鐙、杏葉、轡、飾金具、鋲）、鉄鏃、須恵器などがある。このうち壺鐙など多くは玄室内袖部から出土しているが、一部は墓道底面より出土している。このうち杏葉 1 点は閉塞石を支える粘土の中から検出されており、意図的に埋置したものと思われる。石室内からは 5 体分の人骨が確認されているがすべて解剖学的自然位を留めておらず、集骨的な様相を示す。



第 5 図　埋葬施設付近における出土状況（2）

羽成７号墳（茨城県つくば市）　墳丘の規模、形状は不明である。筑波変成岩使用の横穴式石室で、板石で閉塞し倒れないように棒状の石で支えとしており、その南側には墓道がつく。玄室内北寄りに人骨が残存しており、集骨的な様相を呈している。須恵器フラスコ形瓶 1 点が閉塞石支石上より出土している（B1 類）。閉塞石前面には攪乱が入っているため、出土位置はこの攪乱の中であるという可能性もあるが、図面から判断する限り支石前面の墓道埋土（報告書中第 2 層）からの出土であると思われる。このフラスコ形瓶は口縁部から肩部が残存している。頸部の沈線などは認められない。その他、須恵器フラスコ形瓶胴部と須恵器片数点出土しているが、これらは現在行方不明であり、出土状況もわからない。

松向作 060 号墳（千葉県佐倉市）　一辺が 15m ほどの方墳である。主体部は南向きに開口した横穴式石室で、筑波変成岩の板石を使用している。玄門部より一回り大きい板石で閉塞する。石室前面の墓道および周溝から土器が出土しており、須恵器坏蓋 3、坏身 5、フラスコ形瓶 1、台付長頸瓶 3、土師器坏 4 である。特に瓶類の出土位置にまとまりはなく、故意に散布されたような状態を示す。フラスコ形瓶のみが古相を呈し（B1 類）、他はⅤ期の段階にまとまって使用されたものと思われる（B1/A2 類）。高台のついた長頸瓶底部の一部は石室内から出土しており、それが墓道出土の破片と接合している。後世の攪乱による混入も考えられるが、石室の天井石や閉塞石が動いていないことをふまえると、埋葬行為の一環として意図的に長頸瓶破片を置いたとも想

定できる。

(3) 横穴式石室

風返稲荷山古墳（茨城県かすみがうら市） 全長 78m の前方後円墳である。埋葬施設は筑波変成岩板石使用の複室構造横穴式石室で、玄室に箱形石棺が 3 基配置されている。前室内に須恵器高坏 1・瓿 1・平瓶 1・台付長頸壺 1 が配置されていた。築造はかつて墳丘から出土した須恵器や副葬品の年代観から 7 世紀初頭と想定される一方で、これらの須恵器は 7 世紀前葉に位置付けられるため、追葬に伴う可能性が高い。

沖洲大日塚古墳（茨城県行方市） 全長 35.5m の帆立貝形古墳である。円筒埴輪・形象埴輪が出土している。埋葬施設は筑波変成岩板石使用の横穴式石室で、現状では単室構造であるが複室構造の可能性もある。玄室の玄門立柱石付近からほぼ完形の土師器坏身が出土している。おおむね TK43 型式併行期が想定され、初葬段階のものである可能性が高い。ただし原位置を保ってはいないと判断されているため、横穴式石室内に土師器を副葬していた可能性を示すに留める。

龍角寺浅間山古墳（千葉県栄町） 全長 78m の前方後円墳である。埋葬施設は筑波変成岩使用の複室構造横穴式石室である。前庭部のピット付近から須恵器平瓶 1 が、石室内覆土中と前庭部からフラスコ形瓶 1・土師器坏 1 が出土している。平瓶は頸部に二重沈線がめぐり、Ⅳ期前半の所産と判断される。土師器坏は玄室から羨道にかけて出土し、接合している。最も床面に近い破片は前室から出土しており、フラスコ形瓶の破片も前室からの出土なので、前室など石室内に土器副葬されていた可能性がある。

(4) 全体の傾向

以上の状況をふまえて、箱形石棺と石棺系石室における土器出土状況について、器種・数量・出土位置・時期をまとめた（第 6 図）。全体的に B1 類（少数の瓶類のみ）、および B’1 類（少数の甕など）が多い。B1 類の中でも特にフラスコ瓶が卓越しており、特に石棺系石室の場合では基本的にすべての事例でフラスコ形瓶ないし長頸瓶による儀礼行為が行われている。数量については少数のもの（B1 類）に限定され、一度に 5 個体以上使用されることはない。須恵器が多量に出土しているように思える事例においても、いずれも儀礼執行のタイミングが一回ではなく、1 回の儀礼行為に伴う須恵器の数量は 1 ～ 3 個体に限定される。つまり、瓶類が多量に出土していると思われる例は、複数の儀礼執行の結果であると言える[3)]。

B1 類の儀礼行為は、同一古墳において時期を隔てて継続している点が指摘できる。志崎 1 号墳では、異なる特徴をもつ 3 個体のフラスコ形瓶・台付長頸瓶が出土しており、3 回にわたる儀礼行為を想定できる。同様に松向作 060 号墳では 2 回ないし 3 回、道祖神前 2 号墳では 2 回以上、繰り返し儀礼行為を確認できる。この傾向は箱形石棺でも確認でき、下河原崎高山 5 号墳、龍角寺 101 号墳（第 3 主体）、池向 11 号墳、大塚戸篠山 5 号墳でそれぞれ 2 回以上の儀礼行為が想定される。いずれの段階においても B 1 類であり、時期を隔てても同様の儀礼行為を行っていることがわかる。

出土位置について、箱形石棺では石棺蓋石上の埋土内からの出土が多い（下河原崎高山 5 号墳・大塚戸篠山 5 号墳・立田台第 2 遺跡 SM01 など）。土器が出土したのは、いずれも石棺への二次的な掘り込み部分からで、これは追葬･改葬時の掘り込みとされる（荒井 2020）。ここから想定されるのは、追葬などで二次的埋葬を行ったのち、蓋石を閉め、その上面で土器を使用した儀礼行為がなされたとするものである。タイミングとしては、埋葬施設を完全に密封した直後であると指摘できるだろう。また、埋葬施設内に土器が配置される事例は認められなかった。

一方、石棺系石室での出土状況をみると、その多くが埋葬施設外の閉塞石前面である。これらの石室には、板石等で閉塞を行った後、細長い支石で支えをするという共通点がある。ほとんどはこの支石を配置した外側から、須恵器フラスコ形瓶が出土している。支石上というよりも、そのやや外側の墓道埋土中からの出土であることもあるが、儀礼執行の段階としては閉塞を行った直後にあたり、同様のタイミングといっていいだろう（志崎 1 号墳・成田 3 号墳・羽成 7 号墳・道祖神 1 号墳・道祖神前 2 号墳）。

	古墳	所在	2期		3期			4期		
			TK43	TK209	TK217		飛鳥Ⅱ	飛鳥Ⅲ・Ⅳ	飛鳥Ⅴ	
			Ⅲ中	Ⅲ後	Ⅲ末	Ⅳ前	Ⅳ後	Ⅳ末	Ⅴ初	Ⅴ前
箱形石棺	大塚戸篠山５号墳	茨城県水海道市			築	……	B1：蓋上			
	棒山７号墳	茨城県潮来市			A1：蓋上					
	寿行地古墳	茨城県土浦市				B1：主近				
	成田６号墳	茨城県鉾田市				B1：主近				
	下河原崎高山５号墳（埋葬施設１）	茨城県つくば市		築	……	……	B1：蓋上	……	A1＋B1：蓋上	
	龍角寺101号墳（３号主）	千葉県境町	B1：主近	……	B1：主近					
	間見穴006号墳	千葉県八千代市			B'1：主近					
	平戸台２号墳	千葉県八千代市				B1：蓋上				
	池向11号墳	千葉県佐倉市				B1：蓋上	……	B1：蓋上		
	立田台第２遺跡SM01	千葉県印西市						A1：蓋上		
石棺系石室	道祖神１号墳	茨城県石岡市			B1：閉					
	成田３号墳	茨城県行方市			築	……	……	……	B1：閉	
	志崎１号墳	茨城県鹿嶋市				B1：閉	B1：閉	B1：閉		
	羽成７号墳	茨城県つくば市					B1：閉			
	石倉山９号墳	茨城県土浦市					B1：？			
	道祖神前２号墳	茨城県龍ヶ崎市						B1：閉	……	B1：閉
	松向作060号墳	千葉県佐倉市				B1：閉		……	A2：主近	
	龍角寺108号墳	千葉県境町						B1：主近		
横穴式石室	風返稲荷山古墳	茨城県かすみがうら市		築	A1＋B1:室内					
	大日塚古墳	茨城県行方市	A1：主近							
	龍角寺浅間山古墳	千葉県栄町			A1?:室内					

基本的に主体部の遺存状態が良好な事例を抽出
閉前…横穴式石室閉塞石前面（墓道覆土中を含む）
蓋上…箱式石棺蓋石上面（覆土中を含む）
室内…埋葬施設内部
主近…上記以外の主体部付近

B　B・B'のみで構成されるもの
A　Aを含むもの

編年上段は本書での編年、中段は陶邑編年（田辺 1981）
および飛鳥編年（西 1978）、下段は遠江編年（鈴木 2001）

第６図　埋葬施設付近出土土器の器種・数量・出土位置と時期

４．儀礼行為からみた常総地域の箱形石棺と石棺系石室

(1) 儀礼執行の「場」

まず指摘できるのは、石棺系石室の閉塞石前面と、箱形石棺の蓋石上面が同じ「場」として機能していたという点である（第７図）。具体的には、石棺系石室では閉塞石の前面において、箱形石棺では蓋石上面においてそれぞれ土器が出土している。一連の埋葬行為の中で、埋葬施設を封鎖し遺体を完全に密閉する段階は、石室では閉塞を行うタイミングであり、石棺では蓋石をかけるタイミングである。この同じ埋葬施設の封鎖のタイミングにおいて、少数の瓶類を用いた同様の儀礼行為が行われている。埋葬施設封鎖の段階という点で、石室の閉塞石前面と石棺の蓋石上面は対応する関係であり、土器を使用する同一の儀礼の「場」として機能していたことがわかる。

また一部の事例では、土器の破砕行為が行われている。箱形石棺の例をみると、追葬・改葬に伴う掘り込みの堆積土中から、土器が細片になって出土していることがわかる。後世の攪乱でない可能性が高く、意図的な破砕行為が想定される。また、成田３号墳や志崎１号墳からは焼成後に底部を意図的に打ち欠いたフラスコ形瓶・台付長頸瓶が出土しており、同様の事例は土浦市山川９号墳でも見受けられる（第７図）。

この土器破砕行為に関連して、埋葬施設付近から出土した土器が、周溝内から出土した破片と接合した事例が興味深い。寿行地古墳では底部の一部破片のみ西側周溝より出土しているし、成田２号墳では１号石棺確認面の破片と南側周溝確認面の破片が接合している。また成田７号墳では攪乱を受けた石棺覆土中の破片と、東側周溝覆土の破片が接合している。これらは、埋葬施設から土器の一部が周溝に転落したとは考えにくい事例であり、意図的な土器の移動が推測される。

第 7 図　儀礼の場の共通性

このように、埋葬施設封鎖のすぐ外側で、少数の瓶類を破砕する儀礼が一定数確認される。当然、その儀礼行為にはバリエーションが認められようが、石棺系石室の閉塞石前面と箱形石棺の蓋石上が同様の「場」として認識されていたことが指摘できる（第 8 図）。ここに石棺と石室の儀礼的共通性がうかがえ、その埋葬行為には共通した規範を想定することも可能である。

(2) 儀礼行為の広域的共通性

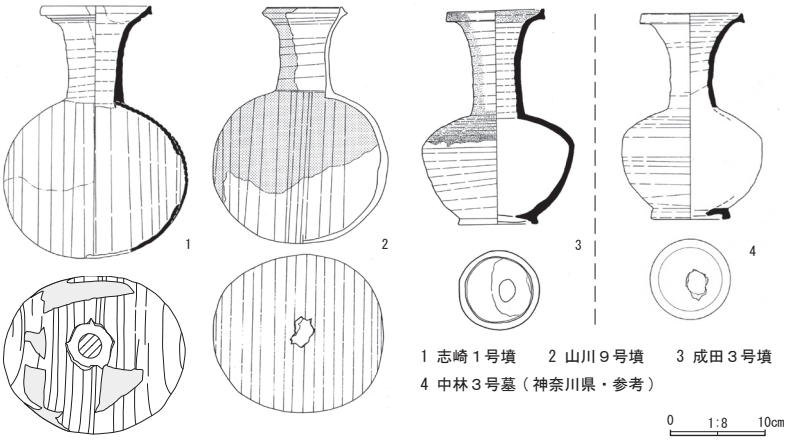
さて、常総地域でみられた土器の儀礼行為は、当該地域特有のものではない。むしろ、広域的に広がる要素の一部をなすものと理解した方がいいだろう。例えば、南武蔵・相模地域では 6 世紀後葉から 8 世紀初頭までを第 1 ～ 3 段階として設定し、玄室では坏・高坏類などの食器が第 1 ～ 3 段階において出土する一方で、墓前域においては第 2 段階以降に大型甕や長頸瓶が供献されるようになるとする（柏木 2014）。また第 3 段階の墓前域においては高台付坏などを多数配置するようになるという。大甕やフラスコ形瓶・長頸瓶の出土位置が墓前域であり墓室内ではないという点は、常総地域の様相と共通する。さらに第 3 段階で食器を多数使用する儀礼行為は、常総地域では松向作 060 号墳でみられる様相である。

また相模地域の横穴墓でも、フラスコ形瓶の焼成後底部穿孔（中林 3 号墓・梨の木坂 1 号墓）、長頸瓶の打ち欠き（三ノ宮・上栗原 1 号墓、根坂間Ｂ支群 5 号墓）、平瓶の底部穿孔（熊ヶ谷 20 号墓）など、土器の意図的な破壊行為が確認されている。「少数の瓶類を封鎖施設前面＝墓前域において破壊する」という行為が、相模と常総の両地域において共通して認められると言える[4)]。

(3) 埋葬施設の長期利用と既存の古墳に対する儀礼行為

今回の検討では、繰り返し同一の儀礼行為が行われる様相がみられ、その期間が比較的長期にわたることが確認された。この埋葬施設の長期利用は、6 世紀代にはあまりみられず、7 世紀代に顕在化することがうかがえる。この傾向は他地域の横穴式石室においても認められ、7 世紀後半を中心に古い埋葬施設への追葬・再利用が顕在化している（荒井 2021）。長期利用がなされるということは、追葬などの埋葬も含め、過去の埋葬に対し何らかの働きかけをおこなうということであり、土器の供献はそのような行動に際しての儀礼行為の一部と認識できよう。

8 世紀前半の石室の再利用についてはすでに議論があるが（渡邉 2000・2018 など）、常陸地域においてもいくつかの指摘がある。田中裕と吉澤悟は、つくば市平沢 3 号墳の前庭部から奈良時代の火葬墓が出土したことについて、先祖との系譜を意識し、世代を超えた追葬であると評価した（田中・吉澤 2011）。『続日本紀』の記述などを参照し、「8 世紀初頭に、自らの出自や系譜を強く主張する運動」



第 8 図　底部穿孔のあるフラスコ形瓶・長頸瓶

（36 頁）があったことを想定している。渥美健吾は水戸市ニガサワ 1 号墳の土器を再検討し、前庭部から出土した 3 時期の土器群は、埋葬とは直接関係のない石室の「再利用」であると位置付けた（渥美 2013）。さらに稲田健一も十五郎穴横穴墓群の検討の中で、8 世紀後葉から 9 世紀前葉の古墳の再利用について言及している（稲田 2016）。

今回検討した常総地域の事例は、平沢 3 号墳の火葬墓の時期などと対応している。例えば成田 3 号墳は、古墳自体は 7 世紀前葉から中葉の築造であるのに土器は 8 世紀の所産であり、再利用と言えるかもしれない[5)]。ただし、今回検討した他の多くの事例は、土器型式にして 2 型式以内の比較的短いタイムスパンのなかでの行動である。これらは、前回の埋葬の際の記憶を保持している可能性が高く、「再利用」という枠組みは適切でないかもしれない。当然すぐに考えられるのは「追葬」に際しての行為であるが、第 5 章で述べたように、追葬とは認識できない過去の死者への働きかけが想定されるのであれば、追葬以外の行動の可能性も考慮せねばならない。

おわりに

土器の出土位置と器種・数量から、箱形石棺と石棺系石室の関係性を検討した。埋葬施設封鎖の段階で、石棺系石室の閉塞石前面と、箱形石棺の蓋石上面は対応する関係であり、土器を使用する儀礼の「場」として、同じように機能していたことを指摘した。今回、筑波変成岩使用横穴式石室の儀礼行為については詳細な検討が叶わなかったが、少なくとも箱形石棺の埋葬行為と石棺系石室の埋葬行為に共通性があることを確認した。一方、石棺系石室は玄室に横方向から侵入する構造をとるため、横穴式石室の影響を受けていることは疑いない。そのため既に指摘されている通り、石棺系石室が「室」的な箱形石棺と板石使用横穴式石室の双方の影響を受けて成立・展開していると言える（箕輪 1996、荒井 2020、冨田 2021 など）。

註

1）数量の分類は、10 個体程度の多いものと、1 個体などの少ないものを峻別する意味合いであって、5 個体という指標の設定は便宜的なものである。

2）ただし志崎 1 号墳では、墓道の下層から新しい様相の長頸瓶が、上層から古い様相のフラスコ形瓶が検出されており、検討の余地を残す。現状では、最終的な儀礼の段階で墓道を開け直し、それを埋める際に過去の儀礼で使用されたフラスコ形瓶が埋土上面に移動したと考えざるをえない。

3）同一時期を示す土器であっても、異なるタイミングであった可能性が考えられる。

4）フラスコ形瓶・長頸瓶が墓前域や封鎖施設前面から出土する状況は、茨城県内の横穴墓・横穴式石室のほか、東北地方の横穴墓にまで認められる。巨視的には、東海産須恵器の広域流通（高橋 2009、鈴木 2012）と関連して、相模から東北地方にいたる範囲の中に常総地域の事例も位置付けられる。

5）関連する議論として、築造と土器に時期差が認められる横穴墓の事例がある（佐藤 2015）。

参考文献

渥美賢吾　2013「律令制成立期前後の墓前祭祀における土器様相の一側面 ―茨城県水戸市ニガサワ 1 号墳出土土器をめぐって」『茨城県考古学協会誌』第 25 号　茨城県考古学協会　25-40 頁

荒井啓汰　2018「横穴式石室と埋葬行為―関東地方の事例を中心として―」『土曜考古』第 40 号　土曜考古学研究会　27-52 頁

荒井啓汰　2020「常総地域の箱式石棺からみた古墳時代後半期の埋葬行為」『考古学研究』第 67 巻第 3 号　56-75 頁

荒井啓汰　2021「横穴式石室の利用期間と追葬行為―静岡県域を中心に―」『史境』第 81 号　72-89 頁

稲田健一　2016「横穴墓の時期の問題」『十五郎穴横穴墓群―東日本最大級の横穴墓群の調査―』ひたちなか市教育委員会　319-322 頁

岡林孝作　1994「須恵器フラスコ形長頸瓶の編年と問題点」『日本と世界の考古学』岩崎卓也先生退官記念論文集編集委員会　雄山閣　241-259 頁

柏木善治　2014『埋葬技法からみた古代死生観―６～８世紀の相模・南武蔵地域を中心として―』　雄山閣
佐藤　渉　2015「古墳時代終末期墳墓の造墓と墓前祭祀の時期差をめぐる問題―東北南部地域を中心として―」『アーキオ・クレイオ』第 12 号　東京学芸大学考古学研究室　29-45 頁
塩谷　修　1992「終末期古墳の地域相―桜川河口域にみられる小型古墳の事例から」『土浦市立博物館紀要』第 4 号　土浦市立博物館　23-32 頁
鈴木一有　2018「東海―古墳出土須恵器にみる地域性―」『季刊考古学』第 142 号　雄山閣　49-53 頁
鈴木敏則　2001「湖西窯古墳時代須恵器編年の再構築」『須恵器生産の出現から消滅　猿投窯・湖西窯編年の再構築』第 5 分冊　東海土器研究会　141-170 頁
鈴木敏則　2012「須恵器の編年②　東日本」一瀬和夫・福永伸哉・北條芳隆編『古墳時代の考古学１　古墳時代史の枠組み』同成社　160-172 頁
高橋　透　2009「東日本太平洋沿岸地域出土須恵器フラスコ瓶の編年　湖西産を中心に」『考古学集刊』5　明治大学文学部考古学研究室　75-97 頁
田辺昭三　1981『須恵器大成』　角川書店
田中　裕・吉澤　悟　2011「古墳の正面に納められた奈良時代の火葬墓―茨城県つくば市平沢 3 号墳出土骨蔵器―」『筑波大学　先史学・考古学研究』第 22 号　筑波大学　25-40 頁
冨田　樹　2021「筑波変成岩製埋葬施設の編年」『駿台史學』別冊第 173 号　駿台史学会　13-25 頁
西　弘海　1986『土器様式の成立とその背景』　真陽社
藤野一之　2022「土器からみた儀礼様式と金鈴塚古墳」上野祥史編『金鈴塚古墳と古墳時代社会の終焉』　六一書房　173-188 頁
箕輪健一　1996「終末期古墳と石棺式石室」『婆良岐考古』第 18 号　婆良岐考古同人会　69-82 頁
森本　徹　2007「横穴式石室と葬送儀礼」『近畿の横穴式石室』　横穴式石室研究会　291-304 頁
森本　徹　2012「儀礼からみた畿内横穴式石室の特質」『ヒストリア』235 大阪史学会　1-25 頁
渡邊邦雄　2000「律令墓制における古墳の再利用―近畿地方の 8・9 世紀の墳墓の動向―」『考古学雑誌』第 85 巻第 4 号　日本考古学会　1-75 頁
渡邊邦雄　2018『墓制にみる古代社会の変容』　同成社

本文中報告書

大塚戸篠山 5 号墳：土井義行 1993『大塚戸篠山古墳群第 5 号墳発掘調査報告水海道市教育委員会』
成田古墳群：黒澤秀雄 1998『炭焼遺跡・札場古墳群・三和貝塚・成田古墳群』　茨城県教育財団
寿行地古墳：石川功・石橋充編 1995『寿行地古墳発掘調査報告書』土浦市教育委員会・出島村教育委員会
下河原崎高山 5 号墳：内堀　団ほか 2020『下河原崎高山古墳群 2』　茨城県教育財団
立田台第 2 遺跡 SM01：黒沢　崇 2010『成田新高速鉄道・北千葉道路埋蔵文化財発掘調査報告書 4―印旛村立田台第 2 遺跡・木橋第 2 遺跡―』　千葉県教育振興財団
志崎 1 号墳：篠崎　正・鈴木　徹 2013『志崎古墳群』　勾玉工房 Mogi
道祖神 1 号墳：箕輪健一 1995『道祖神古墳発掘調査報告（染谷古墳群の調査）』石岡市教育委員会
羽成 7 号墳：春日綱男 1990『羽成 7 号墳』つくば市教育委員会
松向作 060 号墳：山口典子・田島新編 1992『千葉県松向作遺跡』千葉県文化財センター
風返稲荷山古墳：日高慎ほか 2000『風返稲荷山古墳』霞ヶ浦町教育委員会
沖洲大日塚古墳：佐々木憲一・小野寺洋介編 2018『霞ヶ浦の前方後円墳　古墳文化における中央と周縁』　六一書房
龍角寺浅間山古墳：白石太一郎・白井久美子ほか 2002『印旛郡栄町浅間山古墳発掘調査報告書』財団法人千葉県史料研究財団

図版出典

第 1 図　荒井 2020 に一部加筆
第 2 ～ 5 図　各報告書より筆者作成（第 2 図 2 は筆者実測）
第 6・7 図　筆者作成
第 8 図　各報告書より筆者作成

Ⅴ．つくば市中台古墳群の再評価

荒井　啓汰

はじめに

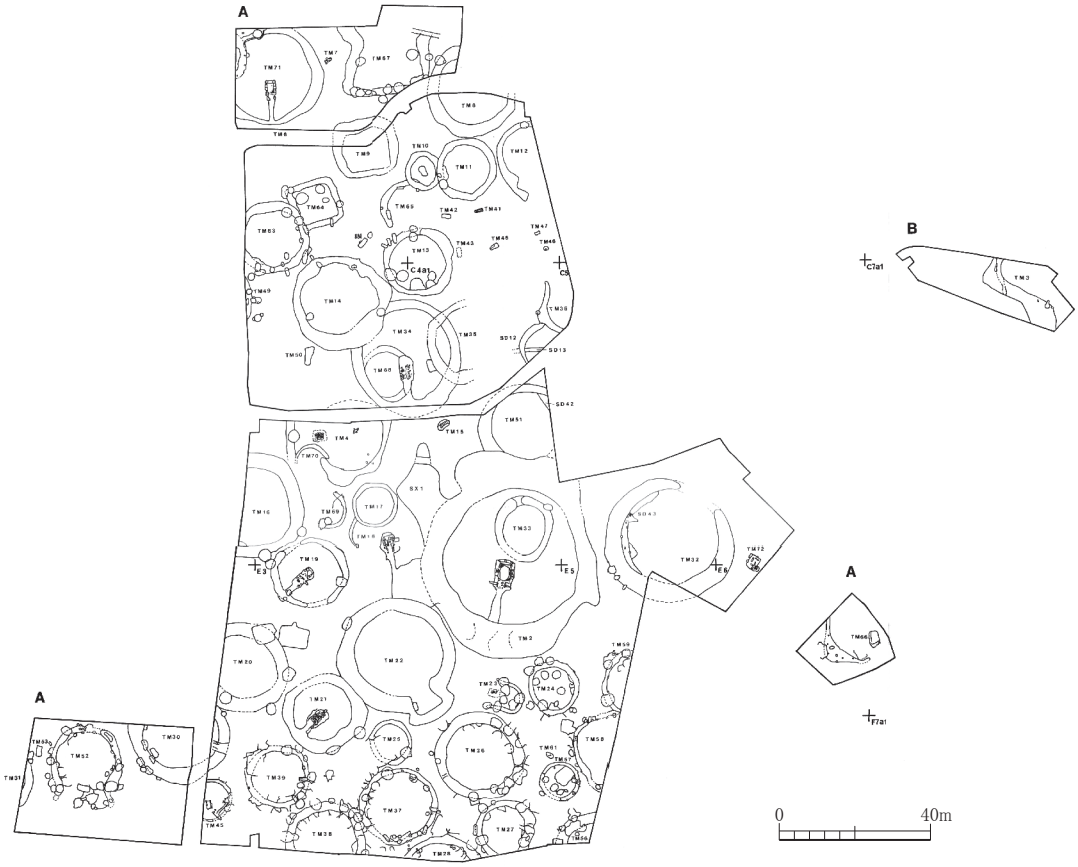
筑波山南麓の平沢地域は、埋葬施設の石材としての筑波変成岩を産出したと目される地域のひとつである。当該地域には中台古墳群や平沢古墳群、山口古墳群などの後・終末期の古墳群が存在するが、それらの集団が常総地域全体の中でいかなる役割を果たしていたかは必ずしも明確にされてこなかった。そこで、つくば市中台古墳群の遺物と石室の再検討を通して、平沢地域における石材産出集団とその性格に接近したい。

１．背景と目的

(1) 中台古墳群をめぐる現状

つくば市中台遺跡は、茨城県つくば市大字北条字古城 1159 番地に所在する遺跡で、平沢山とよばれる小丘陵の南側に立地している（第１図）。以降この地域を便宜的に「平沢地域」と呼称する。中台遺跡では、平成 3 年 4 月から平成 4 年 12 月までの茨城県教育財団による発掘調査において、旧石器時代から近世に至るまでの多数の遺構が確認されており、平成 7 年に報告書が刊行されている（吉川ほか 1995）。古墳時代の遺構としては、古墳 65 基、方形周溝墓 2 基、竪穴住居跡 100 軒が確認されている。竪穴住居跡は古墳時代前期から後期までみられるが、古墳時代前期のものが多い。古墳群は密集度の高い群集墳の様相を呈し、本稿ではこれを中台古墳群と呼称する（第 2 図）。中台古墳群は、後・終末期群集墳としては、6 世紀初頭に形成されはじめ、6 世紀後半から 7 世紀代に活発に造墓活動がなされている。埴輪を有する古墳の比率が高い、埋葬施設が

第１図　桜川下流域における主要な後・終末期古墳



第 2 図　中台古墳群全体図

多様、古墳の密集度が高いといった特徴が指摘されている（黒澤 2009）。

興味深いのは、中台古墳群を含む平沢地域においては、石材獲得と埴輪生産の可能性が指摘されている点である。まず石材獲得の面では、平沢地域では筑波変成岩類Ⅲ帯の石材が産出する地域であり、いわゆる平沢産の筑波変成岩を獲得・流通していた可能性が指摘されている（淺野 2022）。石橋充は、箱形石棺が卓越する常総地域において、平沢地域の横穴式石室の採用率の高さに注目しており、上位階層から横穴式石室の採用を許可されたものとみる（石橋 2001）。これを受けて冨田樹は、石材獲得を担った集団を背景に想定している（冨田 2022）。

埴輪生産については、古霞ケ浦沿岸域を中心として、雲母粒子を多量に含む埴輪と大粒の白色砂礫を多量に含む埴輪が指摘されており、その胎土の特徴から「筑波山系の埴輪」と呼称されている（塩谷 1997、石橋 2004）。特に桜川の下流域から河口にかけて分布の中心域となることから、雲母を含む胎土の特徴もふまえて、筑波山南麓（平沢地域周辺）が生産域であると目されている。

(2) 問題点と本論の目的

問題点　上記のような研究背景から、中台古墳群は埋葬施設や埴輪の検討はもちろん、首長墓系譜の議論などでも触れられてきたが（例えば滝沢 2015）、中台古墳群の展開や社会的位置づけについては必ずしも議論が深化されてきたわけではない。中台古墳群をめぐる問題点は、常総地域において、中台古墳群を含む平沢地域の社会的役割や位置づけが不透明な点である。

まず、平沢地域では筑波変成岩の石材獲得（淺野 2022、冨田 2022）や「筑波山系の埴輪」の生産（塩谷 1997、石橋 2004）が指摘されているが、これらを担ったと推定される中台古墳群などの被葬者が周辺地域の首長といかなる関係性を取り結んでいたか、という点がある。具体的には、高浜入り沿岸に集中する首長墓との関係性であるが、高浜入り側に常陸南部地域における地域最大首長墳が集中する一方で（佐々木・小野寺編

2018)、平沢地域に同様の首長墓は沼田八幡塚古墳（後円・91 m）以外みられず、高浜入り側と平沢地域（土浦入り側）はどのような社会関係を取り結んでいたか、ということが焦点になる。

次に、群集墳において金銅装馬具や圭頭大刀といった副葬品を有するに至った社会的背景である。中台古墳群では首長墓と遜色ない副葬品を有しているが、当該古墳群でこれらの副葬品の検討は必ずしも進んでいるとは言えない。特に、馬具保有古墳が多くない常陸南部地域の中で、3 基に馬具が副葬される中台古墳群の様相には、特殊な事情が含まれている可能性もある。

本論の目的　本論では、中台古墳群における副葬品や埋葬施設の検討から、平沢地域が常陸南部の地域社会で担った社会的役割を考察する。そのために、a. 金属器の観察と再実測を通して、副葬品（武器・武具・馬具）の時期的・階層的位置づけを整理する、b. これら副葬品の検討に埋葬施設の様相を加味することで平沢地域の特徴を明らかにする、の 2 点を目的とする。特に、注目すべき遺物が出土している中台 2・21・66 号墳を取り上げることで、その性格の一端を明らかにしていきたい。

２．中台古墳群の再検討―副葬品を中心に―

⑴ 中台２号墳（第３・４図）

墳丘と埋葬施設　中台 2 号墳は直径 36 mの円墳である。埋葬施設は筑波変成岩板石を用いた横穴式石室である。2 号墳の横穴式石室は従来複室構造とされていたが、玄室中央の間仕切石の地点では立柱石などは伴わないため、間仕切石によって玄室奥壁側に屍床部をつくりだしたとみるほうが正しい。墳丘・周溝からは円筒埴輪・形象埴輪・土師器坏などが出土している。墳丘下に 33 号墳が確認されており、33 号墳を破壊し取り込むかたちで 2 号墳が構築されている。

副葬品とその評価　副葬品としては、金銅装馬具、鉄鏃、鉄刀、刀子、不明鉄製品がある。金銅装馬具の構成としては、環状鏡板付轡、青銅製鈴 2 点、長方形留金具 1 点、貝製飾金具 3 点、鞍金具（磯金具）2 点、鞍 1 点、鉸具 1 点である。

1 は環状鏡板付轡で大形矩形立聞を伴う。2 は銜、3 は引手の可能性が高い。

4･5 は青銅製鈴でいずれも青銅製の鋳造品である。そのうちの 1 点は珠文と珠圏文をもついわゆる「虎頭鈴」とよばれるもので、6 世紀後半に盛行するものである（田中 2022）。虎頭鈴は、大伽耶における目玉文様の球状馬鈴を祖形として列島内で生産されたことが指摘されている（桃﨑 2019）。

6 ～ 8 は貝製飾金具（宮代 1989）である。座金はいずれも円形で、花弁状は呈していない。宝珠部は直径 1.5 ～ 1.8 cm 程度で、心棒が残存する。鉄製で、現状では金銅張は確認できない。9 は長方形留金具である。鉄地金銅張で、方形透かしをもつ。2 点の鋲はやや大きさが異なる。

13 ～ 17 は鞍金具である。鞍金具は磯金具と縁金具が残存しているが、覆輪や洲浜形は見当たらない。幅の狭い縁金具を用い、磯金具には台形状の突起がある。磯金具には鞍が貫通する孔がみられず、前輪の可能性がある。覆輪を伴わず、磯金具と洲浜形を別造りにする系列で、幅の狭い縁金具を用いる一群に該当する（宮代 1996）。TK43 型式併行期以降の特徴と判断され、鞍の特徴も矛盾しない。18 は鞍であり、座金具が半球状・円形を呈し、鉄地金銅張である。刺金の有無や脚の形態は分からない。

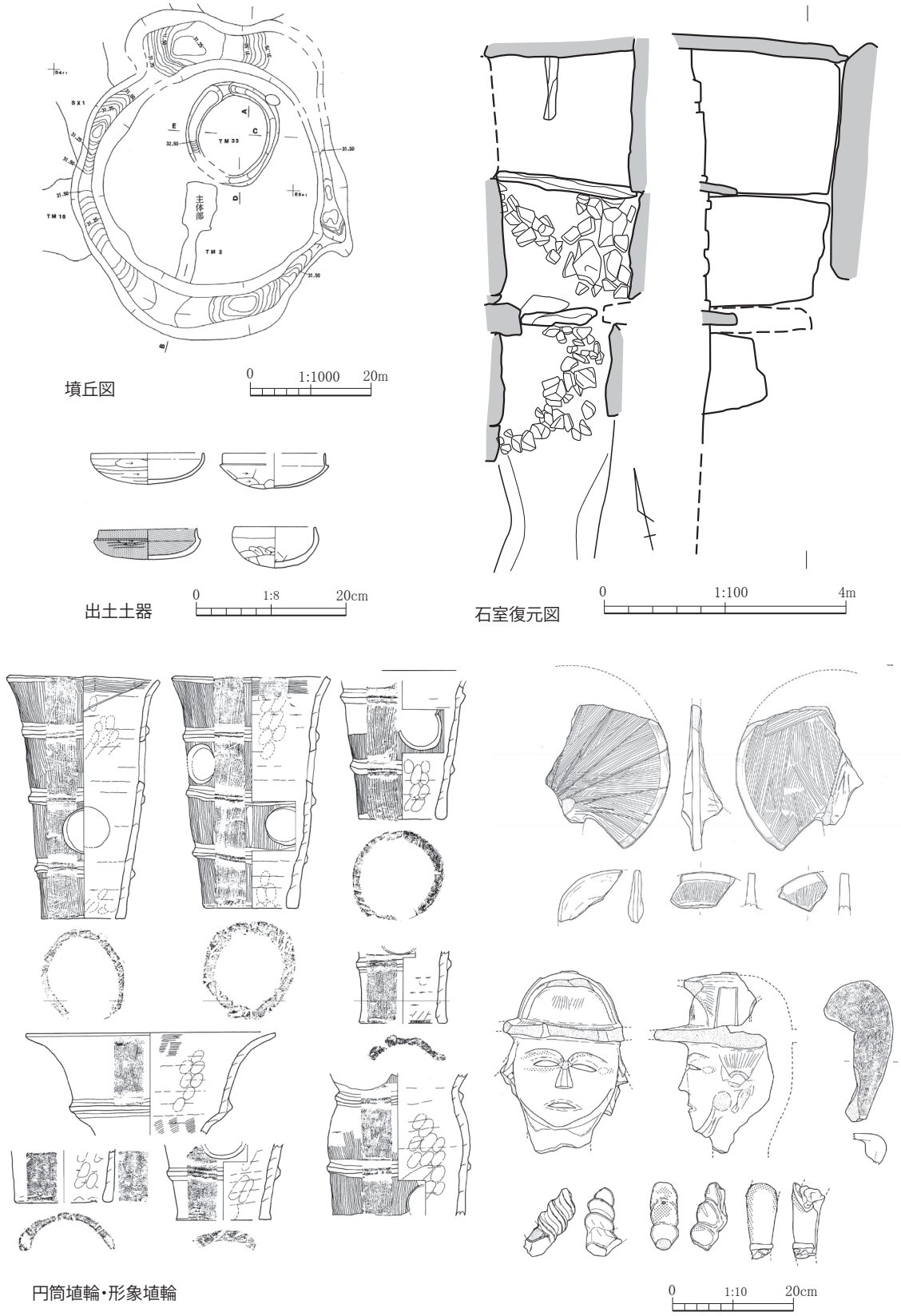
⑵ 中台 21 号墳（第５・６図）

墳丘と埋葬施設　中台21 号墳は、直径15 mの円墳である。埋葬施設は筑波変成岩割石小口積み横穴式石室で、単室構造である。埴輪は円筒埴輪と形象埴輪が少数出土しているが、混入の可能性もある。

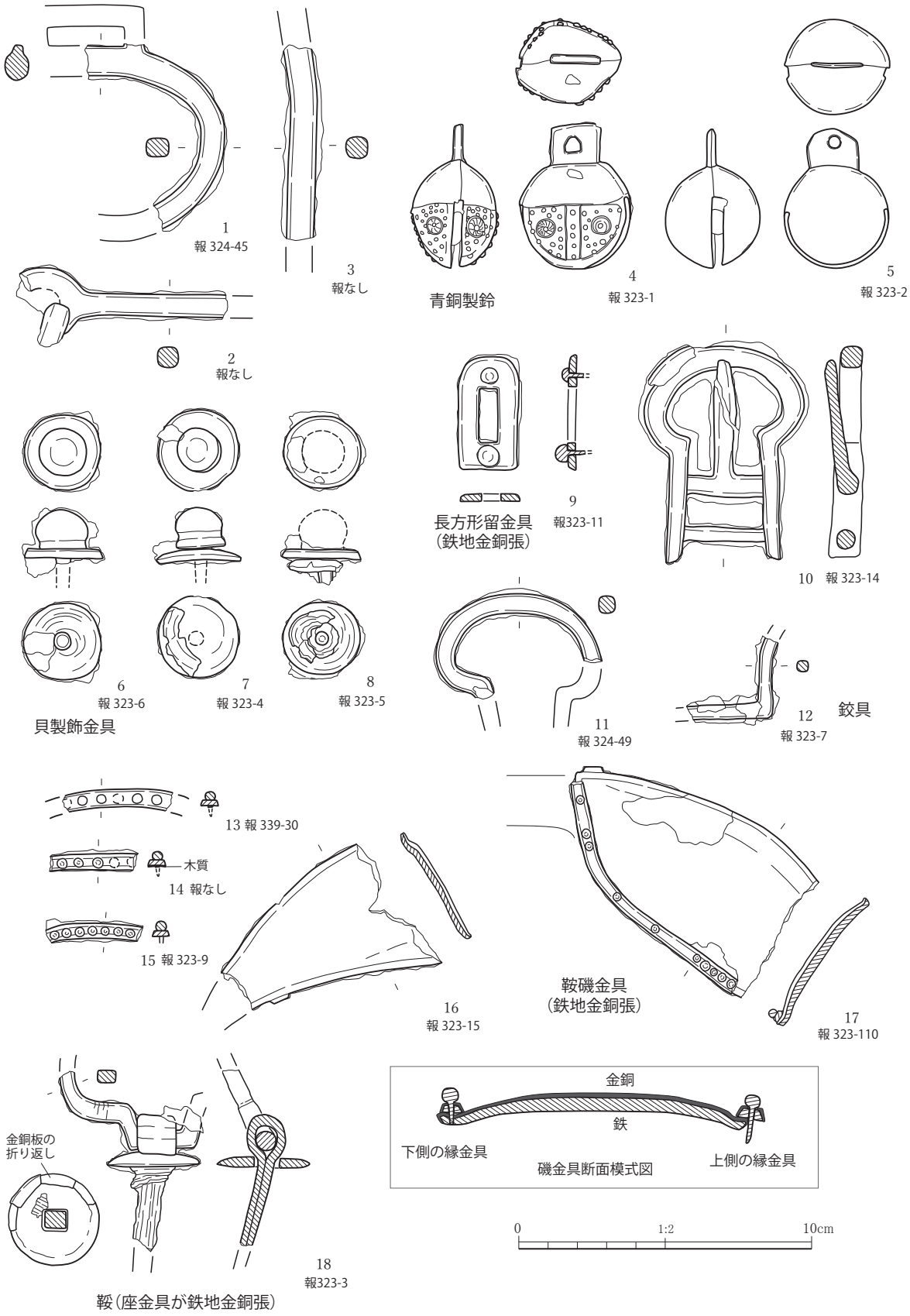
副葬品とその評価　副葬品としては馬具、圭頭大刀、鉄刀、鉄鏃、刀子、銅釧、耳環、玉類がある。馬具の構成としては、環状鏡板付轡、鉸具、三環鈴（銅鈴に再加工）である。

1・2 は環状鏡板付轡で、二連銜で、引手銜共連法で接続する。鏡板は環状であるが、銹化と保存処理の影響で立聞が伴うかどうかが分からない。ここでは、大形矩形立聞が伴う可能性を考慮して図示した。3 ～ 5 は鉸具で、3 は轡に銹着していたものである。3・4 には刺金が伴う。

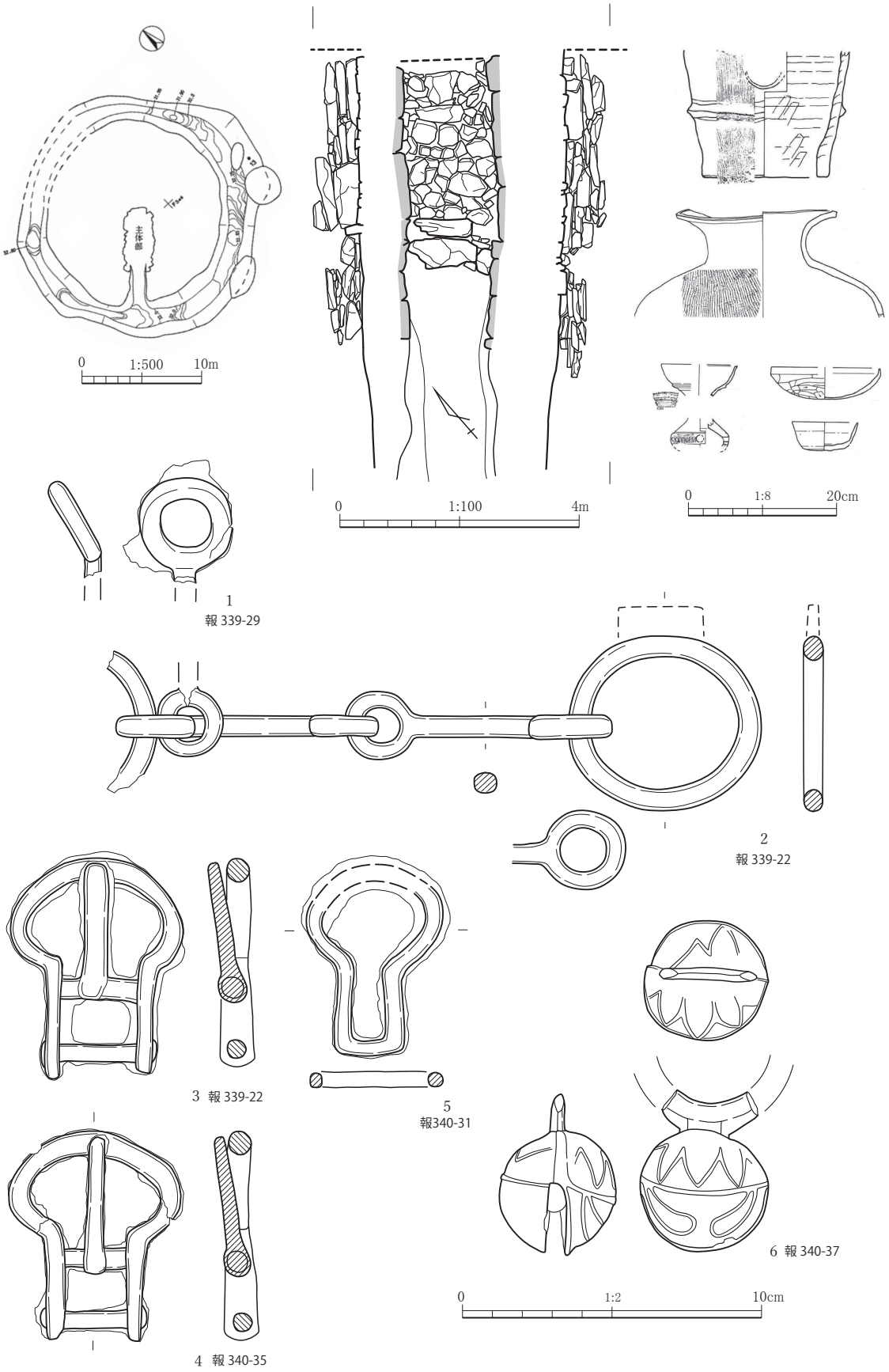
6 は三環鈴である。鋳造品で両端に合わせ目が残る。紐の部分に孔がなく環状にまわるため三環鈴と判断さ



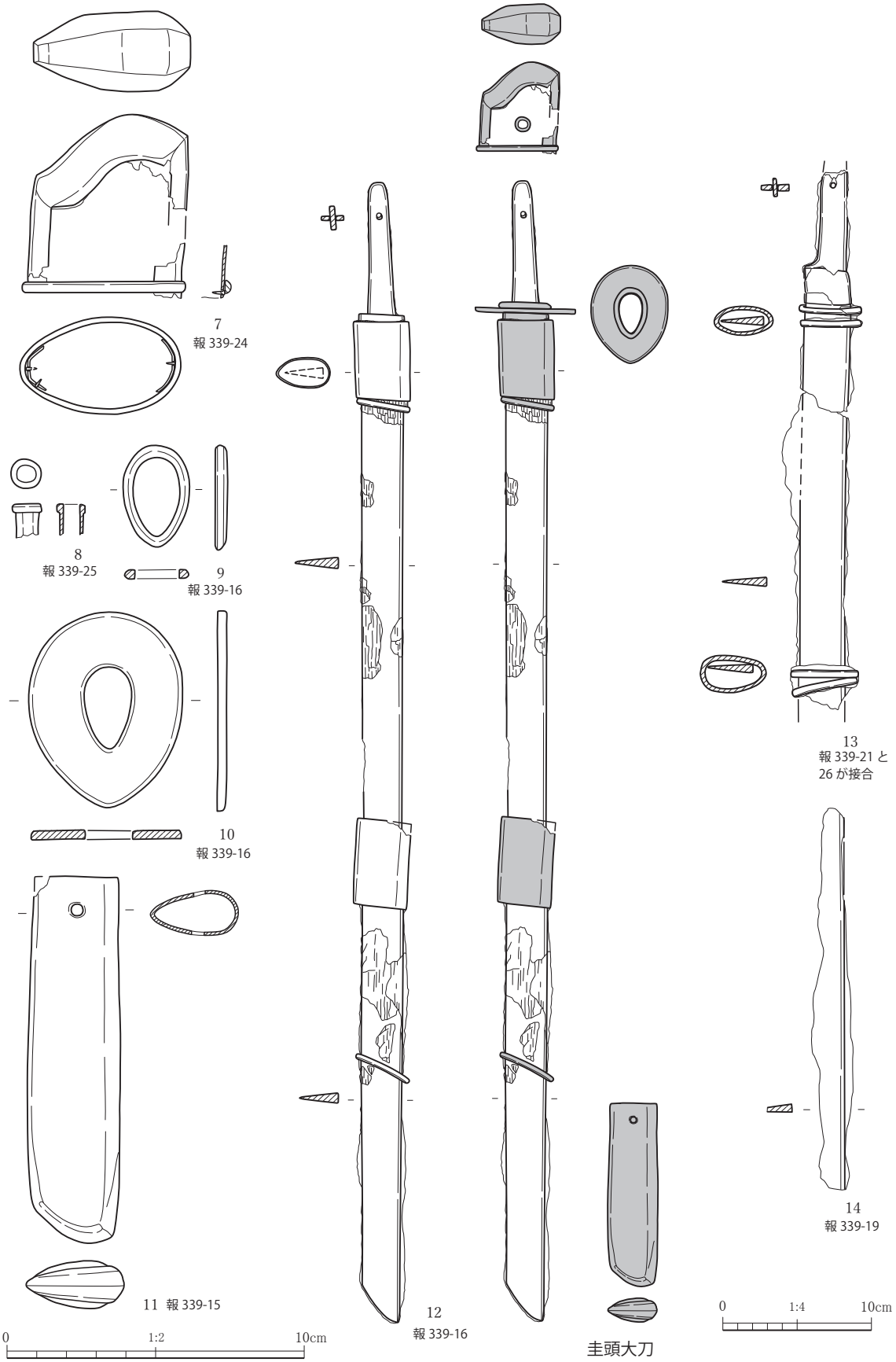
第 3 図　中台 2 号墳と主要遺物（1）



第 4 図　中台 2 号墳と主要遺物（2）



第 5 図　中台 21 号墳と主要遺物（1）



第 6 図　中台 21 号墳と主要遺物（2）

れる。ただし破断面は加工されており、銅鈴として再加工されている。内部には鉄丸が伴うことを確認した。大伽耶地域の人面文鈴との関係性が想定され、舶載品である可能性が指摘されている（内山 2021）。なお、報告書で図示されている鞍の縁金具破片は、整理番号から 2 号墳の遺物を混同している可能性が高い。

7 ～ 12 は圭頭大刀である。柄頭は覆輪式で、責金具を用いて覆輪を留める。ただし、覆輪は責金具の内側で銅製の小型鋲によっても固定されている。覆輪は金銅製である。鳩目金具は短脚である。鐔は無窓鐔で、鉄地金銅張である。刀身について、茎部には目釘が 1 か所確認できる。関部に金銅製の鏇を伴うため詳細な観察ができないが、両関である可能性が高い。切先はカマス切先である。鞘の構造としては、鞘口・鞘尻金具のほか、鞘間金具を用いるので、瀧瀬芳之による準素鞘となる（瀧瀬 1984）。足金具などの佩用金具は用いない。全体の拵えは、無窓鐔と丸尾の鞘尻金具を着装し、佩用金具を用いないもので、瀧瀬芳之によるⅡ式（瀧瀬 1986）、菊地芳朗による圭頭大刀 C1 類にあたる（菊地 2003）。13・14 は大刀で、残存する破片から同一の大刀である可能性が高い。

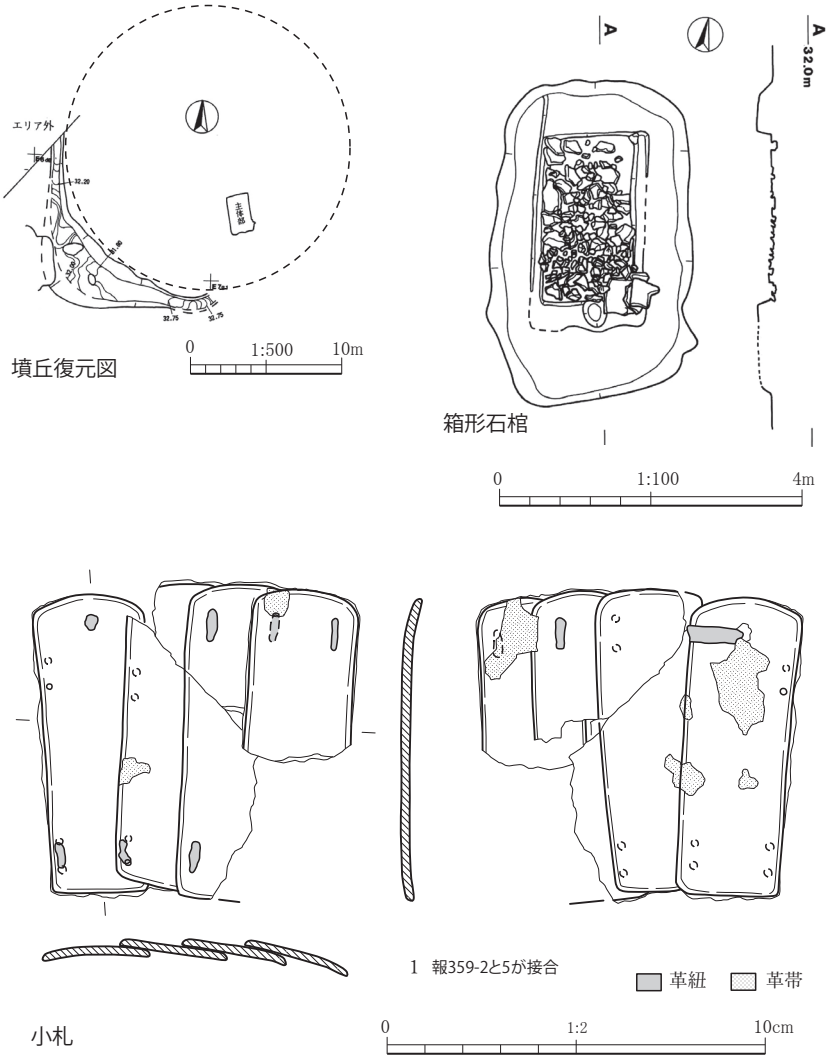
(3) 中台 66 号墳（第７図）

墳丘と埋葬施設　66 号墳は周溝の一部のみが確認されているが、直径 16 ｍの円墳と推定される。埋葬施設は箱形石棺で、床石のみが残存するが、筑波変成岩板石を組んだ通有の箱形石棺の可能性が高い。埴輪は伴わない。

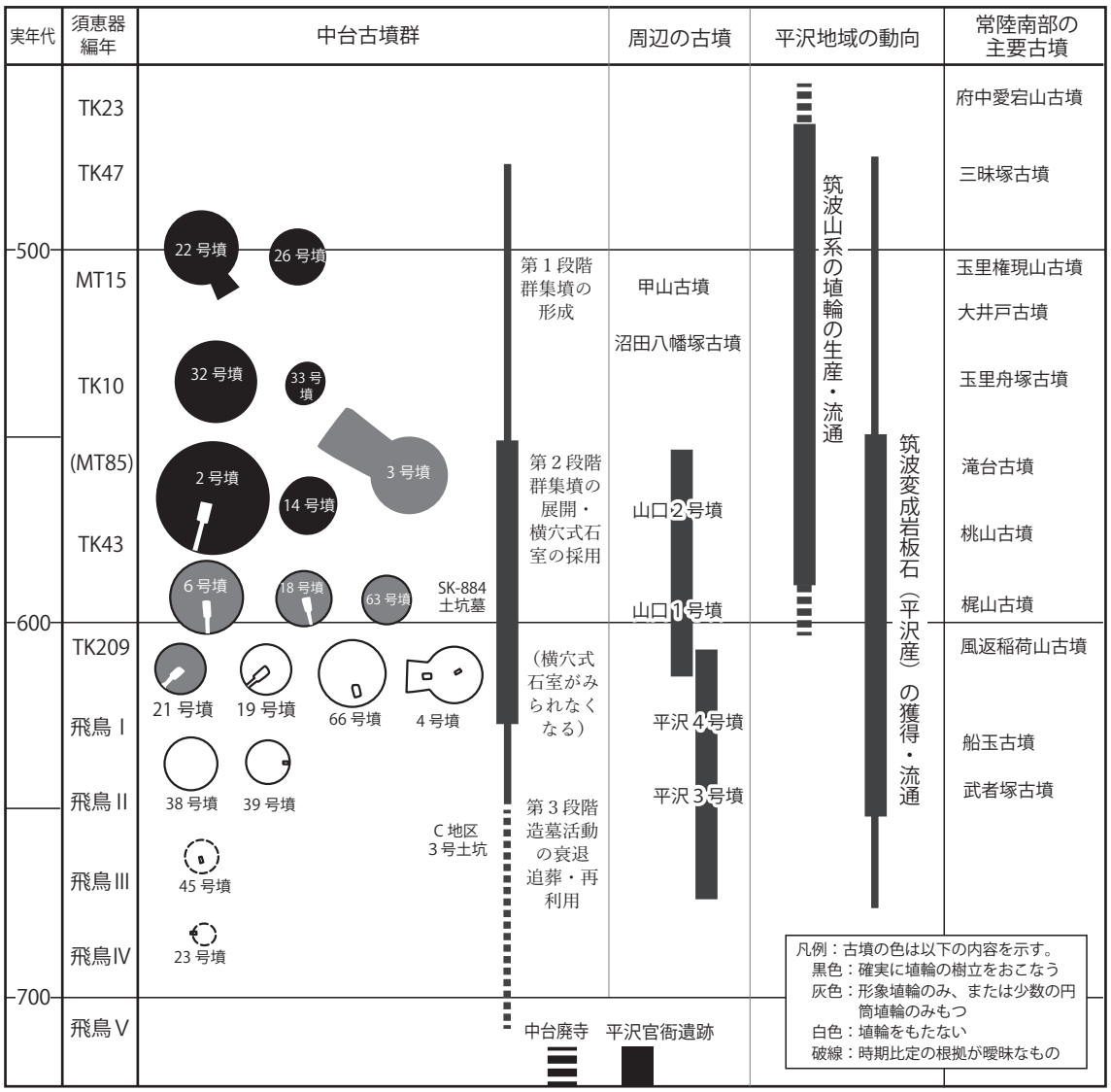
副葬品とその評価　副葬品としては小札、鉄釘があり、ほかに須恵器甕が出土している。鉄釘は銹化が著しく再実測が不可能であった。小札の全体形状がわかる資料は 1 点のみである。1 は鉄製小札で、全体は 4 枚で構成されている。小札の頭部形は偏円頭形を呈する。覆輪孔・下搦孔はない。裏面は布で全面が覆われていたと想定される。これらの特徴から、本体を構成するものではなく、付属具であると推測される。構成枚数や法量などから手甲などの可能性があるが（内山 1992）、籠手札は確認されていない。ただし、出土した枚数からしても、付属具のみが副葬されていた蓋然性が高い。

(4) 中台古墳群の変遷

上記の副葬品の編年的検討に加えて、埴輪の有無、埋葬施設の構造、切り合い関係から中台古墳群の変遷を整理したい（第 8 図）。埴輪の変遷については、川西編年Ⅴ期の円筒埴輪は細分化と編年が困難であるが、突帯の断面形状と突帯高が変化の方向性となる（塩谷 1997、筑波大学甲山古墳研究グループ



第 7 図　中台 66 号墳と主要遺物



第 8 図　中台古墳群の変遷

2020）。

前期の方形周溝墓群を除けば、中期末葉から後期初頭以降に群集墳が形成される（黒澤 2009）。第 1 段階は 5 世紀末葉から 6 世紀中葉で、群集墳が形成される段階である。22 号墳や 26 号墳を端緒として、6 世紀中葉まで連続的に造墓活動がなされる。この段階では確認面で埋葬施設が確認できないため、墳丘内部に構築された箱形石棺や木棺直葬などが推定される。

第 2 段階は 6 世紀後葉から 7 世紀前葉で、群集墳の展開と横穴式石室の採用に特徴づけられる。この段階で最も造墓活動が顕著になり、2 号墳で横穴式石室を採用したのち、連続的に横穴式石室が構築される。同時期に、墳丘をもたない箱形石棺や、土坑墓が構築されていることにも留意したい。

第 3 段階は 7 世紀中葉から 7 世紀後葉で、造墓活動の衰退と追葬・再利用の時期である。最終段階には横穴式石室の構築がみられなくなり、墳裾に構築する箱形石棺となる。7 世紀後半には、3 号墳などで追葬・再利用がなされるほか、土坑墓と判断される遺構も確認されている（C 地区 3 号土坑）。

3．中台古墳群の社会的位置付け

(1) 中台古墳群の馬具をめぐって

中台 2 号墳出土馬具の位置付け　2 号墳出土の虎頭鈴は、奈良県飛鳥寺塔心礎、島根県岡田山 1 号墳、長野

県小丸山古墳などから出土しているものである。近隣では、桜川市犬田神社遺跡 23 号住居跡出土の珠文鈴が類例として挙げられる（第 9 図）。桃崎祐輔は、岡田山 1 号墳や飛鳥寺から出土する虎頭鈴を、心葉形十字文鏡板付轡との関係もふまえて、推古天皇の名代部である額田部と関係させて論じている（桃崎 2019）。

一方、方形透かしをもつ長方形留金具と貝製飾金具の組み合わせは、茨城県内では笠谷 6 号墳（勝田市史編さん委員会 1979）が類例として挙げられる。イモ貝装馬具は東日本の太平洋沿岸と九州に多く分布する（稲田 2019 など）。宮代栄一によれば、貝製雲珠とセットとなる轡は大形矩形立聞ないし鉸具造立聞を伴う環状鏡板付轡であり（宮代 1989）、中台 2 号墳でも大形矩形立聞環状鏡板付轡である。そのため、虎頭鈴と心葉形十字文鏡板付轡のセット関係（桃崎 2019）は必ずしも当てはまらない。

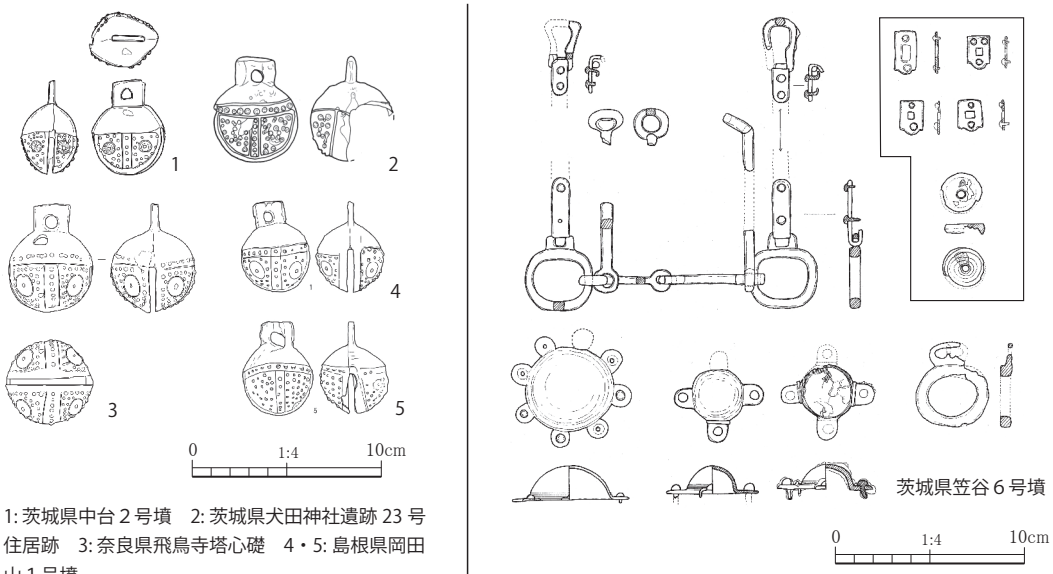
中台 21 号墳出土馬具の位置付け　21 号墳出土の環鈴は、文様が伽耶地域の人面文鈴に類似すること、鈴が環部に食い込まず有脚形であること、丸が鉄丸であることなどから、舶載品の可能性が指摘されている（内山 2021）。中台遺跡 B 区 4B 号住居跡から移動式カマド（置きカマド）が確認されていることからも、渡来系遺物の流入があった可能性がある（小林 2020）。ただし、21 号墳の馬装には金銅製鞍金具などは伴わず、轡も環状鏡板付轡であり、馬装としては 2 号墳のものよりも劣る。

中台古墳群における馬具の集中　片平雅俊は茨城県域の馬具について、群集墳中に複数の馬具保有古墳がある場合と 1 基のみ認められる場合があることを指摘する（片平 2017）。前者には金銅装飾大刀などの副葬品が伴うとし、中台古墳群もこれに該当する。

常陸南部地域における馬具の分布傾向をみると、筑波山・加波山西麓に列状に分布し、鈴付の馬具（鈴杏葉、銅鈴）が集中する傾向にある（片平 2022）。中台古墳群はこの分布の南端に位置し、さらに桜川を下ると土浦入りから古霞ヶ浦の水上交通に接続する。筑波山・加波山西麓における馬具の分布からは、のちの筑波郡衙（平沢官衙遺跡）から新治郡衙へ至る地方間連絡路の可能性も想定される。中台古墳群は、古霞ヶ浦（土浦入り）と桜川を介した水上交通と、馬を利用した陸上交通の結節点としての機能を果たした可能性がある。

(2) 横穴式石室からみた平沢地域と土浦入り

平沢地域では横穴式石室が複雑に展開する（例えば石橋 2001）。そこで、中台古墳群と隣接する平沢古墳群や山口古墳群を中心に、平沢地域の横穴式石室を整理した（第 10 図）。

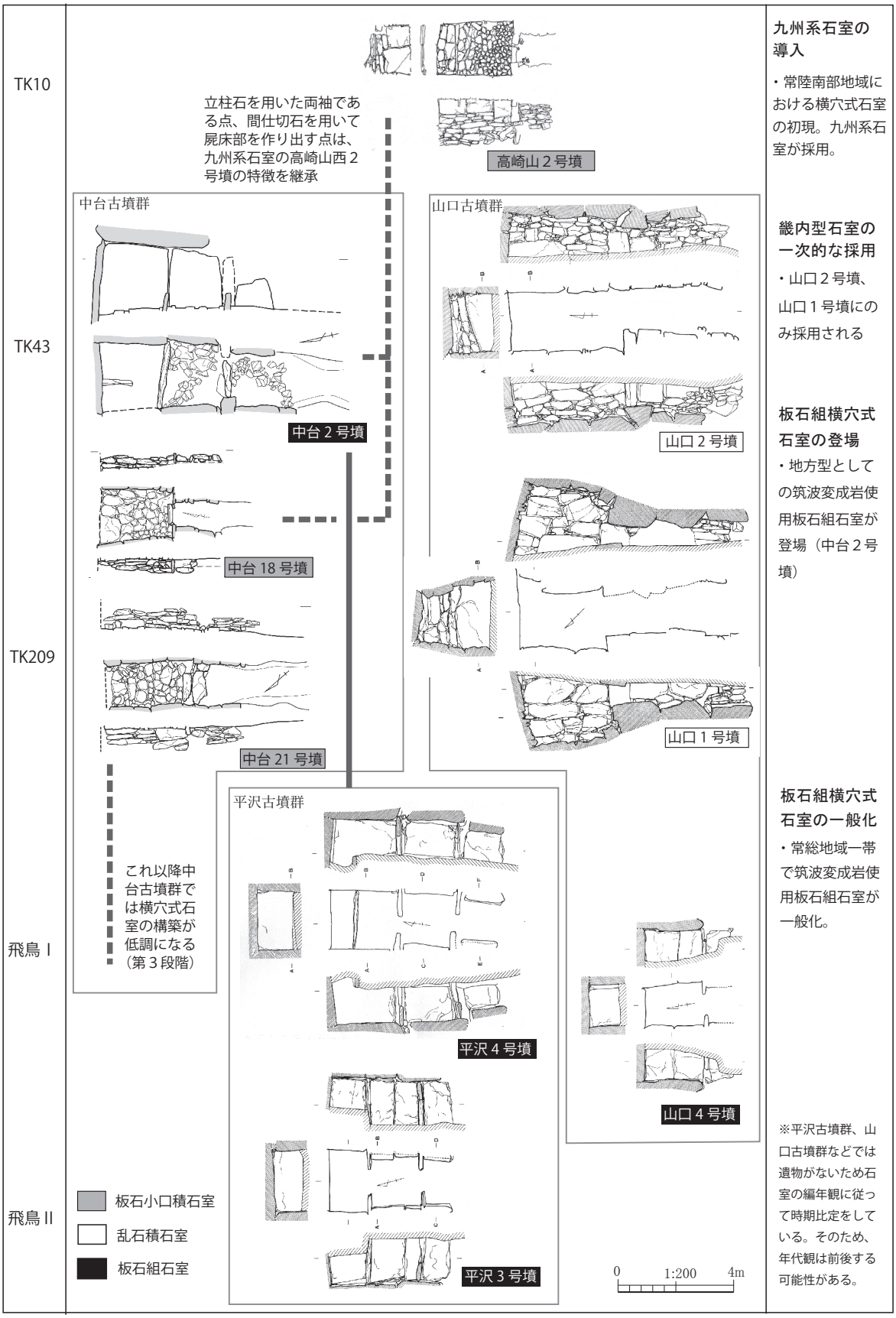


1: 茨城県中台 2 号墳　2: 茨城県犬田神社遺跡 23 号住居跡　3: 奈良県飛鳥寺塔心礎　4・5: 島根県岡田山 1 号墳

虎頭鈴・珠文鈴の諸例

方形孔を伴う長方形留金具と貝製飾金具の例

第 9 図　中台 2 号墳の馬具の比較例



第 10 図　平沢地域を中心とした横穴式石室の展開

６世紀前葉～中葉（TK10 型式併行期） 常陸南部地域で最も早く横穴式石室を導入する段階である。土浦市高崎山 2 号墳は板石小口積横穴式石室で、立柱石や板石閉塞の存在、空間構造などから九州系石室と評価される（小林 2014）。高崎山 2 号墳の石室の特徴である小型の立柱石や両袖の空間構造、間仕切石をもって屍床部を作り出すといった要素は、中台古墳群（2 号墳・18 号墳など）に継承されると想定される。

６世紀後半～７世紀初頭（MT85 ～ TK209 型式併行期） 畿内系石室の一時的な導入と、板石組石室が展開する時期である。畿内系石室は山口 1・2 号墳でのみ確認され、点的に導入されている。山口 2 号墳は片袖、1 号墳は両袖で、前壁や袖部を明瞭に作り出すことから東日本の中でも比較的忠実な畿内系石室として評価される（太田 2016）。一方、山口 2 号墳とおおむね同時期かやや後出して、中台古墳群で板石組石室が登場する（中台 2 号墳）。筑波変成岩を用いた板石組石室は、6 世紀後葉以降常総地域で一般化し、地方型として定着する。

７世紀前葉～中葉（飛鳥Ⅰ～飛鳥Ⅱ併行期） 常総地域において板石組石室が定着する段階であり、各地に横穴式石室や石棺系石室が構築される。平沢地域では、平沢古墳群を中心に板石組石室が展開する。中台古墳群では造墓活動が低調になっており、山口古墳群も同様の可能性が高い。

このように平沢地域とその周辺域では、関東でも早い段階での横穴式石室（九州系石室）の導入や、忠実な畿内系石室の存在から、横穴式石室に関する最新の情報や技術を逐次導入していることがうかがえる。その上で、一部に九州系石室の要素を取り込んで、地方型としての板石組石室を生み出していると言える。もちろん既に指摘されているように、板石組石室の展開の背景には箱形石棺の継続的な構築があり、石棺構築のノウハウや伝統が影響していることは疑いないが、平沢地域に多様な石室の情報がもたらされていた点を強調したい。

おわりに

中台古墳群の遺物の再検討を中心に、平沢地域の常総地域内での位置付けを検討してきた。最後にここまでの内容を以下の 5 点にまとめたい。

①中台古墳群は、「筑波山系の埴輪」の生産・流通や、埋葬施設に使用する平沢産筑波変成岩の産出と流通に関わった人々の墓域である可能性がある。②造墓活動が最も活発化した 6 世紀後半から 7 世紀前葉には、馬具や装飾付大刀の副葬がみられる（中台 2 号墳・6 号墳・21 号墳・66 号墳）。この時期は、常総地域全体で筑波変成岩板石の需要が最も高まった時期と重なる。③虎頭鈴や人面文に類似する環鈴、圭頭大刀の存在から、それらの財を入手可能な立場にあった被葬者が想定される。④中台古墳群は古霞ヶ浦（土浦入り）と桜川を介した水上交通と、馬を利用した陸上交通の結節点としての機能を果たした可能性があり、これは石材流通システムと無関係ではない。⑤横穴式石室の検討から、平沢地域とその周辺域は横穴式石室に関する最新の情報や技術を逐次導入していることがうかがえる。

副葬品や石室の検討からは、平沢地域が常総地域の中でも特殊な立場にあり、外的なモノや情報を入手している状況がうかがえた。これらの平沢地域の集団を、高浜入りの最上位首長の下に編成されているとみるか、ある程度自律的な動きをしているとみるかは今後の検討によるが、石材流通や交通の拠点になる地域集団が、外的なモノや情報を絶えず入手している状況を評価する必要がある。

参考文献

浅野孝利　2022「石棺・石室石材からみた古墳時代常総地域の流通」『筑波大学　先史学・考古学研究』第 33 号　筑波大学　33-59 頁

諫早直人　2015「飛鳥寺塔心礎出土馬具」『奈良文化財研究所紀要』2015　奈良文化財研究所　46-49 頁

石橋　充　2001「筑波山南東麓における 6・7 世紀の古墳埋葬施設について」『筑波大学　先史学・考古学研究』第 12 号　筑波大学　57-73 頁

石橋　充　2004「「筑波山系の埴輪」について」『埴輪研究会誌』第 8 号　埴輪研究会　1-16 頁

稲田健一　2019『装飾古墳と海の交流　虎塚古墳・十五郎穴横穴墓群』　新泉社

内山敏行　1992「挂甲と付属具について」『観音塚古墳調査報告書』　高崎市教育委員会　130-135 頁

内山敏行　2021「古墳時代中期の北関東地域―出入口・交通経路・鈴付馬具―」『古墳文化基礎論集』 古墳文化基礎論集刊行会　31-42 頁
太田宏明　2016『横穴式石室と古墳時代社会　遺構分析の方法と実践』 雄山閣
大谷晃二　2022「金銀装大刀からみた金鈴塚古墳の被葬者像」上野祥史編『金鈴塚古墳と古墳時代社会の終焉』六一書房　81-120 頁
片平雅俊　2017「茨城県域における馬具出土古墳の様相」『馬具副葬古墳の諸問題』東北・関東前方後円墳研究会　47-60 頁
片平雅俊　2022「茨城県域の古墳時代馬具の様相・覚書―茨城県域における古墳時代馬具の研究（10）―」『茨城県考古学協会誌』第 34 号　茨城県考古学協会　79-94 頁
勝田市史編さん委員会　1979『勝田市史』別編Ⅱ　考古資料編
菊地芳朗　2003「装飾付大刀からみた古墳時代後期の東北・関東」『後期古墳の諸段階』東北・関東前方後円墳研究会　19-28 頁
黒澤彰哉　2009「常総地域における群集墳の一考察（その 2）―つくば市中台古墳群の分析から―」『常総台地』16　鴨志田篤二氏考古学業 45 周年記念論集　常総台地研究会　164-171 頁
小林孝秀　2014『横穴式石室と東国社会の原像』 雄山閣
小林孝秀　2020「つくば市西栗山遺跡出土の多孔式甑　渡来系資料の評価をめぐる視点」駒澤大学考古学研究室編『生産の考古学Ⅲ　酒井清治先生古稀記念』 六一書房　109-120 頁
榊　雅彦・石川武志　2004『犬田神社前遺跡１』 財団法人茨城県教育財団
佐々木憲一・小野寺洋介編　2018『霞ヶ浦の前方後円墳　古墳文化における中央と周縁』 六一書房
塩谷　修　1997「霞ヶ浦沿岸の埴輪―5･6 世紀の埴輪生産と埴輪祭祀」『霞ヶ浦の首長―古墳にみる水辺の権力者たち―』霞ヶ浦町郷土資料館　66-75 頁
清水和明　1993「挂甲　製作技法の変遷からみた挂甲の生産」『甲冑出土古墳にみる武器・武具の変遷』埋蔵文化財研究会第 33 回研究集会実行委員会　13-27 頁
田中　裕　2022「古代の鈴と鈴飾りの歴史的意義」上野祥史編『金鈴塚古墳と古墳時代社会の終焉』 六一書房　67-80 頁
滝沢　誠　2015『古墳時代の軍事組織と政治構造』 同成社
瀧瀬芳之　1984「円頭・圭頭・方頭大刀について」『日本古代文化研究』創刊号　PHALANX 古墳文化研究会　5-40 頁
瀧瀬芳之　1986「円頭大刀・圭頭大刀の編年と佩用者の性格」『考古学ジャーナル』266　ニュー・サイエンス社　9-15 頁
寺内のり子　1982『平沢・山口古墳群調査報告』 筑波大学考古学研究会
筑波大学甲山古墳研究グループ　2020「つくば市甲山古墳の研究　考察編」『筑波大学　先史学・考古学研究』第 31 号　筑波大学　77-108 頁
冨田　樹　2022「古墳時代後・終末期における筑波変成岩の流通様態」『考古学集刊』第 18 号　明治大学文学部考古学研究室　65-86 頁
松本岩雄ほか　1987『出雲岡田山古墳』 島根県教育委員会
宮代栄一　1989「いわゆる貝製雲珠について」『駿台史學』第 76 号　駿台史学会　145-173 頁
宮代栄一　1996「古墳時代の金属装鞍の研究―鉄地金銅装鞍を中心に―」『日本考古学』第 3 号　53-82 頁
桃崎祐輔　2019「額田部の馬具と鈴―心葉形十字文透鏡板付轡と虎頭鈴・多角形鈴をめぐって―」『国家形成期の首長権と地域社会構造』 島根県古代文化センター　363-414 頁
吉川明宏・新井聡・黒澤秀雄　1995『（仮称）北条住宅団地建設工事地内埋蔵文化財調査報告書　中台遺跡』 財団法人茨城県教育財団

挿図出典

第 1・8 図　筆者作成。
第 2 図　吉川ほか 1995 より引用。
第 3 ～第 7 図　金属器実測図は筆者実測、作成（つくば市教育委員会所蔵）。墳丘・埴輪・土器は吉川ほか 1995 をも

とに作成。石室図は吉川ほか 1995 をもとに再トレース、筆者作成。

第 9 図　諫早 2015、榊・石川 2004、松本 1987、勝田市史編さん委員会 1979 をもとに作成。

第 10 図　中台古墳群は吉川ほか 1995 を再トレース、他は寺内 1982 をもとに作成。

Ⅵ．埋葬施設からみた古墳時代後・終末期の常総地域

冨田　　樹

はじめに

古墳時代後･終末期の常総地域には、竪穴系埋葬施設を主たる埋葬施設として、墳丘裾や前方部といった「変則的」な位置に設ける古墳が特徴的に存在する。こうした古墳の位置付けを確認し、歴史的意義を明らかにすることで、古墳時代後・終末期の常総地域の特質を捉えたい。

1．研究史と筆者の研究視角

(1)「変則的古墳」に関する研究史

常総地域の後・終末期古墳の埋葬施設の位置が「変則的」であることを、市毛勲（1963）は「変則的古墳」として把握した。市毛は、「変則的古墳」の要件を、「①内部施設が墳丘裾部に位置すること、②内部施設は通常扁平な板石を用いた箱式石棺であること、③合葬（追葬）を普通とすること、④群集墳を形成していること、⑤東関東中央部に分布すること」（p.22）の 5 つであるとした。なお、市毛（1973）は、「変則的古墳」には横穴式石室墳を含めないと主張していることを強調しておきたい。

杉山晋作（1974）は、「変則的古墳」を規制の結果としての産物であると考えた。杉山は、平面企画法の分析から、埋葬施設の位置が後円部にあるものに比べて墳丘裾部やくびれ部にあるものが従属的であるとした。また、後円部径の規制の中で墳丘をより大きく見せる方策が「変則的古墳」であるとし、中央による古墳築造の規制の結果として登場したものと考えた。

安藤鴻基（1981）は、「変則的古墳」が常総地域に特有のものであるとし、「常総型古墳」の名称を提唱した。また、埋葬施設と墳丘との時間的・空間的位置関係や埋葬方法などについて指摘し、墳丘裾部での埋葬を横穴式石室と同じ思想によって行われたためと考えた。

岩崎卓也（1992）は、後藤守一（1958,p.4）が日本の古墳の定義として墳丘の高い位置に埋葬することをあげたことに着目し、埋葬施設が旧地表下に存在する地下埋葬の小型前方後円墳を「前方後円形小墳」として捉え、栃木県域を含めた東関東の地域性を示すことを指摘した。さらに、地下埋葬が大首長墓には見られないことから、在地小首長層を前方後円墳に媒介される擬制的関係に編入するという、在地小首長層を組織化して共同体支配を温存するための政策に関連するものとした。

黒澤彰哉（1993、2005、2012）は、墳丘中心に埋葬施設をもたない古墳を、「特異埋葬施設古墳」（1993）、「特異性古墳」（2005、2012）として把握する。そして、その築造背景として、中央による埋葬施設位置の規制を想定した。

なお、「変則的古墳」は、茂木雅博（1966）が早くに指摘したように、古墳時代後期後半や終末期に盛行し、それ以前は墳頂に埋葬施設を設けている。ただし、美浦村沢田 1 号墳のように、墳丘裾部に埋葬施設を持つ古墳が古墳時代中期には出現していることには注意が必要である。このことは、墳丘裾部を含めた地下埋葬の起源が古墳時代中期以前に遡ることを示しており、川西宏幸（2011）が指摘するように、弥生時代の墓制からの伝統を引き継ぐものである可能性もありうる。

(2) 常総地域の後・終末期古墳の階層性について

石橋充（1995）は、上位の階層は一貫して下位の階層とは異なった埋葬施設を採用することを指摘している。上位の階層は一貫して墳頂部・地上部に埋葬施設を構築し、下位の階層は地下に埋葬することを示した。また、横穴式石室は 6 世紀中葉の導入以降、上位の階層にのみ採用されると考えた。

黒澤彰哉（2012）は、大型前方後円墳では箱形石棺を覆う石槨[1]や横穴式石室を採用し、小型前方後円墳ではくびれ部や前方部に竪穴系埋葬施設を採用するとした。埋葬施設の構造とその構築位置に階層性が表現され

るという観点は重要であるといえる。

(3) 問題の所在と筆者の研究視角

以上のように、常総地域を特徴づける「変則的古墳」は、階層的に高位ではないことが認識されている。一方、「変則的古墳」の提唱者である市毛勲が「変則的古墳」に横穴式石室墳を含めなかったことから、横穴式石室墳との関連性についての言及は目立たない。そうした中で、石橋充や黒澤彰哉による埋葬施設の位置の違いに着目した論考は、横穴式石室墳を含めた総合的な分析の必要性を示している。また、安藤鴻基により指摘された、墳丘裾部での埋葬が横穴式石室墳の埋葬と同様の思想によるものという視点は、横穴式石室墳と「変則的古墳」に密接な関係があることを示唆する。

そこで、筆者は、「変則的古墳」と横穴式石室墳の関係性を明確にすることを課題として設定した。そのため、筑波変成岩を用いる埋葬施設である箱形石棺と横穴式石室の相互関係を明らかにした（冨田 2021）。また、「変則的古墳」という概念を用いずに、埋葬施設の種類と位置に基づいた分類を行った（冨田 2022a）。

上記の課題に加え、埋葬施設選択の意義に着目した（冨田 2022b）。そして、石材流通の様相を把握することで、埋葬施設の違いの背景を考察した（冨田 2022c）。

2. 常総地域の埋葬施設からみた階層構造とその背景

本節では、筆者の研究成果にもとづき、常総地域の埋葬施設の様相について概観したい。

(1) 箱形石棺と横穴式石室の関係性（冨田 2021、図 1）

はじめに、筑波変成岩を使用する箱形石棺と横穴式石室の関係性について確認したい。箱形石棺は 5 世紀代からみられ、7 世紀まで存在する。横穴式石室は、6 世紀後半に定着し、7 世紀にかけて作られる。箱形石棺については、6 世紀後半になると法量が増加する。横穴式石室の定着と軌を一にしており、横穴式石室が箱形石棺に影響を与えたといえる。一方、常総地域の横穴式石室の形態に着目すると、他地域に明確な祖形を認めることは困難である。特に、壁体に板石を立てて用いることは、箱形石棺と同じ用石法であるといえ、箱形石棺からの影響を認めうる。また、7 世紀中葉以降にみられる、箱形石棺の床面に不定形の板石や割石を敷く造作は、横穴式石室と共通する。石棺系石室は、まさに箱形石棺と横穴式石室の折衷形態であると評価され（箕輪 1996）[2]、箱形石棺と横穴式石室に密接な関係性が存在していたことを示している。

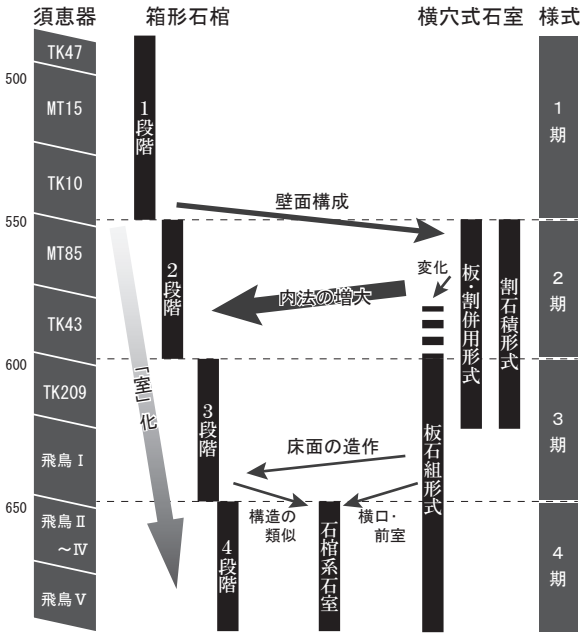


図 1　埋葬施設の変遷と影響関係（冨田 2021）

(2) 墳形と埋葬施設の種類と位置による古墳の階層構造（冨田 2022a、図 2）

異なる埋葬施設間での分析を行うために、墳形と埋葬施設の種類と位置によって、古墳を分類する。以下ではこの分類を用いる。その上で、分類した古墳類型ごとに、墳丘長や副葬品の多寡を比較する。その結果、墳頂に竪穴系埋葬施設を有するⅠ類や、横穴式石室を採用するⅣ類が上位となる階層性を認識できる。また、特に墳丘裾部に竪穴系埋葬施設を築くⅡ、Ⅲ類と、Ⅳ類の墳丘盛土との関係を確認すると、埋葬施設の開口部が墳丘のテラスになるという共通性が存在する。このことから、特に 6 世紀後葉以降になると、埋葬時の景観を共通させつつ、埋葬施設の種類や位置によって階層的差異を表示する階層構造が成立するといえる。

(3) 埋葬施設の採用原理（冨田 2022b、表 1）

常総地域の後・終末期古墳の埋葬施設の採用状況を確認する。基本的に、6 世紀後葉までは、埋葬施設採用

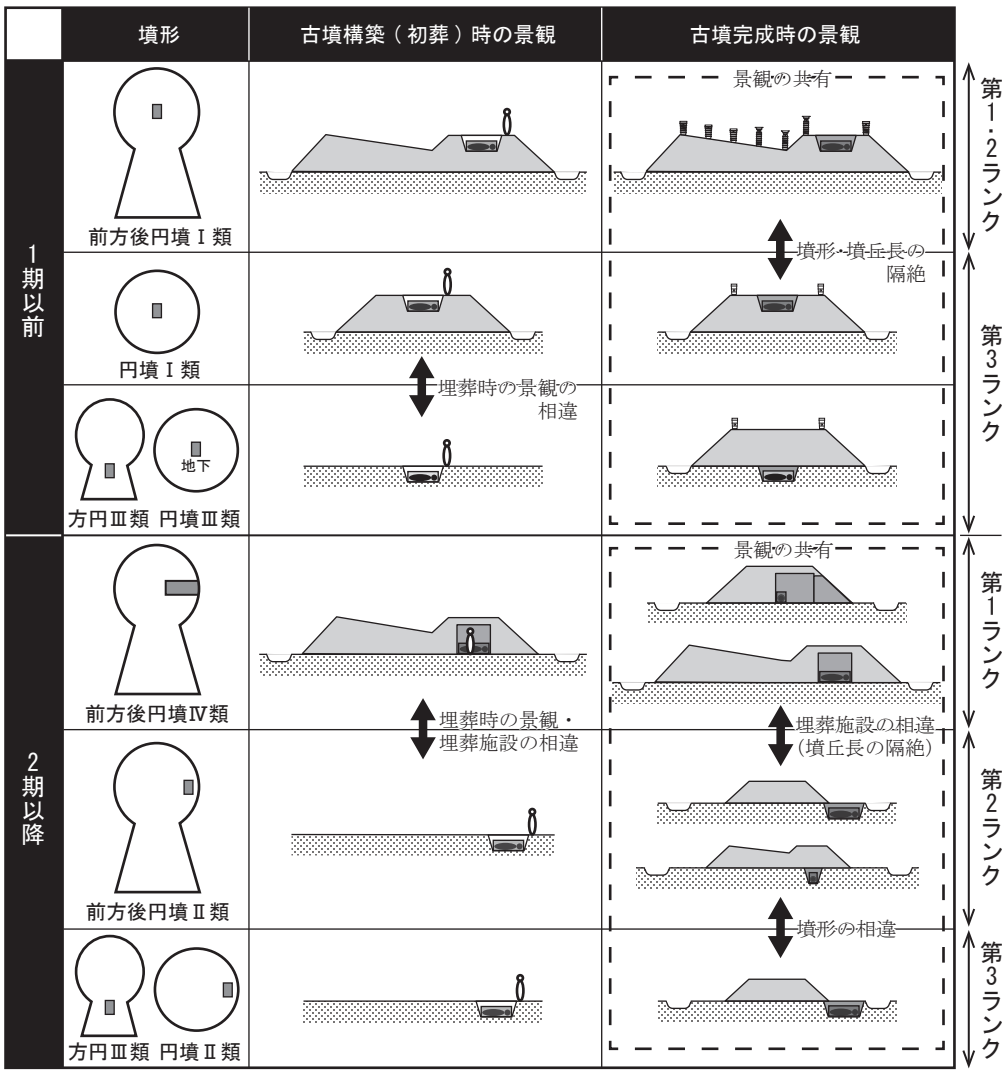


図 2　古墳の分類と景観、階層性（冨田 2022a）

に規則性を認めることはできず、特定の埋葬施設が上位層に限定的に採用されるといった状況はみられない。6 世紀後葉になると、Ⅱ、Ⅲ類の古墳が増加し、7 世紀前葉にかけて、最上位階層が板石組複室形式の横穴式石室を限定的に採用する。7 世紀後葉になると、最上位階層が板石組複室形式以外の横穴式石室を採用するようになり、地域性として認識できる可能性がある。

表 1　埋葬施設採用の変遷

		木棺		石棺	横穴式石室	埋葬施設採用の動向
		粘土槨	直葬			
中期	大型	○	○	○		大型古墳は**自由に埋葬施設を採用** 石枕副葬古墳には粘土を多用しない規範
	石枕		○			
1期	大型		○	○		大型古墳・小型古墳ともに **自由に埋葬施設を採用**
	小型	○	○	○●	●	
2期	大型		○	○●	●★	大型古墳の多くが**板石閉塞** 小型古墳では**墳裾埋葬が増加**
	小型		○	○●		
3期	大型				★	大型古墳は板石組複室形式を独占的に採用 小型古墳で墳裾埋葬が普遍化 **横穴式石室を志向する埋葬規範の定着**
	中型				●	
	小型		●	●		
4期	大型				●★	横穴式石室の階層的な排他性の低下 **横穴式石室を志向する埋葬規範の継続**
	小型			●	●	

白抜きがⅠ類、中黒がⅡ、Ⅲ類の古墳
星形は板石組複室形式

(4) 筑波変成岩の流通様態（冨田 2022c、図 3）

常総地域の石棺・石室の構築材として普遍的にみられる筑波変成岩の流通について、石材の大きさに着目して検討する。横穴式石室に使用される石材は、箱形石棺の使用石材よりも大きい。箱形石棺に使用される石材をより詳細にみると、6 世紀前葉までは墳丘長に応じて、6 世紀後葉以降は第 1 に産地からの距離に、第 2 に墳丘長に応じて石材のサイズが変化することがわかる。また、箱形石棺が増加する 6 世紀後葉以降、長軸が100cmを超えない石材の割合が増加する。このことから、石材の獲得・流通構造が 6 世紀後葉に整備されたといえる。また、石材の獲得は石材産地である筑波山周辺の集団が、石材の流通は古墳築造集団が古墳築造に際して行ったと考えることができる。さらに、石材産地周辺の集団は、最上位階層に限定される板石組複室形式をはじめとする横穴式石室の築造を、特権的に認められた状況がうかがえる。

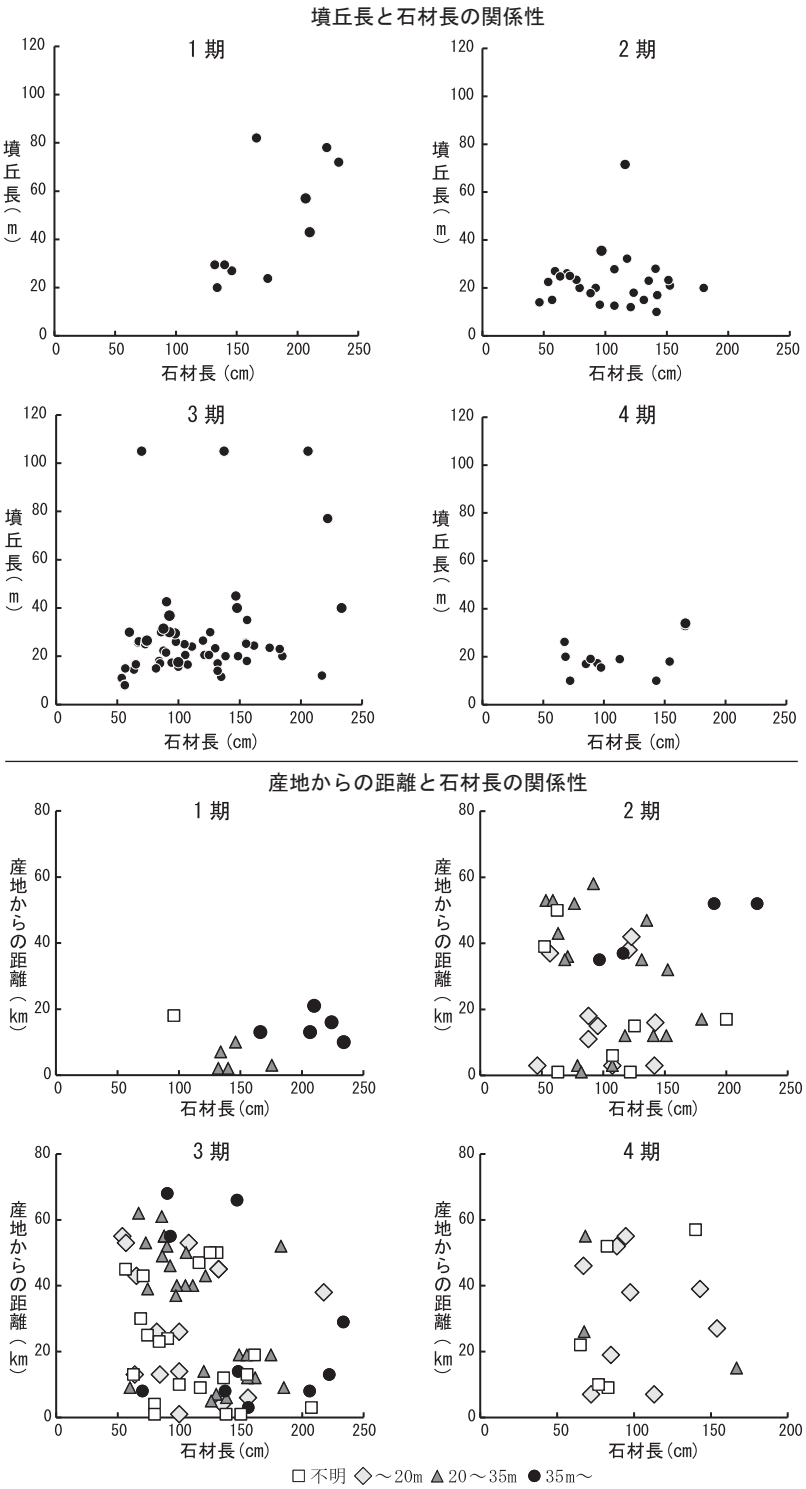


図 3　石材長と墳丘長、産地からの距離との関係（冨田 2022c を改変）

3. 常総地域の埋葬施設序とその成立背景

(1) 常総地域の埋葬施設秩序について

以上の成果から、埋葬施設の画期を認識し、埋葬施設秩序について考えたい。6 世紀後葉以降、①箱形石棺の内法の増大、②箱形石棺の横穴式石室化[3)]、③埋葬施設の種類と位置による階層構造の成立、④筑波変成岩の獲得・流通構造の整備、という変化を認めることができる。つまり、6 世紀後葉に、箱形石棺が横穴式石室の構造（①）と埋葬法（②）を志向し、古墳の景観がⅣ類と同様のものになる（③）。こうした動きに伴う石材需要の増加に対応するために、石材の獲得・流通構造が整備された（④）と認識できる。

(2) 6 世紀後葉という時期の重要性

6 世紀後葉は、関東において横穴式石室の導入が進む時期である（小林 2014）。関東全域で、横穴式石室が広い階層にみられるようになる。また、列島規模でみた場合も、列島各地に多様な地方形式が成立する時期と評価される（鈴木 2011）。重要なのは、「横穴式石室の形態と規模に被葬者の社会的位置が示され」（鈴木 2011,p.146）る時期と重なることである。

古墳時代後期には墓室への比重が高い古墳の秩序（和田 1992）が成立する。こうした秩序を「古墳時代後期型」（鈴木 2001）として把握したい。古墳時代後期型秩序は「全国的な基準をもつものではなく、あくまでも小地域においてのみ貫徹される」（鈴木 2001,p.393）ことに特質がある。古墳時代後期型秩序が貫徹されるようになる時期が 6 世紀後葉であるといえる。

このことを踏まえると、横穴系埋葬施設の葬送観念の展開は、地域秩序の表示機能という古墳の役割と結び付くことで生じたと捉えることが可能であり、そうした中に関東も位置付けることができる。その場合、常総地域の埋葬施設秩序は、横穴式石室の導入に関わる 1 つの地域性として捉えることが可能になる。

(3) 箱形石棺への拘泥の背景

ここまで、「変則的」な位置に埋葬施設をもつ古墳は、横穴式石室の導入の一形態である可能性が高いことを述べた。とはいえ、常総地域において横穴式石室そのものを築かず、箱形石棺に固執した理由について考える必要がある。ここでは、3 つの要因があると考え、それぞれの根拠についてみていきたい。

1 つ目は、伝統を強く保持する地域性が存在した、というものである。根拠としては、石棺系石室の存在に明らかなように、箱形石棺とほぼ同じサイズの石材で横穴式石室を作ることが可能であることがあげられる。つまり、箱形石棺の採用は、意図的なものであったといえる。

2 つ目は、板石を利用することの効率性を重視した、というものである。塊石を用いた横穴式石室を構築する場合、右島和夫（2003）が論じているように、直径 20m に満たない古墳でも多くの労働力が必要になる。一方、常総地域のⅡ、Ⅲ類の古墳では、必要な石材は箱形石棺に使用するもののみであり、少数の労働力での古墳築造が可能である。

3 つは、上位階層との差を強調するために箱形石棺が求められた、というものである。上位階層は基本的に板石を用いた横穴式石室を採用していることから、階層差を表現するために横穴式石室の採用に何らかの規制があり、下位階層には箱形石棺が採用された可能性が高い。なお、前稿（冨田 2022c）で論じたように、常総地域では最上位階層が石材獲得・流通を統括したと考えられるため、石材流通の段階で何らかの規制が働いたとみることも可能である。

以上の 3 つ要因が複合した結果、箱形石棺に拘る地域性が表出したと考える。

4. 常総地域の特質

(1) 流通が重要視される社会

ここまで論じてきたように、常総地域では 6 世紀後葉以降、埋葬施設秩序が成立する。この秩序は、常総地域全域を覆うものであり、「舟塚山古墳の体制」（田中広 1988、滝沢 1994、田中裕 2012、図 4）以来の古墳に表示される広域結合であると評価できよう。この埋葬施設秩序の範囲は、筑波変成岩の流通圏とほぼ一致（図 5）することから、石材流通を下地にしたものといえる。

また、筑波変成岩の産地は少なくとも三カ所想定でき、それぞれの流通圏が異なることが指摘されている（淺野 2022）。しかし、筑波山周辺に産出する変成岩を使用する埋葬施設は、産地の差に関わらず同一形態をとるため、産地の差は埋葬施設秩序に影響しない。このことは、それぞれが流通圏をもつ複数の地域結合体が連携していることの証左であると評価できる。

同様に、埋葬行為からみた社会規範は、石棺石材が異なっていても共通するという（荒井 2020）。とはいえ、埋葬行為の共通性がみられる圏域は、筑波変成岩の流通圏を大きく超えてはいないため、石材を含むモノを携えた人間の往来によって社会規範の共有が生じた可能性が高い。なお、埋葬行為が共通する古墳のうち、筑波

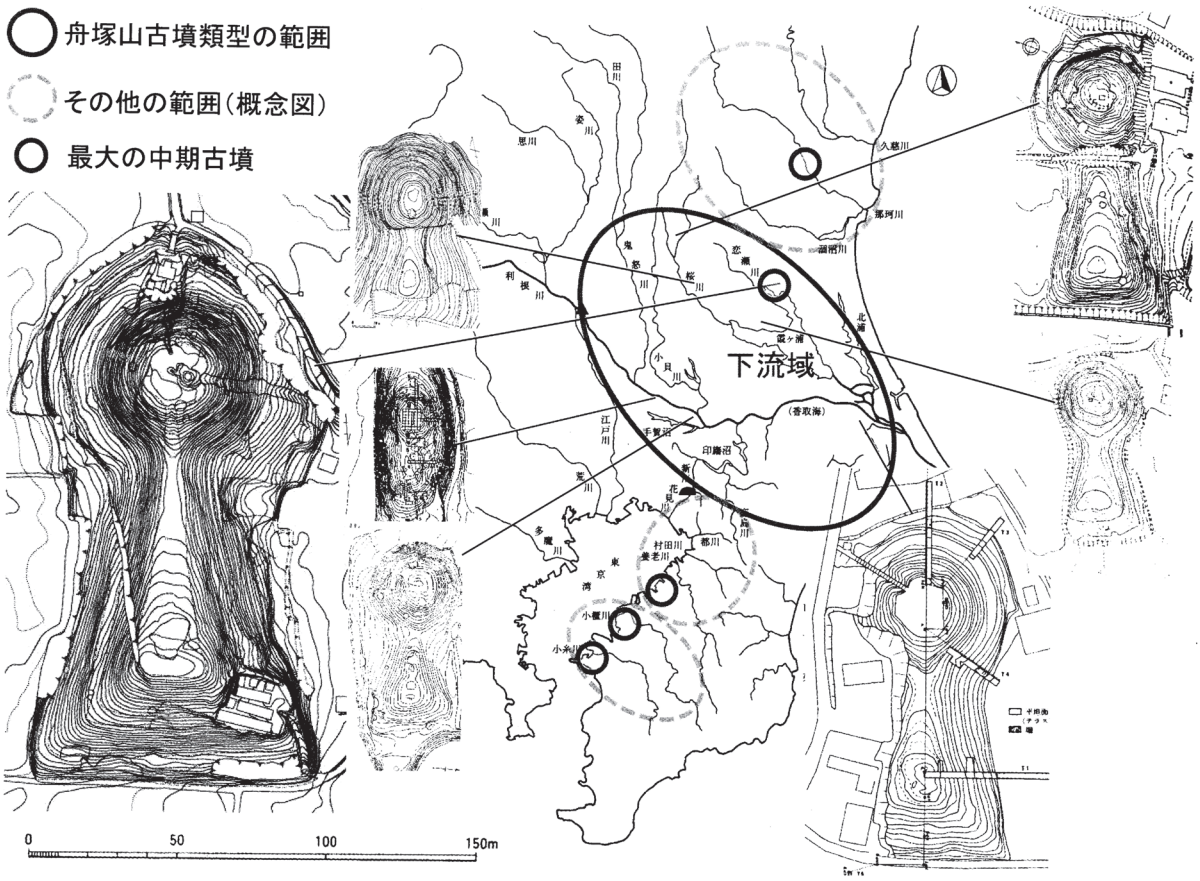


図 4 「舟塚山古墳の体制」（田中 2019）

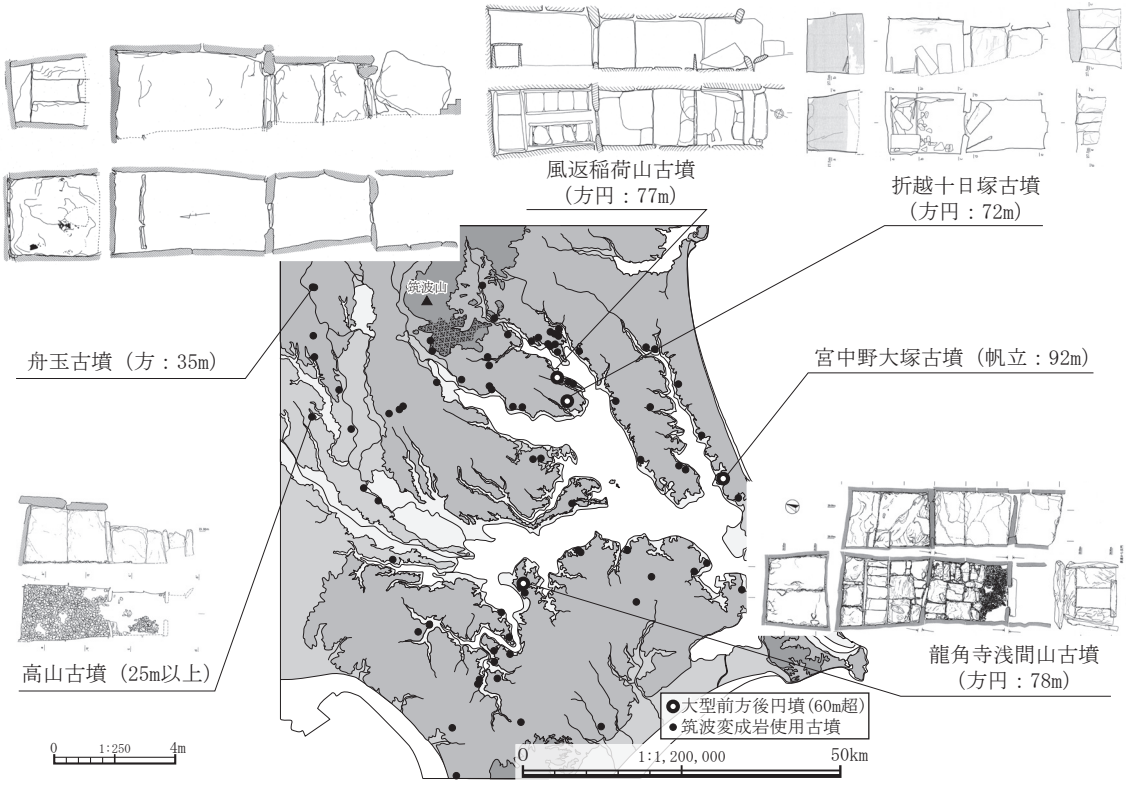


図 5　埋葬施設に表示される広域結合

変成岩以外の石材を用いている古墳の多くは、常総の内海とは異なる流域にあるか、筑波変成岩の産地から遠い常総の内海南岸に存在している。こうした産地から遠い地域が境界領域であるために、石材の安定流通圏を超えた規範がみられるという説明は、不可能ではない。

以上のことから、石材流通が埋葬施設秩序を規定する大きな要因になっている可能性が高い。常総地域は流通が重視される社会であったと、実証的に認識することができる。

(2) 常総地域の地域構造

埋葬施設秩序にみられる広域結合のなかには、日常的な人・モノの往来に基づくと思われる地域圏が複数存在している。先述した石材産地ごとの流通圏（淺野 2022）や、土師器の地域性（吹野 1998）などから、複数の地域結合体がみられることがわかる。こうした地域結合体が、国造や後の郡につながるような行政単位となる可能性がある。いずれにせよ、複数の地域圏による広域結合体が、埋葬施設秩序の内実であろう（図 6）。

最後に、埋葬施設秩序の成立過程について考えたい。全国的に横穴式石室が定着し展開する 6 世紀後葉に、常総地域においても横穴式石室採用の機運が高まり、筑波変成岩板石の需要が増加したことが予想できる。社会の構成員の大半が関与したと思われる中小古墳の埋葬施設に、重量物である筑波変成岩の板石を利用することになった（冨田 2022c）ため、常総の内海全域を巻き込んだ、古墳に表示される広域結合が必要となった可能性が高い[4)]。こうした広域結合を背景にして、埋葬時の規範を共通させる現象（荒井 2020）が起こったといえる。このように、埋葬時の規範までも含めた埋葬施設秩序が形成されており、常総地域の特質として発現したのではないだろうか。

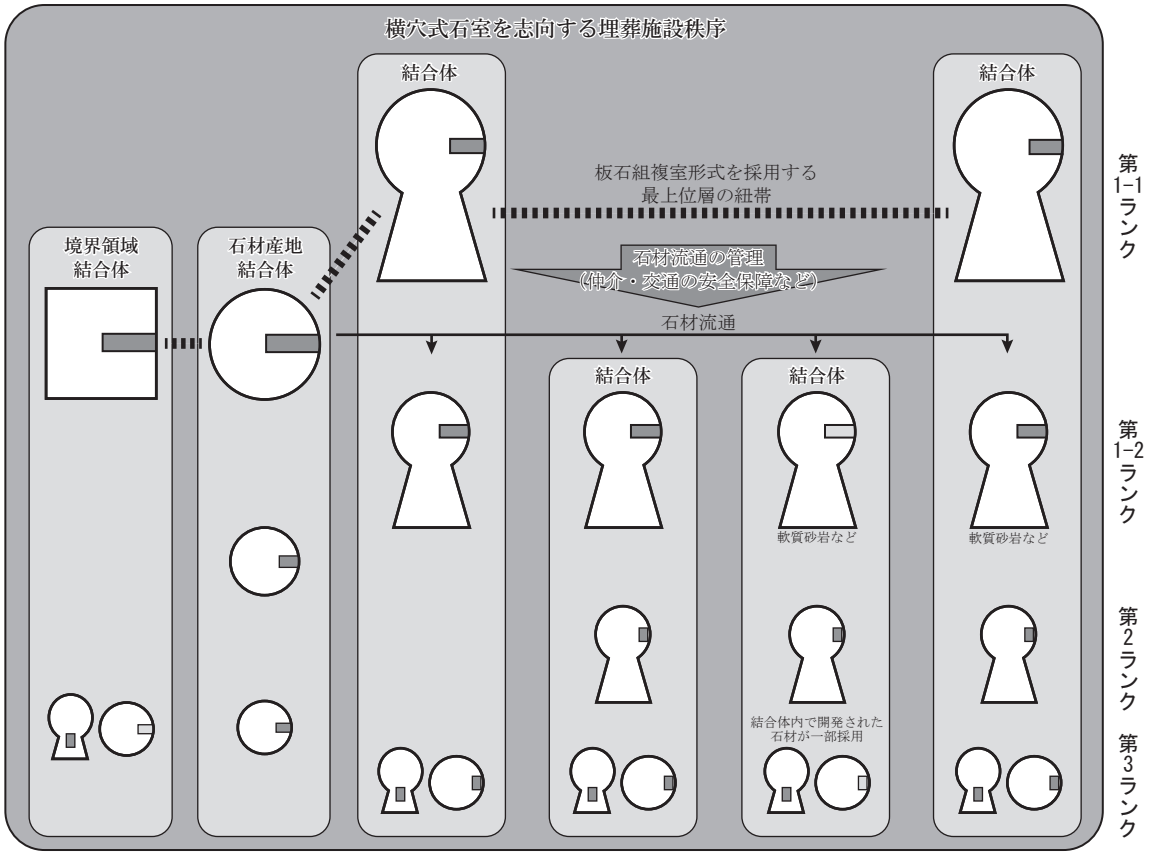


図 6　常総地域の埋葬施設秩序

おわりに

常総地域に特徴的に存在する「変則的」な位置に埋葬施設をもつ古墳について、その歴史的意義を確認した。流通の掌握が古墳秩序の形成に大きな役割を担っていたことを実証することができたと考える。今後は、他地域との交流関係を探ることが課題となるが、古墳時代における「地域」の役割を考察する上で、常総地域が古墳時代史の解明に寄与できるポテンシャルを有することを、強調しておきたい。

註

1）小美玉市玉里舟塚古墳にみられる構造である。黒澤は同市に所在する玉里権現山古墳や大井戸古墳についても、同様の構造を想定しているが、確実とはいえない。これらの古墳については、通常の箱形石棺ではないことを否定できないため、石槨という構造については新資料の増加を待つ必要がある。

2）なお、箕輪健一は「石棺式石室」の名称を使用している。

3）箱形石棺における追葬・二次葬の展開（荒井 2020）や、箱形石棺の埋葬時の景観が横穴式石室に類似する（冨田 2022a）ことを指す。

4）一部の階層のみが採用した埴輪や、日用品で小型である土器では、広域結合が表示されるとは考えにくい。

参考文献

浅野孝利　2022「石棺・石室石材からみた古墳時代常総地域の流通」『筑波大学 先史学・考古学研究』第 33 号　筑波大学　33-59 頁

荒井啓汰　2020「常総地域の箱式石棺からみた古墳時代後半期の埋葬行為」『考古学研究』第 67 巻第 3 号　考古学研究会　56-75 頁

安藤鴻基　1981「変則的古墳雑考」『小台遺跡発掘調査報告書』小台遺跡調査会　151-158 頁

石橋　充　1995「常総地域における片岩使用の埋葬施設について」『筑波大学 先史学・考古学研究』第 6 号　筑波大学　31-57 頁

市毛　勲　1963「東国における墳丘裾に内部施設を有する古墳について」『古代』第 41 号　早稲田大学考古学会　19-26 頁

市毛　勲　1973「『変則的古墳』覚書」『古代』第 56 号　早稲田大学考古学会　1-29 頁

岩﨑卓也　1992「関東地方東部の前方後円形小墳」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 44 集　国立歴史民俗博物館　53-77 頁

川西宏幸　2011「常陸の実相」川西宏幸（編）『東国の地域考古学』六一書房　3-30 頁

黒澤彰哉　1993「常総地域における群集墳の一考察―茨城県新治郡千代田町大塚古墳群の分析から―」『婆良岐考古』第 15 号　婆良岐考古同人会　95-158 頁

黒澤彰哉　2005「常総地域における古墳埋葬施設の特質」『婆良岐考古』第 27 号　婆良岐考古同人会　105-118 頁

黒澤彰哉　2012「茨城県における後期・終末期前方後円墳の地域性と階層性」『茨城県史研究』第 96 号　茨城県立歴史館　1-30 頁

後藤守一　1958「古墳の編年研究」『古墳とその時代（一）』古代史研究第 3 集　朝倉書店　1-220 頁

小林孝秀　2014『横穴式石室と東国社会の原像』雄山閣

鈴木一有　2001「東海地方における後期古墳の特質」三河古墳研究会（編）『東海の後期古墳を考える』東海考古学フォーラム三河大会実行委員会　383-407 頁

鈴木一有　2011「横穴式石室」一瀬和夫・福永伸哉・北條芳隆（編）『墳墓構造と葬送祭祀』古墳時代の考古学 3　同成社　138-148 頁

滝沢　誠　1994「筑波周辺の古墳時代首長系譜」『歴史人類』第 22 号　筑波大学 歴史学・人類学系　91-112 頁

田中広明　1988「霞ヶ浦の首長―茨城県出島半島をめぐる古墳時代の研究―」『婆良岐考古』第 10 号　婆良岐考古同人会　11-49 頁

田中　裕　2012「古墳時代中期における東関東の地域社会」『平成 23 年度 千葉県遺跡調査研究発表会要旨』千葉県教育

振興財団　7-14 頁
田中　裕　2019「古墳時代地域結合体の動態と『常陸国風土記』建評記事」『国家形成期の首長権と地域社会構造』島根県古代文化センター研究論集第 22 集　島根県古代文化センター　277-290 頁
冨田　樹　2021「筑波変成岩製埋葬施設の編年」『駿台史学』173 別冊　駿台史学会　13-25 頁
冨田　樹　2022a「常総地域の後・終末期古墳の階層構造」『考古学研究』68 巻第 4 号　考古学研究会　72-9 頁
冨田　樹　2022b「常総地域における後・終末期古墳の埋葬施設採用原理」『駿台史学』第 175 号　駿台史学会　63-88 頁
冨田　樹　2022c「古墳時代後・終末期における筑波変成岩の流通様態」『考古学集刊』第 18 号　明治大学文学部考古学研究室　65-86 頁
吹野富美夫　1998「常陸南部における古墳時代後期の土器様相」渡辺誠先生還暦記念論集刊行会（編）『列島の考古学―渡辺誠先生還暦記念論集―』渡辺誠先生還暦記念論集刊行会　245-254 頁
右島和夫　2003「横穴式古墳の構築過程を調査する―群馬県富岡市田篠遺跡 1 号墳―」右島和夫・土生田純之・曹永鉉・吉井秀夫『古墳構築の復元的研究』雄山閣　213-254 頁
箕輪健一　1996「終末期古墳と石棺式石室」『婆良岐考古』第 18 号　婆良岐考古同人会　69-82 頁
茂木雅博　1996「箱式石棺の編年に関する一試論―霞ヶ浦沿岸を中心として―」『上代文化』第 36 輯　國學院大學　33-46 頁
和田晴吾　1992「群集墳と終末期古墳」山中一郎・狩野久（編）『近畿Ⅰ』新版「古代の日本」 角川書店　325-350 頁

Ⅶ．埋葬施設からみた常総地域の地域構造
―流通・階層・儀礼行為―

荒井　啓汰・冨田　　樹・淺野　孝利

はじめに

古墳時代後・終末期の常総地域における埋葬施設には主に筑波変成岩の板石が使用され、その石材流通範囲を中心に地域圏が形成された。1 期（5 世紀後半～ 6 世紀後半）の段階では首長墓を中心に箱形石棺が採用される一方で、2 期（6 世紀後半）以降には、上位層に横穴式石室が、下位層に箱形石棺がそれぞれ採用される（冨田 2022a）。また、箱形石棺は横穴式石室の影響を強く受けることで、しだいに「室」的に変容していく（荒井 2020）。このように、1 期と 2 期以降では階層・流通の様相が大きく異なるため、ここでは 2 期以降（6 世紀後半～ 7 世紀）の状況について考察したい。

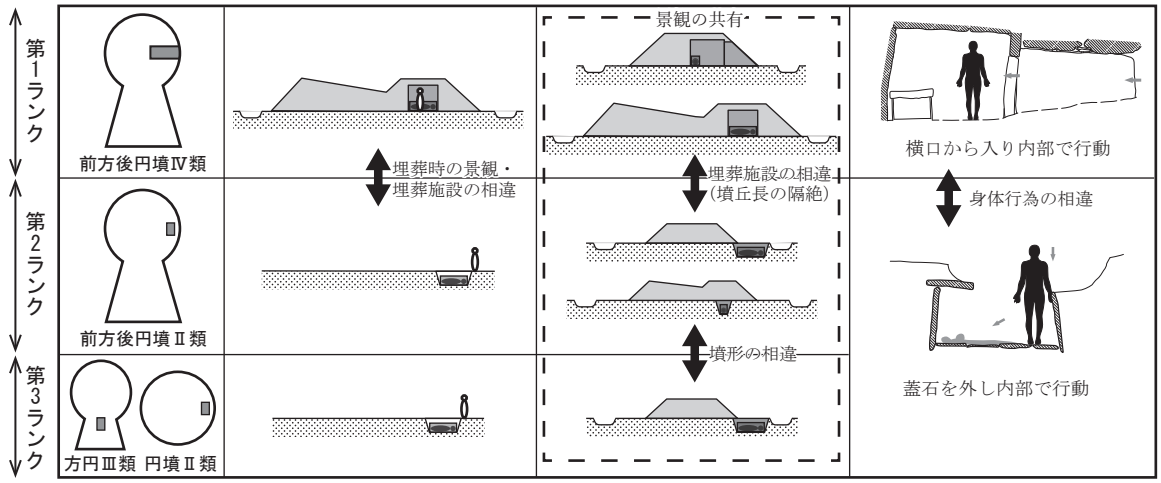
Ⅰ章で触れた通り、本書で意識したのは、異なる分析視点から同一の物質資料について複眼的に検討を加え、それらを統合することである。埋葬行為や儀礼、流通システム、階層構造といった埋葬施設をめぐる各側面が、地域社会の中でいかに結びついているのか、その記述に重きを置いて整理していきたい。

1．身体行為・儀礼的景観・階層性

埋葬行為と階層差　常総地域における埋葬施設の種類と墳丘における位置関係は、埋葬景観としての共通性を示しつつも、階層差となって表れていることが指摘された（冨田 2022a）。特に 6 世紀後半以降においては、箱形石棺が横穴式石室と同じような埋葬景観をとることで墳裾埋葬となるとし、いわゆる「変則的古墳」は階層的関係性の中に位置付けられる。常総地域の特徴が顕在化する 2 期（6 世紀後半）以降の状況としては、通有の横穴式石室をもつ前方後円墳Ⅳ類が最上位の第 1 ランクとなる。第 2 ランクには墳裾埋葬をおこなう前方後円墳Ⅱ類が該当し、第 3 ランクには墳裾埋葬の円墳Ⅱ類や、墳丘中央地下に埋葬施設をもつ円墳Ⅲ類などが該当する。古墳構築（初葬）時の景観では、横穴式石室をもつ第 1 ランクの古墳と、箱形石棺を採用する第 2・3 ランクの古墳では、埋葬時の景観や埋葬施設自体の相違として差別化されている。また古墳完成時の景観では、埋葬施設や墳形の相違によって階層差が表現されつつも、墳丘裾部に主たる埋葬場所があるという点において儀礼景観が共有されている（第 1 図）。

一方、埋葬時における身体行為としては、2 期以降箱形石棺は内部に入って追葬をおこなうようになり、棺の「室」化として理解される（荒井 2020）。棺の「室」化が、箱形石棺と横穴式石室の埋葬行為が相互に関係しあうことで進行するのであれば、両者に埋葬時における一定の共通性を見出せる。ただし、横穴式石室では埋葬時に横方向から入る一方で、箱形石棺では蓋石を開けた状態で上から埋葬をおこなう。そのため冨田による第 1 ランクの前方後円墳と、第 2 ランク以下の古墳では、実際の埋葬時においてどのように身体を動かすかという点において差別化されていると言える。まとめるならば、類似した儀礼的景観による共通性の中に異なる身体経験が埋め込まれることによって、差異としての階層性が表出している（第 1 図）。

埋葬儀礼の共有と変容　3 期以降、石棺的な形態を有する横穴式石室として「石棺系石室」（塩谷 1992）が登場する。石棺系石室は、埋葬施設の構造においても埋葬行為の面においても、箱形石棺と板石組横穴式石室の双方の影響を受けて成立している（箕輪 1996、荒井 2020 など）。例えば土浦市武者塚古墳では、前室の蓋石を開けて上から入る点は「室」的な箱形石棺の埋葬行為を踏襲しているが、玄門部から横方向に玄室に入る点は横穴式石室のそれである。このような埋葬行為の共有と折衷の背景には、箱形石棺の埋葬方法をとる人々と、横穴式石室の埋葬方法をとる人々の間で、ある程度の情報共有があったことがうかがえる（荒井 2020）。Ⅳ章では、箱形石棺の上面と石棺系石室の墓道が、閉塞のタイミングとして同様の場として機能していたことを指摘したが、箱形石棺と石棺系石室の密接な関係性がうかがえる。またこれは、横穴式石室と箱形石棺で墳丘に



第１図　儀礼行為の共有と差異化（2 期以降）

対する景観が同じであることからも追認される（冨田 2022a）。

先にみたように、2 期以降における横穴式石室と箱形石棺の差は基本的に階層差によるものであるから、石室と石棺の埋葬行為が相互に影響し合うことで石棺系石室が形成されるのであれば、そこには階層的上位と下位の交流が想定される。例えば箱形石棺を採用する下位層の人々が上位層の横穴式石室の埋葬に参加したのかもしれないし、あるいは箱形石棺の伝統をもつ人々が横穴式石室を採用することができるようになったのかもしれない。

２．石材流通と社会規範

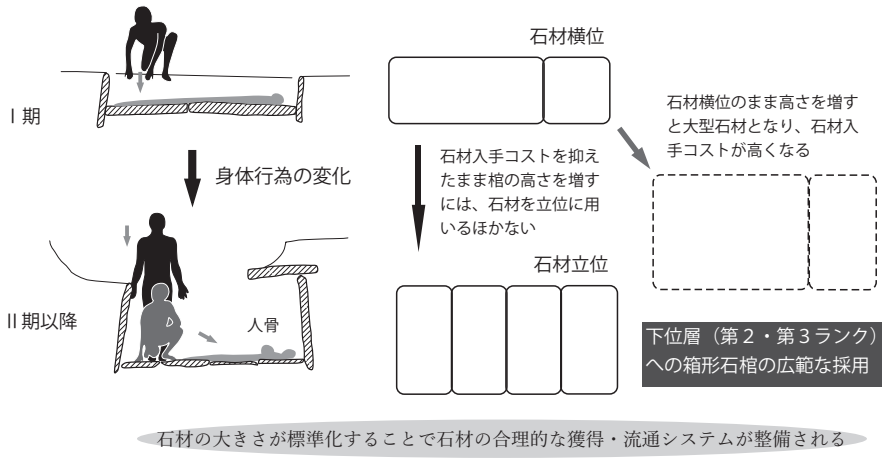
石材流通範囲と社会規範　常総地域の埋葬施設に採用される石材は筑波変成岩と総称される板石で、常総の内海を介した水上交通によって常総台地に広く流通している。埋葬施設に使用された筑波変成岩の観察からは、平沢･粟田･瓦谷の 3 つの石材産出地が想定され､それぞれの石材流通範囲が復元されている（淺野 2022）。また、その石材流通範囲をもとに、流通ルートの復元も可能である。

一方で、筑波変成岩主体の埋葬施設と砂岩切石主体の埋葬施設で、埋葬規範が共有される状況が看取される（荒井 2020）。以前の論文では埋葬施設の石材の差異を超えて人骨の配置状況が類似することから、埋葬をめぐる広域的な社会規範を強調したが、一方で砂岩切石主体地域においても少数ながら筑波変成岩が採用されている（千葉市椎名崎Ｂ１号墳、経僧塚古墳など）点を評価すべきである。すなわち、埋葬規範が共有される背景には、筑波変成岩の流通・獲得を介した関係性が想定される。

その上で、筑波変成岩の流通範囲は、巨視的には「常総型甕」や「筑波山系の埴輪」の分布範囲と重なること、埋葬規範が共有される箱形石棺の埋葬は下位層を中心としたものであることを考慮したい。このような状況から、厳密な社会規範が共有された範囲内に筑波変成岩が流通したというよりも、むしろ石材流通も含む日常的な接触を介して、社会規範がゆるやかに共有された可能性がある。つまり、内海を介した日常的な生活行動圏を基盤として、ゆるやかな埋葬規範の共有が行われていたことが想定される。これは後に指摘するように、各地の築造主体者が内海を介して独自に石材獲得を行っていたと思われることとも整合的である。

埋葬行為の変化と石材流通　2 期以降、箱形石棺の増加に伴い 100cm 未満の石材が多数を占めるようになる（冨田 2022c）。これは箱形石棺の構造と深く関係し、１期には比較的大型の石材を横位に用いて 2 枚程度で側壁を構築していたが、2 期以降にはある程度均質な石材を立位に 3 ～ 4 枚用いて構築することが多い（田中 1988、石橋 1995 など）。石材の大きさには石材流通の距離に基づく石材選択も関係しているが（後述）、巨視的には上記のような変化が指摘される。

一方で、上記の箱形石棺の構造的変化は、埋葬行為の変化に対応するものでもある（荒井 2020）。すなわち、1 期の石材を横位に用いる場合は石棺の高さが低く、埋葬行為は石棺上面から腕をのばす「棺」的な行動となる。反対に、2 期以降にみられるような石材を立位に用いる場合は石棺の高さが高く、行為者が棺内に入って埋葬をおこなう「室」的な行動となる。そのため埋葬行為の変化と箱形石棺の構造的変化、そして流通構造のあり方は、相互に密接に関係している。



第 2 図　身体行為の変化と石材流通システムの関係性

上述のように、2 期以降における下位層の行為者（古墳造営者）は、横穴式石室との埋葬景観の共有を志向することで、箱形石棺が「室」化していく。箱形石棺が行為として「室」的に変化する中で、石棺の高さが増大していったと想定される。ところで、高さが増大したまま石材を横位に用いると大型の石材を用意する必要があるが、その場合輸送コスト（労働量）が増加することになる（後述）。石材を小さく、輸送コストをおさえたまま石棺の高さを増大させるためには、石材を立位に複数枚用いる必要があり、これが箱形石棺の構造的変化と、100cm 未満の石材が多数を占めるようになる流通状況に反映されているものと推測される。つまり、箱形石棺の構造的変化は、a. 埋葬行為や埋葬時の景観をめぐる志向性と、b. 石材流通とそれにかかるコスト（労働量）をめぐる問題に規定されていると言える（第 2 図）。

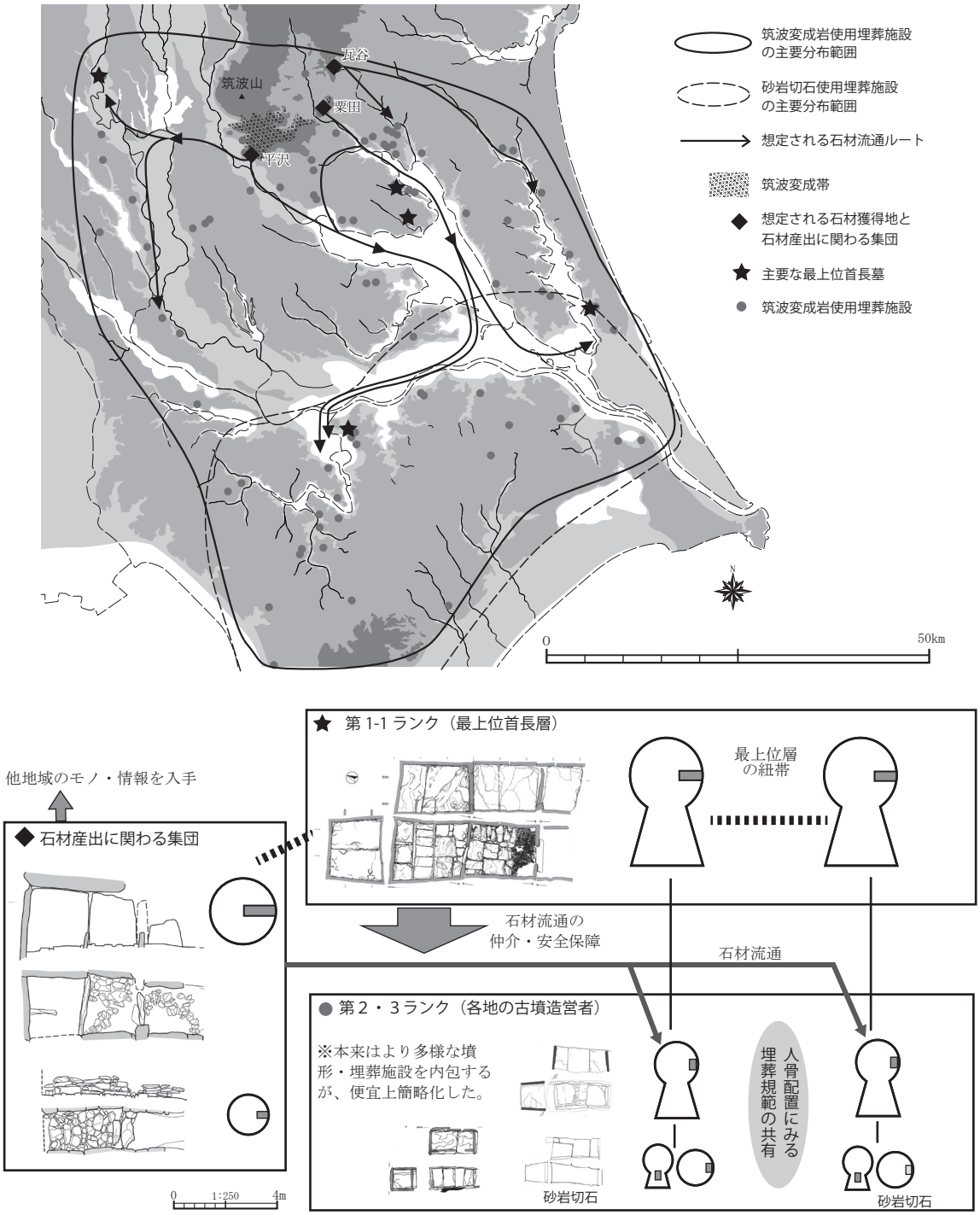
３．石材流通システムと階層構造

常総地域では、2 期以降の箱形石棺の需要の増加によって、石材の合理的な獲得・流通システムが整備される（冨田 2022c）。石材流通システムと階層構造の関係性を検討するうえでの焦点は、石材産出に関わる集団と、各地の古墳造営者、そして地域内最上位の首長との関係性である。これら多様なファクターの関係性を整理することで、石材流通システムを明らかにしうると考えるが、これについては冨田樹による流通構造の考察がある（冨田 2022c）。そこでここでは、問題点を「各地の古墳造営者」、「石材産出に関わる集団」、「地域内最上位首長」の 3 つの視点に絞り、冨田の論文をベースにしつつ、Ⅴ章の内容などを補うことで、6 世紀後半以降の石材流通システムについてまとめる。

各地の古墳造営者　埋葬施設に用いられる筑波変成岩の流通様態については、2 期以降の様相について、石材の大きさが 100cm 未満のものが多数を占めること、石材産出地からの距離に応じて石材サイズの選択があることなどが指摘されている（冨田 2022c）。その上で、石材の大きさの規定要因は、まず産地からの距離であり、次点で墳丘長（≒投入可能な労働力）であることから、各古墳の造営者が実際の石材運搬を担っていた可能性が高いことを推測している。

これは、淺野孝利による石材産地の推定とその流通範囲の検討とも整合的である（淺野 2022）。例えば、鬼怒川・小貝川水系と平沢地域の関係のように、石材産地が 1 か所に限定される場合がある一方で、平沢・粟田いずれからでも石材を獲得できる中間域においては双方の石材が認められる。流通の際に石材が集積されていた可能性はあるが、現状そのような遺構は見つかっておらず、また確実に集積を示す石材の共伴関係もみられない。

このようなことから、どこかに集積されて一元的に流通していたというよりも、古墳を作る際にそれぞれの



想定される石材流通ルートは淺野 2022、石材流通モデルは冨田 2022c をもとに、本書の内容を含めて作成。
なお、階層構造にはより複雑な状況が想定されるが（本書VI章）、ここでは便宜上簡略化して図示した。

第 3 図　筑波変成岩の流通と地域構造

古墳造営者が、石材獲得者（平沢・粟田・瓦谷）と直接的にやりとりしていた可能性が高いと言える。この結果は各古墳の造営者が実際の石材運搬を担っていたとする上記の結論と近い。すなわち、各地の古墳造営者が、比較的自由に内海を移動して、石材の獲得にあたっていた状況が推測され、彼らの行動範囲として石材の獲得地のゆるやかな差異が見えている可能性がある。

石材産出に関わる集団　次に、実際の石材産出と石材獲得を担った集団についてである。これについては、

石材産出地である筑波山南東麓で横穴式石室が卓越するという指摘（石橋 2001）と関連して、石材産地周辺の集団が石材獲得をおこなっている状況が想定される（冨田 2022c）。具体的には、波付岩周辺では石岡市栗村東・西古墳群で、平沢周辺ではつくば市中台古墳群や平沢古墳群で、それぞれ横穴式石室が卓越する状況が認められる。箱形石棺が下位層の通有の埋葬施設である中で横穴式石室が卓越する状況について、石材産出地であるためにより上位の首長から特権的に横穴式石室の構築を許可されたとみられている（石橋 2001、冨田 2022c）。

Ⅴ章では、石材産出に関わる集団の性格により接近するため、例としてつくば市中台古墳群の石室および出土遺物の検討をおこなった。2 号墳には虎頭鈴や貝製飾金具を伴う金銅装馬具が、21 号墳には舶載品の可能性がある三環鈴や圭頭大刀の副葬がそれぞれ確認された。また、横穴式石室の分析からは平沢地域が新しい石室の情報を積極的に導入していること、馬具の集中や古墳群の立地からは平沢地域が水上交通と陸上交通の結節点として機能していた可能性があることを指摘した。これら副葬品や石室の検討から、平沢地域の石材産出集団は、より上位の首長の厳密な管理下にあるというよりも、むしろ外的なモノや情報を独自に入手できるルートをもっている可能性が高い。

地域内最上位首長　最後に、地域内最上位首長とその流通における役割についてである。常総地域の首長が内海を介した水運を掌握していたとする見解は多くあるが（広瀬 2012、日高 2015、佐々木 2021 など）、冨田が指摘するように「最上位首長は石材獲得を行う産地周辺の集団と、石材の運搬を行い利用する消費地の集団を取り結び、流通を保証するような役割を担ったと考えられる」（冨田 2022c：78 頁）という状況が最も実態に近いと思われる。

先に指摘されたように、各古墳の造営者が実際の石材運搬を担っていた可能性が高く、彼らが石材産出に関わる集団と直接的なやりとりをおこなうことで、それぞれの獲得地に対応する石材分布域が形成されているのであれば（淺野 2022）、高浜入りを中心とした最上位首長が一括して石材の集積・管理・流通を担っていたとは考えにくい。むしろ、各消費地の集団と石材獲得をおこなう集団の関係性を取り結び、その流通を維持したり、安全を保証したりする役割を担っていた可能性が高い。

その上で冨田は、6 世紀後半から 7 世紀初頭には最上位階層が同一形態の埋葬施設（複室構造横穴式石室）を採用しており、上位階層の社会的紐帯が反映されていると指摘する（冨田 2022b）。この常総の内海を取り巻く最上位階層の社会的ネットワークが、石材流通を維持・保証する枠組みであった可能性がある。このような内海を介した首長のネットワークは、常総地域の前・中期古墳においても認められるものである（田中 2012、滝沢 2018）。

最上位首長の役割が石材流通の厳密な管理ではなく、その交通の維持・保証にあったため、各地の古墳造営者はそれぞれの事情に応じた選択が可能であったと推測される。鬼怒川・小貝川流域では石材獲得をめぐる地理的事情により板石小口積み箱形石棺になる場合があるほか（荒井ほか 2021）、稲敷台地縁辺部では筑波変成岩板石使用石室と軟質砂岩切石使用石室が近接して採用される状況もみられ（荒井ほか 2020）、埋葬施設の形態決定をめぐる多様なあり方が内包される（関連する議論に冨田 2022b）。そのため先述の通り、中台古墳群などにみられた石材産出地の特殊な状況について、地域内では最上位層のもとに編成されつつも、独自のモノ・情報の連絡路を通じて常総地域外の集団と接続していた可能性が推測される。

４．まとめと今後の課題

まとめ　本稿では、古墳時代後・終末期における常総地域の埋葬施設について、流通システム・階層差・埋葬行為といった異なる視点から分析を加え、それらを統合することで、特に 2 期（6 世紀後葉）以降の状況について立体的な地域構造の把握を目指した。常総地域では身体行為や儀礼的景観に階層的差異が表れている一方で、石材流通システムとしては階層的上位ほど大型石材を獲得できるため、埋葬施設の大きさと形状、そしてそれに起因する身体行為や儀礼的景観は水上交通を介した石材流通に影響を受けていると言える。さらに、箱形石棺は横穴式石室の影響を受けて「室」的に変容するが、その埋葬行為の変化と獲得可能な石材の大きさに影響されて石材が小型化・量産化され、石材流通システムが整備されていく。このように、埋葬施設の形状

や形態は、きわめて多様なファクターが複雑に関連し合って決定されている点を強調したい。本稿はその叙述に重きを置いたものであるが、石材の産出状況や立地といった自然環境的側面、埋葬に際しての行動や規範といった社会的側面、そして階層差や社会的立場などの政治的側面が相互に関連して、埋葬施設の形態がそれぞれに決定されている様相を整理した。

課題　今後の課題としては、まず専業的生産や石工集団としての評価が挙げられる。今回の検討では、地域内最上位首長が石材の流通を厳密に管理するというよりも、むしろ内海を介した首長間ネットワークの中で、造墓者と石材獲得地の集団が直接的にやりとりし、首長はその流通を維持・保証するような状況がうかがえた。そして、平沢地域など石材獲得地の集団が、積極的に外的なモノや情報を導入していたり、横穴式石室を特権的に構築していたりするが、このような石材の産出・加工・流通のあり方が、例えば独立専業的であるのか従属専業的であるのかといった（例えば Costin 2001）、専業の枠組みの中でどのように評価すべきかが問題となるかもしれない。この問題は、広義には 6 世紀後半以降の軟質石材の石材開発とも関連する可能性がある。例えば近隣の下野地域では下野南部地域の首長墓に採用される凝灰岩切石使用石室のために宇都宮丘陵で凝灰岩の石材開発がおこなわれている（小森 2019 など）。伊豆地域では首長墓の家形石棺に使用する軟質石材を産出するが、その地域で独自に横穴墓内に家形石棺を構築する（大村 2020）。もちろん硬質石材と軟質石材では事情が異なるが、石材開発や石材獲得の観点でより構造的な議論が求められる。

また、本研究は「埋葬施設からみた常総地域の地域構造」として主に筑波変成岩を使用した埋葬施設を中心に検討したために、須恵器や埴輪の流通、土師器の地域色といった要素については整理できなかった。当然、流通システムや地域内の社会関係をより立体的に把握するためには、これらの詳細な分析は不可欠である。須恵器については湖西産須恵器が多く流通する一方で（高橋 2009、後藤 2015 など）、少数ながら猿投産須恵器や在地産須恵器の出土も認められる。また、埴輪についてはいわゆる「筑波山系の埴輪」が土浦入りを中心に常総地域各地に流通する。これらの研究も踏まえた上で、あらためて地域構造を分析する必要があるが、既に多くの研究者によって指摘されているように、今後は国造制および評制との関係でこれらの様相をどのように評価できるのか（例えば白石 1991、清野 2009 など）、行政単位と流通のあり方はいかなる関係として整理できるのかなどに注目しながら、検討を進める必要がある。

おわりに

一地域の埋葬施設について異なる視点から検討することを目的として、常総地域の埋葬施設を検討してきた。既に指摘されている通り、横穴式石室などの埋葬施設は多様なファクターが介在して成立する複合的な産物である。そこには必ずしも「情報の共有」や「伝播」といった事象に還元されない事情があることを考慮する必要がある。積み残した課題は多いが、埋葬施設を検討する上での一視点になれば幸いである。

謝辞

本書をなすにあたり、滝沢誠先生、佐々木憲一先生のほか、以下の方々からご指導を賜りました。末筆ながらお礼申し上げます。（五十音順・敬称略）

秋元陽光　稲田健一　内山敏行　賀来孝代　片平雅俊　久保田昌子　小林 孝秀　斉藤　新　塩谷　修
田中　裕　つくば市教育局文化財課　土浦市教育委員会　生田目和利　土生朗治　堀　哲郎　山崎颯太

参考文献

浅野孝利　2022「石棺・石室石材からみた古墳時代常総地域の流通」『筑波大学先史学・考古学研究』第 33 号　筑波大学　33-59 頁

荒井啓汰　2020「常総地域の箱式石棺からみた古墳時代後半期の埋葬行為」『考古学研究』第 67 巻第 3 号　56-75 頁

荒井啓汰　2021「古墳時代後半期の常総地域における埋葬方法とそのプロセス」『筑波大学先史学・考古学研究』第 32 号　1-22 頁

荒井啓汰・冨田　樹・淺野孝利・山崎颯太・大村　陸　2020「稲敷市酒井古墳の測量調査」『茨城県考古学協会誌』第32号　茨城県考古学協会　11-27頁

荒井啓汰・大村　陸・冨田　樹・淺野孝利　2021「筑西市野殿古墳の再検討」『茨城県考古学協会誌』第33号　茨城県考古学協会　139-155頁

石橋　充　1995「常総地方における片岩使用の埋葬施設について」『筑波大学先史学・考古学研究』第6号　筑波大学　31-57頁

石橋　充　2001「筑波山南東麓における6・7世紀の古墳埋葬施設について」『筑波大学先史学・考古学研究』第12号　筑波大学　57-73頁

大村　陸　2020「伊豆凝灰岩製家形石棺からみた古墳時代の石材加工技術」『筑波大学先史学・考古学研究』第31号　筑波大学　21-46頁

清野陽一　2009「常陸国の古墳分布と郡領域」『古代地方行政単位の成立と在地社会』奈良文化財研究所　1-24頁

後藤建一　2015『遠江湖西窯跡群の研究』　六一書房

小森哲也　2019「三番塚古墳の横穴式石室に使用された凝灰岩について」君島利行編『三番塚古墳』壬生町教育委員会　35-43頁

佐々木憲一　2021「水上交通と常陸の古墳」『古代文化』第72巻第4号　古代学協会　93-94頁

白石太一郎　1991「常陸の後期・終末期古墳と風土記建評記事」『国立歴史民俗博物館研究報告』第35集　国立歴史民俗博物館　131-161頁

高橋　透　2009「東日本太平洋沿岸地域出土須恵器フラスコ瓶の編年　湖西産を中心に」『考古学集刊』第5号　明治大学文学部考古学研究室　75-97頁

滝沢　誠　2018「霞ヶ浦沿岸とその周辺の前期古墳」城倉正祥編『野本将軍塚古墳と東国の前期古墳』早稲田大学東アジア都城・シルクロード考古学研究所　157-170頁

田中広明　1988「霞ヶ浦の首長―茨城県出島半島をめぐる古墳時代の研究―」『婆良岐考古』第10号　婆良岐考古同人会　11-49頁

田中　裕　2012「古墳と水上交通―茨城県域とその周辺及び「畿内」の古墳立地を比較して―」『東日本における前期古墳の立地・景観・ネットワーク』東北・関東前方後円墳研究会　67-80頁

冨田　樹　2021「筑波変成岩製埋葬施設の編年」『駿台史學』別冊第173号　駿台史学会　13-25頁

冨田　樹　2022a「常総地域における後・終末期古墳の階層性」『考古学研究』第68巻第4号　考古学研究　72-96頁

冨田　樹　2022b「常総地域における後・終末期古墳の埋葬施設採用原理」『駿台史學』第175号　駿台史学会　63-88頁

冨田　樹　2022c「古墳時代後・終末期における筑波変成岩の流通様態」『考古学集刊』第18号　明治大学文学部考古学研究室　65-86頁

日高　慎　2015「『香取海』沿岸」かながわ考古学財団編『海浜型前方後円墳の時代』　同成社　76-89頁

広瀬和雄　2012「東京湾岸・『香取海』沿岸の前方後円墳　5～7世紀の東国統治の一事例」『国立歴史民俗博物館研究報告』第167集　国立歴史民俗博物館　67-112頁

箕輪健一　1996「終末期古墳と石棺式石室」『婆良岐考古』第18号　婆良岐考古同人会　69-82頁

Costin, C. L.　2001 Craft Production Systems. In G. M. Feinman and T. D. Price (eds.), *Archaeology at the Millennium: A Sourcebook,* pp. 273-327, New York: Springer.

2020（令和２）年度～ 2022（令和４）年度
特別研究員奨励費（課題番号：20J20364）研究成果報告書

埋葬施設からみた常総地域の地域構造

2023 年 2 月 1 日　発行

編　集　　荒井　啓汰
発　行　　筑波大学大学院
　　人文社会科学研究科　歴史・人類学専攻
　　（〒 305-8571 茨城県つくば市天王台 1-1-1）
印　刷　　松枝印刷株式会社